
にゃんこ(?)に転生ですか？ よろしい、ならばネギま！に転生だ

ミケ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

にゃんこ(?)に転生ですか？ よろしい、ならばネギま！
に転生だ

【Nコード】

N0406Y

【作者名】

ミケ

【あらすじ】

死んだ(消滅) 幼女 ネギまに転生 化け猫無双の話です。
文才もこの先の展開もまったく無いのに、ノリと勢いで書いてしまった作品です。

初投稿です。あまり期待しないでください。

最近、更新が遅くなっています。週1〜2の状態ですができる限り更新したいと思います。

第1話 よろしい、ならばテンプレだ(1)(前書き)

初投稿です。

駄文です。

見切り発車です。

文才皆無です。

ですが、後悔はしていない。キリッ

第1話 よろしい、ならばテンプレだ(1)

目が覚めると、そこはたらいの中だった。

「(これは『なかなか良いたらい(木製)』だな)」

「(・・・・・・・・)」

「(・・・・・・・・)」

「(ふう)」

そろそろ現実を見ようか(お前にたらい(木製)の何がわかるんだ？というツツコミはなしで)

「(どうしてこうなった!)」

いや、焦るんじゃない。

まず今の状況を整理して、冷静に対応するんだ!!

Q 俺の名前は？

A ーただ今名無しです

Q 年齢は？

A ー一応転生直後だから0歳のはず

Q 今の状態は？

A どこからどう見ても仔猫です

Q とりあえず何故仔猫？

A …… 少し心当たりがありますが今はどうでも良いです

Q 今の状況は？

A たらい（木製）の上のにゃんこ状態で川を流れてます

Q 泳げますか？

A 仔猫なので溺れます

Q この状況で冷静になれますか？

A 無理です 誰か助けて下さい

Q 誰のせいですか？

A 確実にあいつのせいです（怒）

Q 今、一番やりたいことは？

A この状況から抜け出してあいつにO・H・A・N・A・S・H・Iしたいです

まあ何故こんなことになったか考えてみるか、うすうす気が付いてはいるんだが……

それは遡ること数時間前

「知らない天井だ」

なぜか言わなければいけない気がした。後悔はしていない！

ん？何か電波が入った気がするが気にしない

「ここはどこだ？」

上を見ると

どこまでも続く白い空間

下を見ると

どこまでも続く白い空間

前を見ると

どこまでも続く白い空間

右を見ると

土下座している幼女（さらさらの金髪）

左を見ると

どこまでも続く白い空間

後ろを見ると

どこまでも続く白い空間

「・・・・・・・・」

上を見ると

どこまでも続く白い空間

下を見ると

どこまでも続く白い空間

前を見ると

どこまでも続く白い空間

右を見ると

ものつつつすぐく土下座している幼女（ふるふる震えてる）

左を見ると

どこまでも続く白い空間

後ろを見ると

どこまでも続く白い空間

「・・・・・・・・」

上を見ると

どこまでも続く白い空間

下を見ると

どこまでも続く白い空間

前を見ると

どこまでも続く白い空間

右を見ると

ものつつつつつつすぐく土下座している少女（上目遣い＋涙目でちらちら見てる）

左を見ると

どこまでも続く白い空間

後ろを見ると

どこまでも続く白い空間

「（これはアレなのかっ！？アレしかないのかっ！？）」

今俺の目の前には、

1 真っ白な空間

2 テンプレ少女による土下座

フム、この二つの状況から導き出される答えは

「よろしい、ならば転生だ！！」

「ふうえっ？！（ビクッ！）う、うええええええええええんんんんんんん！！！！（いきなり的大声に驚き、涙を流して逃げる少女）」

「

ピンポン

幼女を落ち着かせるまでお待ちください

第1話 よろしい、ならばテンプレだ(1)(後書き)

同日に編集って・・・

ごめんなさい!!

第零話 よろしい、ならば死に際だ（前書き）

今回は、短いです。

第零話 よろしい、ならば死に際だ

さらに遡ること数時間前

俺、桐谷悠樹^{きりやゆうき}は悩んでいた。それは、今週末の義妹の誕生日プレゼントを買ったためだ。

俺の家族は、父、義母、義妹、俺、の四人家族だ。

母親は体が弱かったため、俺が3歳のときに病気で亡くなった。

そして、俺が小学校に入学したころ父親が今の義母と再婚した。

義母には俺と一つ違いの「香織^{かおり}」という娘がいた。だが、再婚して間もなく両親の仕事が忙しくなり、香織の面倒は俺がみるが多くなっていった。

自慢じゃないが香織はかわいい。きれいな黒髪、白い肌、可愛らしい瞳、ピンク色の唇。（イメージとしては某友人が少なさそうな人の集まりの戦国武将の名前の女の子を黒髪にした感じ）

そして、幼いころいつも自分の後を付いてきて楽しそうに笑う義妹のことを本当の妹のように可愛がってきた。

そんな大切な妹のために、バイトの給料一か月分（今月は5万）を

持ってプレゼントを買いに来たわけだが

「――良い物が見つからない――」

どれだけ探しても『これだっ！』というものが見つからないため
学校が終わってから二時間ほど雑貨屋やアクセサリーショップを彷徨っていた。

「（そろそろかえらなきゃいけないか）」

日が傾き始めそろそろ帰ろうかななどと考えながらアクセサリー店を出て歩いていると、ふと近くにあった雑貨店が目を引いた。

ガラス越しに見えたものに視線が止まる

「（おおっ！これはなかなかいいな）」

自分の中で『これだっ！』という感覚があり、迷わずそれを手に取った。

いい物を買ったとご機嫌な帰り道

財布の中身がほぼ無くなり明日の昼飯をどうしようかと考えながら歩いていると、少し先に香織の姿が見えたので買ったアクセサリーを隠した後、驚かせてやろうと後ろからゆっくり近づいてポンツと両肩に触れた瞬間

意識が白に覆われた

第零話 よろしい、ならば死に際だ（後書き）

今日中にもう一話いきたいです

同日に改定中

第2話 よろしい、ならばテンプレだ(2) (前書き)

幼女の話し方え

完成度が低いミケを許してください

第2話 よろしい、ならばテンプレだ(2)

少し熱くなつてしい幼女を怯えさせてしまった。

その後、幼女を落ち着かせるのが大変だった。

落ち着かせるために頭を撫でたらものすごく懐かれた。(金色の髪
の間に猫の耳が見えた)

とても可愛かったのもつと撫でテクを披露したらものすごいこと
になった。(想像にお任せしますby作者)

ピンポーン 幼女が落ち着いたので説明してもらっています。

「簡単にまとめると、

1 幼女は神様である

2 私生活や仕事のストレスから酒を飲みまくって酔っ払った(神
様はエターナルロリータです)

3 そのまま寝てしまい風邪引いた

4 それでも仕事はやってくる

5 がんばったが、失敗した

6 俺の存在が消滅

7 魂回収+土下座

8 説明中 今ここ

というわけだな」

幼「は、はいそうなんですぅ／＼。クチュンッ！

もどそうとしたけど手遅れでどうにもならなくてえクチュンッ！

それであなたあ・・・桐谷悠樹きりやゆうきという存在を消してしまいましたあ
クチュンツ！」

お前のせいかと思うと怒りが沸いてくるが、これだけ申し訳なくされ
ると怒ることもできない。

そして雰囲気が妹に似ている。

俺はまだ高一で、まだまだたくさんやりたいことがあった。

俺は彼女も欲しかったし、マンガやラノベの新刊も読んでいないし
大切な義妹の誕生日プレゼントも渡せていない。

「存在が消滅って言うのはどんな意味なんだ？」

幼「あなたがいたと事実がなくなつてえ、いなかったことになりま
すう、ほんとうにごめんなさいい（涙）クチュンツ！」

「
——そうか」

「（死んで悲しまれるよりは存在が消えてしまったことが救いな
のかもしれないな）」

幼「あのうゝ考え事しているところ申し訳ないのですがあ、今後の

ことでお話があるのですがあ。クチュンツ！」

すっかり忘れられていた神様（幼）

幼「ん？なにか馬鹿にされたような気がしますけどあ、今はいいですう。クチュンツ！たぶん判っているとは思いますがあ、元のセカイの輪廻の輪から排除されてしまったあなたは元のセカイに戻ることはできないのでえ

1 別のセカイにトリップ

2 別のセカイに転生

3 ちよつと強引に神格化して部下に／／／（ポツ）

4 （絶対にさせませんが）消滅

の4つから選んでもらいますう。クチュンツ！」

ふむ、4は勿論なし、3は大変そうだから嫌、2か1だな。
とゆうか3はどうやるんだ？

「3はどうやるんだ？」

「それはあ／／／簡単ですけど言いにくいのでえ．．．
実際にやりますかあ／／／」

かみさまのターン

かみさま（ほしよくしゃ）のどうこうがたてにわれている。
ゆうきはていそうのききをかんじた。こうかはばつぐんだ！！

ゆうきのターン

ゆうきはごういんにはなしをもどした。
ゆうきはにげきった！

「どんな世界に行くんだ？」

これは大切なことだ。心構えがあるかないかではだいぶ違う。決して逃げたわけではないんだっつ！

幼「むう、ざんねんですう（ボソツ）。なら、1か2ですねえ。クチウンツ！逝ってもらうセカイは私が管理しているセカイになりますからあ

1、弾の リア

2、魔法先生ネギま！

3、イスクール・オブ・ザ・ツド

4、P S Y R N

の4つのセカイのどれかですねえ。クチウンツ！」

はいアウトオオオオオオオオオ！！！！

普通の世界でいいのにヤヴァイフラグがいつぱいだああああ！！！！（特に3は悪意しか感じられない）

「3と4はなしで、あんなに危ない世界には逝きたくない！となる
と1か2だが、ネギまのほうが好きだからネギまに転生させてくれ」

アンチするかは気分と立場しだいだな

幼「ネギまのセカイですねえ。クチユンツ！転生すると元の名前は
忘れてしまいますう。本当は記憶も消えるんですけどおサービスで
すう。それと特別に名前をぶれんとしますう（最初のプレゼント
が名前／／／）あとは、お詫びにいくつか願い事を叶えますから何
がいいですかあ？クチユンツ！ちよつと無茶なことでもいいんです
よ／／／」

「（ゾクツ）・・・なら、家族が幸せに暮らせるようにしてくれ。
あと義妹に俺が買ったプレゼントを渡してくれ。あとは氣と魔力を
無限にして、身体はできるだけハイスペックにしてくれ」

幼「能力とかはいいんですかあ？いろいろ付けますよう？クチユン
ツ！」

これはもう決めてある

「そうだな。あらゆる効果を付与した魔道具を無から創造できる能力『魔具創造』の能力をくれないか」

幼「いいですよーいろいろいじって死……ないようにいろいろ強化しておきますう。クチュンツ！もういいんですかあ？クチュンツ！」

「ああ、なら送ってくれ」

幼「わかりましたあ、でもその前におねがいしていいですかあ？クチュンツ！」

「ん、なんだ？」

幼「実は私には名前がないんですう。クチュンツ！あなたに付けてもらいたいんですけどお良いですかあ？／＼クチュンツ！」

「それぐらいならいくらでもいいぞ
なんてどうだ？」

そうだなあ、アルスな

アルス「アルスですかあ／＼／＼ではあなたには
——
と言う名前を送りましょう。クチュンツ！私から送られる名前な
ので私という神との縁が深くなりますよう。それではいつてらっ
しゃい。死んだら私のところに来る様にしましたけど（ボソツ）」

「えっ、なn
——

彼の身体が光りだして一瞬の後消えた

アルス「じゃあ、サクサク書き換えましょう　クチュンツ！」

アルス（幼女）は書類になにかを書き込み始めた

アルス「なんだか気分が良いですね　クチュンツ！ふわふわし
ます　クチュンツ！」

だがアルス（風邪）は気づかない。自分が思っていた以上に風邪が
酷かったことに。

だから、あんな悲劇が起こってしまい慌てていろいろ付け加えたの
はまた別の話。

第2話 よろしい、ならばテンプレだ(2) (後書き)

神様(幼女)の名前はギリシャ神話の月の女神アルテミスからとりました。
アルス

同日改定

主人公設定＋アルスの失敗（前書き）

やっと主人公設定

後悔は、していないっ！キラッ

主人公設定+アルスの失敗

主人公設定

旧名 桐谷悠樹 (きりや ゆうき)

新名

性別 男

年齢 0歳 (16歳)

種族 ???

容姿 人VER 十人中八人がかつこいいと言う容姿 (BLACK CATのトレイン「ハートネット」 肉体変化によって20歳頃まで変更可能)

猫VER 黒猫

性格 優しい 無口だが心の中ではしっかり反応している 少し気まぐれ シスコン 鈍感

能力値 (F a t e 風) 「」は猫時

筋力 A - 「B -」

耐久 C + 「C -」

敏捷 A 「S -」

魔力 EX

気 EX

幸運 S (アルスの加護)

能力

名称 魔具創造 (アイテムメーカー)

効果 好きな魔道具を造り出せる。創造や使用には多くの魔力や気を使うが両方ともEXなので気にせず使えるが、一回の使用にこの

かの最大魔力の30%近く必要である。（魔道具によって変化）

名称 神からの贈り物（ギフト）

効果 いろいろな能力を神様が（勝手に）贈った

名前をもらったことも関係しており、さまざまな効果が得られる。

名称 肉体変化（にくたいへんか）

効果 神からの贈り物。アルスの「年老いた姿は見たくない」と言うわがままから付与された能力

名称 猫化（ねこか）

効果 神からの贈り物。アルスの「ねこ耳でおそろい／＼／＼」と言うわがままから付与された能力

完全な猫化から人の状態にねこ耳、尻尾、猫の手足などに変化することができる

名称 完成（ジ・エンド）

効果 神からの贈り物。めだかな物語のアレと同じ能力

e t c , , , , , , , , , ,

名前 アルス

性別 女

年齢 エターナルロリータ

容姿 金髪、猫耳、尻尾付き ちっこくてかわいい

実は月を司る神様

性格 ドジ 少し黒い 甘えたがり

能力値（F a t e 風）

筋力 神様だもん

耐久 神様だもん

敏捷 神様だもん

魔力 神様だもん

気 神様だもん

幸運 神様だもん

能力

名称 神様だもん

能力 戦うときには諦める

ナニこれ理不尽 by「徹夜明けのハイテンションでやっちゃった」
と語る容疑者_{ミケ}

アルスSIDE

神が存在する場所と人間が存在する場所では時間の流れが異なる。
神は大量の仕事をゆつくりとした時間の流れの中でこなしていく。
（それでも仕事が多くてストレスが溜まるが）

アルス「あれえ？これはどうゆうことでしょう？（汗）」

そのため、それに気づいたときには風邪が治っておりすぐに自分が失敗したことに気がついた。

アルス「決して撫でられたのが気持ちよかったとかあ、自分の好きなタイプだったとか考えていたわけじゃあないんですからねえ。勘違いしないでくださいよう」

決してツンデレでもどうしようもないため、神は彼のために書類に手を加え彼に手紙を送った。

アルスSIDEEND

主人公設定＋アルスの失敗（後書き）

名前とアーティファクトが未定な件にいて
申し訳なく思っています。

ヒロインどうしよう（汗）

アンケートをとりたい、、、、

第3話 よろしい、ならば確認だ（前書き）

どうにか名前は決まりましたが

アーティファクト、ヒロインと問題は山積みです。

こんな粗末なものでいいならどうぞ

第3話 よろしい、ならば確認だ

SIDE

我輩は仔猫である。名前はまだない。

違うんです。言ってみただけなんです。ほんの出来心と徹夜明けのテンションのせいなのです。だからモノを投げつけないでください。ほんとにゴメンナサイ。調子に乗りました、スミマセンデシタ。

……電波を受信していたみたいですね。もう大丈夫です。進めましょう。

さて未だに流れ続けている私ですが何もできないので、この『なかなか良かったらい（木製）』のなかでゆっくりくつろいでいました。だってどれだけ強くても祿に制御できない仔猫ですよ？身動きが取れません。しかもこの『なかなか良かったらい（木製）』のサイズは

仔猫三匹分といったところでしょうか、ものすごくくつろげますし落ち着きます。一人猫鍋状態です。

口調が少し変わっている気もしますが転生の影響でしょう。そこまですでにしません。それより此処がどこかと何故こうなったかが気になります。

そこでふと何か違和感を感じ（転生してから感覚が鋭くなったように）、『なかなか良いらしい』の底を見ると

文字が浮き出ていました。ちゃんと文字が消えるのか心配です。

「こんにちはあ、アルスですう。少し失敗しましたあ ごめんなさいですう。

ナニを間違えたかというと種族ですう。本当は人間としていてもらう予定でしたがあ、私がいろいろ弄ったのでセカイに人として認識されなくてエラーが出てしまい今の状態（私と同じ猫状態）と言っわけなんですう。

修正はしたのもう大丈夫ですからあ思う存分生きてください。

私はここで待ってますよう（行っちゃうかもしれませんが）。あとあ、そこは並列セカイなのでえ原作ブレイクしてもかまいませんからあ。今は大戦の十年前のイギリスの田舎ですからあ。それに十年間も修行する時間がありますからがんばってくださいねえ

それではあ、能力情報、種族名（私がつけましたあ）、あなたの名前（これも私がつけましたよう）、そのほかのいろいろな情報を送りますからねえ、普通なら廃人確定ですが安心してくださいい決して痛くしませんし廃人になんてなりませんからあ。

まあ少しチクリとするかもしれませんが それくらいは大丈夫ですよねえ じゃあいきますよう」

数秒後、頭の中に異物が入り込むような感覚があり、鈍い痛みの後
に一気にたくさんさんの情報が入り込んできた。

だがそれも数秒で終わり、まだ違和感と気持ち悪いが今の状況を理
解した。

まずは自分の名前のこと。これは、神様からもらった名前のほうで
自分の名前は自分で思い出すことができます。そして、私が神様
から貰った名前は『リゲル』そして種族は・・・『古猫^{こねこ}』？ よ
くわかりませんが単純に霊格の高い猫つまり猫族の上位種でしょう。
その霊格はかの龍樹や真祖の吸血鬼と同格かそれ以上らしいです・
・

何だかヤツちまった感がすごいですね。しかもこれ不老不死じゃな
いですか？
少し試してみましようか・・・

リゲルSIDE

少しやりすぎちゃったりゲルです。なにぶん初めてだったものですから加減が難しく、魔力と気が放出してしまい、それが混ざり合い・

周りが爆発しました。そのおかげで、岸まで着きましたが周りはぼろぼろです。

ん？私ですか？すぐに回復しましたよ。もうすでに人外ですからこの程度じや痛くも痒くもありませんね。ですが、冷静に考えればわかることなので少し焦り過ぎてしまっていたようです。

そんなことよりすごいのがこの『なかなか良いたらいい（木製）』です。傷ひとつついていません！この『なかなか良いたらいい（木製）』は実に良いパートナーになりそうです。

さて、陸にも付けたので早速能力の確認をしましょう。まずは、人型になれるかどうかですね。

身体に流れる力を徐々に人の形に変化させていく、そして力の濃度を上げていき最後に身体を力に重ねるようにイメージすると一瞬の発光の後に、元の自分を成長させたような感じになりました。

少し身長が伸びてますね175cmくらいでしょうか。まあ、それはとりあえず後でいいです。まずは周りの修復の魔具を造らないといけません。

創造したものはただのバット（木製）。能力のイメージは某天　ちやんが使っているアレです。なんだかこれを持つとフルスイングしなくなりますね。

では、気を取り直して元の状態にもどれと念じながら魔力をこめ、手首を使って軽くまわします。

「あの独特のフレーズが流れる」

うん、どうにかなるものですね、ただのバットに周囲のものの時間を巻戻すという概念を貼り付けたようなものなので、魔力消費が半端じゃありませんがどうか使えます。

でもこれは完成度が低いですね。無駄が多すぎて能力を引き出しきれません。なのですぐに破棄しました（大量の魔力を流し込めば耐え切れずに塵になるんです）

いろいろ試して慣れていくために修行しないといけませんね、ならばアレ（・・・）を造ってみましょうか。

そうですね！修行と言ったらダイオラマ魔法球です！！今回造ったのは1時間を5日にする物です。超強力です。魔力が無限にあるからこそできる荒業です。この中で魔道具製作を極めてあの計画を実行するのです！

エターナルロリータ保護計画を！！

つと、人がこっちに向かって来ているようですね。早く此处を離れ
ましょうか。

第3話 よろしい、ならば確認だ（後書き）

後書き

すぐにわかると思いますが、造る物はカシオペアですね。

無限の魔力と10年×365日×24時間×5日＝438000日
1200年ありますからどうにかありますよね（汗）

修行の基本は、魔力と気の効率化です。

完成が^{ジ・エンド}あればすぐにできると思いますので

次回はキングクリムゾンします。

最後にヒロインとアーティファクト案を募集します。

誰か、意見をください

第4話 よろしい、ならば計画準備だ（前書き）

修行回です。とはいっても完成があるのでサクサクいきます。戦闘描写はありませんが近いうちに入れる予定です。

駄文なので修正が入るかもしれませんがとりあえず投稿です。

第4話 よろしい、ならば計画準備だ

リゲルSIDE

まずは、エターナルロリータ保護計画の説明をしよう。

この計画は時間跳躍の魔道具を造りエヴァが吸血鬼化した直後に保護し、自衛できる程度の魔法を教えようと言う計画である。

この計画は魔法の師であり恩人という立場につけ、正義の魔法使いからエヴァ自身を護ることができるといっすばらしい計画だ「どこいきやがった!」・・・すばらさ「まだ近くにいるはずだぞ捜すんだ!」・・・計画であら「みつけたぞっ!」・・・・・・・・・・(グスッ)

「そこにいるぞ!捕まえる!」

「何だこの猫は?魔獣なのか?」

「これだけ魔力を持った猫なんてこの世界にいるはずないだろ!」

「おいっ!そっちにいったぞ!」

「任せろ!」

「ハアハア・・・もふもふ・・・ふわふわ・・・ジュルリ」

ただ今、正義の魔法使いに追われております。そして最後のやつが怖い（ガクブル）　何か大切なものを失いそうな気がする。少し危機感（貞操の）を覚えながら猫特有の動きで回避し続ける。さて、何故こんな事になったのかという・・・

服を着ていないため猫になって逃走

魔力が少しもれてて見つかる

正義の魔法使いたちが魔力を持った猫＝魔獣＝悪と判断して問答無用で捕獲しようとしてくる

逃走中　今ここ

という訳で追われているのです。

「おいっ！ちゃんと捕まえろ！」

「お前こそしつかり追い込めよ！」

「「お前らバカだな」」

「「何だっ！」」

「魔法使えばいいだけだろうがっ！　『風の精霊11人。縛鎖となつて敵を獲れえろ！　魔法の射手・戒めの風矢』」

やっと魔法を使ってきました。今すぐにも逃げる事はできますがチャンスですから視ておきくべきです。

「チツ！はずしたか。」

「しっかり狙えよ！」

「（フツ）下手だな」

「なんだとっ！」

「なんだ？戦るのか？」

「本当の魔法の使い方を見せてやろう！」

「上等だ戦ってやろうじゃねえか！」

「（フツ）格の違いを思い知るが良い！」

・ ・ ・ ・ ・

その後、見つからないように隠れながら正義の魔法使いの魔法を視て「魔法の射手」などの魔法を完成させました。あの後正義の魔法使いの皆さんは仲間割れでぼろぼろになりながら帰って行きました。そして私はというと・・・

「『魔法の射手 速弾・氷の17矢』」

トーン！

魔具で認識障害と人払いの結界を張り、魔法発動媒体として短めの

杖を造りだして魔法の練習中です。魔法を覚えなくても魔具を使えばいいのだけなのですが、使える手札^{カード}が多いに越したことはありませんし、エヴァに教えるつもりならば自分がその魔法を理解していなければなりません。なので実際に使ってみているわけなのですが、少し問題がありまして・・・

「使える魔法が少ないですね。」

その問題とは、見た魔法が圧倒的に少ないということです。さすがに正義の魔法使いさん達も仲間割れでは強力な呪文を使っているんですけど（使えなかっただけかもしれないが）。

見たは完成のおかげで十全以上に使いこなすことができますが、視ていない魔法はどうしようもありません。ですから今使える魔法は

1 魔法の射手

2 武装解除

3 治療

4 認識阻害

5 障壁

の5つしかありません。なので今の私の攻撃方法は魔法の射手だけなのです。教えることもできませんし魔法だけでは自分の身も守れません。（魔力でゴリ押しすれば話は別ですが）

ですから今は魔法の修行に専念します。計画を後回しです！まずは魔法世界に行ってみましょうか………

キングクリムゾン！！

あれから3年が経ちました

私は魔具をいくつか使って魔法世界に渡り、様々な魔法を視てきました。あれからやったことといえば旅費を稼ぐために剣闘大会に参加して対戦相手の技を本人以上に使いこなすプライドをへし折ったり、とある国の魔法庫に侵入しありとあらゆる魔法書を読破したり、紛争地帯に近い村を巡り治療して

回ったり、紛争で身寄りのいない孤児達を村に連れてきたり、そこを襲撃してきた（自称）正義の魔法使いを殲滅したりしてました。最初は殲滅することに抵抗がありましたが、奴らがやっている犯罪の数々を知ってからは情け容赦なく一人も残さず処分しました。あいつらは嫌いです！

おかげで正義の魔法使いからは『^{ダークレイザー}黒の抹殺者』、『^{ヘルキャット}死を運ぶ黒猫』、『^{サイレントテラス}無音の掃除屋』、『あいつ速すぎて攻撃あたらねえ』と呼ばれ、紛争地帯の村では『^{ヒーラー}癒し手』、『もふもふ様』と呼ばれていた。（この頃ネコ派が圧倒的に増えた）

十分なほど技を磨いた私は、計画を実行ために魔具を造り始めた・・・

第4話 よろしい、ならば計画準備だ（後書き）

どうだったでしょうか？

あまり文才がないので雑な話ですみません。

少しでも楽しんでもらえたら幸いです。

次回、エヴァとの邂逅です。

第5話 よろしい、ならば計画実行だ (1) (前書き)

読み直しては改定を続けています。

一話に付き数回は改定しているという衝撃の事実……
はぁ……

エヴァの過去を書いてみましたがおリジナルです。

グロいです。苦手な人にはお勧めできません。

シリアスも入ってます。

第5話 よろしい、ならば計画実行だ (1)

リゲルSIDE

ふうやつと完成しました。これこそ私が造った時間跳躍魔具、その名も『ベテルギウス』。これは使用者の魔力を大量に吸い取りますが、簡単に時間や場所を指定できるといふ素晴らしいものです。・・・えっっでもエヴァンジェリンのいる場所が分からないから駄目だろうっ？と言いましたか？

心配には及びません。こんなこともあろうかと造っておいたのがこの古めかしい「長杖」その名も『導きの長杖』^{ガイダンス}といい、その効果は某便利な未来のロボット猫のとある道具の数倍以上の効果です。これで大体の方向がわかるのでその方向へ行けばいいだけです。我ながら素晴らしいものを造ったと自負しています。

これで安心して計画を実行できます。一応切り札も造っておいたのでもし戦闘になっても負けるはずがありません。それでは、

『ベテルギウス待機状態』^{スタンバイ} 設定開始 座標指定「イングランド」^{プログラミングスターポイントセット}
タイムセット
時間指定「600年前」 設定終了 待機状態解除 起動まで(力
ウントダウン) 5, 4, 3, 2, 1, 0 ベテルギウス始動しま
す』

それでは目的を果たしにいきましょうか……………

エヴァンジェリンSIDE

私はここで死ぬのだと思った。体のいたる所に傷があり、血が付いている。今は亡きアイツにかけられた呪いでこの体になってからは傷がすぐに治るのだが、この一週間休む間もなく襲撃してくる人たちによって身も心も限界だ。

目の前には光のようなものを飛ばして攻撃してくる杖を持ったたくさんの人たちがいる。私は逃げようとするが体が全く動かない。そして私は近づいてくる光の束を見ながら目を閉じた……

十数年前

私はとある国の辺境伯の娘だった。両親と我が家につかえている執事やメイドさんたちと一緒に暮らしていた。毎日が楽しくて、優しい人たちに囲まれて私は幼いながらに自分が幸せなのだと感じていた。だが、私の10歳の誕生日にすべてが変わった。

その日はみんな舞踏会の準備に忙しくて私は一人ぼっちだった。私の誕生会の準備の為なのだということもわかっていたし、我儘を言っただけなのに準備してくれてる人たちが心から祝福してくれてる人たちに迷惑をかけたくなかった私は自分の部屋ベットのうえで人形遊びをしていた。

そして、遊んでいるうちにいつのまにか寝てしまったみたいで、起きたらもう外が暗くなっていた。もう舞踏会が始まっていてもおかしくない時間なのに誰も呼びに来ていないことを不思議に思いながら私は急いで部屋を出た。

既に、舞踏会が行われているはずだから急いで大広間に向かった。使用人の人たちとすれ違うのに少し不安を感じながら大広間の扉に手をかける。扉が厚くて聞こえないが、中は少し騒がしいようだ。多分私が未だに来ていないことのせいなのだと思います、申し訳ない気持ちでいっぱいになりながら扉を開けたと同時に中から叫び声が聞こえた。

そこには地獄が広がっていた

「いやあああああ――――――――――！」

「痛いっ！痛いようっ！」

「誰か助けてくれ！まだじにだぐない」

「あしっ！わだじのあしがないの！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そこには、血まみれになった人、足のない人、内臓が出ている人、すでに息絶えた人たちがいた。

私は一瞬で何が起こっているかわからなくなり何もしゃべることができなかった。だから一人のヒトが近づいて来ていることに気がつかなかった。

「ごきげんようお嬢さん。君が今夜の主役かい？」

話しかけられた瞬間、私の周りの時間が止まった気がした。すぐそこには全身黒い服を着た若い紳士のような恰好をした人がいる。

一目見ただけで気づく強烈な違和感、原因は一両手に持っている血まみれのナイフ。

それは、この惨状を起こしたのは自分であると宣言していることと同義である。私の体が震えだす。生まれて初めて感じる死の恐怖が体を支配する。逃げたいと思うが逃げられないことは確実だ、なぜならすでに私の目の前に彼はいるのだから。

「余興は気に入ってくれたかい？少しでも楽しんでくれたなら満足だよ。」

私は彼の言っていることが理解できなかった。この惨状を余興といった彼のことも理解できるはずがなかった。

「エヴァ！はやく逃げるんだ！」

「はやくその男から離れなさい！」

そこに両親の声が聞こえた。無事であったことを喜びながらそちらに向くが、次の瞬間っ！

「今は僕が彼女と話しているんだ。邪魔しないでくれないかい？」

ズシュッ！

嫌な音が聞こえたと同時に、胸からナイフの柄を生やした両親が仰向けに倒れた。

「あつ、えっ？」

目の前の光景が理解できない。両親の胸から血がどんどん出ていて、うめき声をあげている。このままでは両親が死んでしまうという事実が理解が追い付かない。

「こんなまったく面白くない田舎に立ち寄ったら、ここの領主の娘が誕生会を開くと言ったから見に来たのさ。馬車を襲って入ってきたのはいいけど、主役がいなかったから適当に話を合わせながらその辺の豚と話してたけど自慢ばかりで面白くないし、かといって雌豚どもは臭い香水の匂いをさせながら色目使って来るからつい苛々して殺しちゃった？」

でもそのおかげで君の素敵な表情も見れたからあいづらにも感謝しないといけないね。それはさておき、キヨウはキミの誕生日だねだから君に素敵なプレゼントをあげよう。これは僕がいつか不老不死になるための研究してきたことによつてできたモノ。不完全だけど不老不死と強大なチカラを与え、その身を闇に落とす『呪い』。その実験台第一号の称号を君にあげよう」

彼が何かを唱え始めるが、私はそれを聞いてはいない。目の前の両親を見続ける。

「く汝にそのチカラを与えん。ふう、じゃああげるよ。この呪い^{チカラ}を・・・」

突然目の前が真っ黒になる。そして体の中のナニカが変わっていき熱いものが注がれる感覚して身を裂かれるような激痛が走る。やつと痛みが去り目が見えるようになると目の前には両親を傷つけ、大切な人たちを殺したヤツがいた。その瞬間、私は感じるがままにチカラを振るう

「おまえがつ！おまえがあ~~~~~！！」

私の右手が彼の胸に突き刺さる。

「ごふっ！なんだこの力は！？吸血鬼にただけのはずなのに！こんな力があるはずがない！こんなことはあり得ない！僕が死ぬなんてことあるはずg~~~~~！！」

ヤツは声にならない叫び声を出しながら燃え始めた。その炎は黒く、周りに燃え広がってゆくが私は急いで両親の元に駆け寄る。

「とうさま！かあさま！」

両親を呼びながら肩を揺らす・・・だが両親はすでに息を引き取っていた。

その夜、一人の少女の慟哭が燃える屋敷の中に響き渡った・・・

エヴァンジェリン SIDE

いつまでたつても痛みがこないことに気がつく。目を開けて確認しようとする、頭上から声が聞こえてきた。

「ふう、いきなり危ないですね。大丈夫ですか可愛いお嬢さん？」

そこには、黒い髪をした男の人が立っていた。その人を見た瞬間、「トクンッ」と胸が高鳴った気がした……

第5話 よろしい、ならば計画実行だ (1) (後書き)

更新がきついです。

内容は変えませんが後で改定します。

評価、感想、ヒロイン、アーティファクト案待ってます!!

第6話 よろしい、ならば計画実行だ (2) (前書き)

明日は休みだからストックを貯めておきたいです。

2話更新できたらしいな・・・

第6話 よろしい、ならば計画実行だ (2)

リゲルSIDE

ベテルギウスを使つて時間跳躍した私が一番初めに見たものは数人の魔法使いから放たれたであろうたくさんの『魔法の射手』でした。たった三年でしたが密度の濃い生活(逆恨みされてよく襲撃されていました)をしてきた私は一瞬で気持ちを切り替え、すぐさま周囲を確認し、私の魔法発動媒体である指輪をつけます。目の前には複数の魔法使い達があり、『魔法の射手』を放っています。その狙いの先には小さな金髪の少女が傷だらけで倒れています。私はすぐさま無詠唱で『多重超高密度魔法反転障壁』を少女の周りに張りめぐらせます。

これは3年間の修行期間時に創り出したオリジナルスペルのうちの1つで多重高密度魔法障壁に大量の魔力を流し密度を底上げし、障壁内で循環させることで外部からの魔法を強引に吸収し障壁に編みこんである反射魔法と増幅魔法カウンターによってその魔法を倍返しにするという極悪な障壁です。いつもは攻撃を受け流すように超高密度魔法障壁を薄く張るだけですが、何故か使う魔法を間違えてしまいました。

けっ決してわざとなんかじゃありませんよその小さな少女がエヴァンジェリンだとすぐに気づいたからなんてことは決してありません。

「ふう、いきなり危ないですね。大丈夫ですか可愛らしいお嬢さん？」

周囲は木々に囲まれており気絶した魔法使いの集団たち以外には誰も居なさそうなのでそこにいる少女に声をかけます。

その姿はまさに満身創痍で、私は彼女が口を開く間も与えずに彼女を抱き上げすぐさま周囲を魔法で探り、見つかりにくいであろう場所に向かいます。

「えっ！あのっそのっ・・・キュウ／＼」

彼女は少し慌てたようなくさをした後何故か気絶してしまいました。こんな状態ですからきつと疲れていたのだと思い、彼女が休めるように準備を始めます。まずは周囲に認識障害と人払いの結界を張り（もう魔具を使わなくても簡単に結界が使えるようになりました）ダイオラ魔法球を取り出します。周囲に索敵の魔法をかけた後、少女と一緒に魔法球に入ります。

さて、彼女の目が覚めたらまずは説明しなければいけませんね・・・

ふと、目がさめる。

自分はベットに寝かされているようだ。身体を起こして傷の具合を確かめるともう完全に治っていた。自分は何故こんなところで寝ているのだろうかを考える。あの変な集団に襲われてからの記憶がはつきりしない

コンコンッ

「っ！！」

すぐさま起き上がり周囲を確認してすぐ身動き出せるように身構える。すると、黒髪の十代後半ぐらいのかっこいい男の人が料理を持って入ってくる。

「調子はどうですか？ほとんど治っていましたが傷は治療せて貰いましたけど、どこかおかしいと感じるところはありませんか？」

しばらくの間、声が出ない。その様子を見て男の人は慌てた様子で

「どこかおかしいところがあったんですか？すぐに見せてください！」

と言ってきた。しばらく放心していた私だが、倒れる直前のことを

思い出し顔が熱くなっていることを自覚しながら肝心なことを聞く。

「助けてくれたのか？」

少し警戒しながらこの数年で身につけた少し威圧するような口調で彼に問う。

「そうですよ。まずはこれを食べてください。お腹が空いているでしょう？本当は服も用意したかったのですが、女物の服なんて持っているわけがないので・・・」

その言葉に警戒を少し強める。なぜ見ず知らずの自分にこんなに優しくしてくれているのか判らない上に傷が治るところを見られたのだ。しかもそれを気味悪がるわけでも無く私に話しかけてくる。

本来ならすぐに逃げ出すところだが此処は彼の家のように、私はこのことは全くわからないし何処に逃げればいいのかもわからない。そして一番の理由は逃げたとしても逃げ切ることはできないからだ。どんな方法を使ったのかは知らないが私を追ってきた人たちを一瞬で倒してしまふほどの人なのだから、私が逃げ切れるわけが無い。だから私は彼から少しでも情報を聞き出そうと彼に話しかける。

「ここはどこだ？」

「私の所有している別荘ですよ。ああ、自己紹介を忘れていました。私の名前はリゲルといいます。化け物どうし仲良くしてもらえると嬉しいです。真祖の吸血鬼エヴァンジェリン？」

一気に警戒を最大にして彼の動きから目を離さない。少しでも油断しないように、彼が油断した瞬間に全力で逃げられるようにしつつ、気になることを言った彼に問う。

「確かに私は吸血鬼だ。だが真祖とはどうゆう意味だ？そして何故名前を知っている！」

「そのままの意味ですよ。あなたは真祖の吸血鬼、ハイデライトウォーカーですよ。でなければ吸血鬼がこの日差しの中で十分に動けるわけが無いでしょう？何故名前を知っているのかというとななを探していたからですよ。」

たしかに、この身体になった頃は大変だったが今はもう大丈夫だ。この男は本当のことを言っているのだと判断して少しだけ警戒を緩める。だが、まだ聞きたいことはある。質問には答えてくれるようだからじっくり聞いてみるとしよう……

リゲルSIDE

あれから彼女はあらゆることを聞いてきた。できる限りのことは答えたが、「何故私のことを知っているのか」と「お前が化け物というのはどういう意味だ」という質問には嘘を答えた。この二つの質問

は今答えるべきではないと判断したからだ。そして質問の嵐が終わった後、彼女は少しは警戒を解いてくれたのか先ほどのような口調ではなく見た目相応の口調で

「助けてくれてありがとう。あと、食事もありがとう。」

と言って、私が作ってきた料理を食べ始めた。そして彼女が食べ終わる時間を考えながら紅茶を入れる。

「はいどうぞ。食後のお茶です。」

「あっありがとう／＼／」

でも何故だか先ほどから彼女は目を合わせてくれません。何故でしょう？

「あっあのう・・・」

「はい、なんですか？」

そんなことを考えていると彼女が話しかけてくれました。

「よかつたらなんですけど、わっ私のことを・・・そのっ・・・えっエヴァって呼んでくれませんか？／＼／」

えヴァあのターン

えヴあはなみだめ＋うわめづかいであいしょうでよぶようによつき
ゆうしてきた

ゆうきはりせいがほつかいしそつだ。こつかはばつぐんだ！！

りげるのターン

りげるはすぐさまようきゆうをのんだ。

りげるはえヴあのがおをかくとくした！

その後私は彼女をエヴァと呼び、エヴァは私のことをリゲルと呼ぶ
ことが決まりました。

「ごほんっ、それではエヴァに大切な話があります。これから話す
ことはこの世界の最大の秘密のひとつであり今後エヴァが生きてい
く上で必ず関わることになるものの話です。聞いてくれますか？」

「うん。それはさっきの人たちのこと？」

「そうです。彼らが使っていたモノの正体は魔法でそれを使う彼らは魔法使いです。そして私も彼らと同じ魔法使いです。ですが私はエヴァの味方ですから安心してください。ここまではいいですか？ それでは説明を続けますね。まずは、魔法のことを説明します。そもそも魔法というものは………」

そして私はエヴァに魔法のこと、魔法世界のこと、既にエヴァが魔法世界で賞金首になっているだろうことを説明した。

「そして何故私がある」エヴァ！……エヴァを探していたかと言つと、エヴァが身を護れるだけの力をつけさせるためです。私も化け物ですから、力の無い化け物がどうなるかは簡単に想像が付きます。先に言っておきますがこれは強制ではありませんし、私に護つて欲しいと言つならそれでもいいのですがいつまでも護り続けると言うことには無理があります。なので私は、魔法を教えたいと思っています。エヴァはどうしたいですか？」

エヴァは少し考えるような仕草を見せた後まっすぐに私の目を見て

「私に魔法を教えてください。」

と言ってくれました。だから私は、まず魔法の危険性と本質を教えてください………」

エヴァンジェリンSIDE

「エヴァはどうしたいですか？」

そう聞かれたとき私は迷った。新しい力、大きな力を手に入れると言うことは利点もあれば欠点もある。これは自分自身が体験してきたことだからいやと言うほどわかる。力をつければ今の敵には勝つことはできるかもしれないが、より多くの強い敵を呼び寄せることになる。それに比べて強い彼に護ってもらえるという案はとても魅力的だった。彼は強いから負けることは無いと思うし、最低でも逃げ切るくらいはできると思う。そして、彼と一緒にいられる。

だがそこで私は重要なことに気が付く。私が彼の足を引っ張ってそのせいで、彼が私を庇って怪我をしてしまうかもしれない。

そんなことは耐えられない！護ってもらって、こんなに優しくしてくれている彼に迷惑をかけ続けるなんてことはしたくない！それにいつまでも荷物のままじゃ彼と対等にいられない。そう思った私は新たな決意を胸に彼の瞳をまっすぐに見つめる。

「私に魔法を教えてください。」

絶対に強くなるんだ という決意を胸に彼の話を聞く。今はまだ届かなくてもいつか彼の隣に堂々と立っていられるように、立っている女ひとが自分であるために。そしてこの気持ちをつつか彼に……

.

第6話 よろしい、ならば計画実行だ (2) (後書き)

リゲル（主人公）は決してロリコンではありません。エヴァは一応合法ロリです。だから今はまだ手は出していませんがもし出したとしても大丈夫なんです！もし駄目でも可愛すぎるエヴァが悪いんです！そうに違いありません！

第7話 よろしい、ならば計画実行だ (3) (前書き)

お詫び

遅れました

投稿する直前全てが消えてしまいました。

思い出して書いてみました。

短いです。本当に申し訳ない

第7話 よろしい、ならば計画実行だ (3)

リゲルSIDE

エヴァと会ってから数年経ちました。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック『氷の精霊21頭。集い来たりて敵を切り裂け！ 魔法の射手・連弾・氷の21矢』！」

「その程度じゃ掠りもしませんよ？」

私は今、エヴァと1日に1回の模擬戦をしているところです。これはエヴァに戦闘経験を積ませる為であると同時に、私が修行の成果を見極めこれから何処を鍛えるのかを見極めるためでもあります。エヴァに戦い方を教えるに当たって、私は魔法だけでなく体術も同じように教えてきました。なぜなら魔法が使えない場所もありますし、魔法発動媒体をとられたりその他の使えない状態に陥ったときに身体ひとつである程度戦えないと困ると言う自分の経験から、両方を教えることにしました。

「戦闘中に考えることなんて余裕だな？ハア！」

そう言いながら、エヴァは蹴りからの突きを放ってきます。私はそ

れをかわし、捌きます。

「そんなことないですよ？最近は少し危ない時も増えてきてますし技も魔法も上達していますよ。」

エヴァと修行し始めてから魔法球を使用していたので実質50年ほど経っています。もう既に私が今まで戦ってきた人たちが束になっても片手で叩きのめすことができるほど彼女は強くなったと思います。

その間にも、エヴァを狙った襲撃は絶えることがありませんでした。なのでその人たちはエヴァの経験の糧になってもらいました。その時エヴァに、殺すつもりで向かってきたものの恐ろしさを知ってもらいました。そして相手を殺すということも経験してもらいました。でないと私がいなくなったときにすぐに殺されてしまうかもしれないません。それほどにまで殺す覚悟の有無は勝敗に関わってくるのです。

でも50年ほどそんな生活をしていたせいでしょうか？最近エヴァの口調が威圧的になってきました。もしかすると反抗期でしょうか？そうならとても寂しいです。

「ッ！（模擬戦中にそんな顔をするな！／＼）・・・ふ、フンッ！いくぞ！リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！『来たれ氷精、闇の精。闇を従え吹雪け常夜の氷雪 闇の吹雪』！」

蹴りをかわした直後にエヴァが魔法を放ってきますが、虚空瞬動で

かわします。そして即座に魔法を放ちます。

「まだ修行が足りませんよ？」 紅き焰 』」

「チィ！」 氷楯 』！」

エヴァは魔法をつかって防ぎますが、一瞬私のことを見失った隙にエヴァに手刀を突きつけ、模擬戦の終了を宣言します。

「はい、では此処までです。大分強くなってきましたね。」

「私の攻撃は掠りもしない癖して良くそんなことが言えるな？」

でもエヴァは本当に強くなりました。本人はあまり自覚していないようですが、もう十分に最強レベルに到達しています。後エヴァに足りないものは経験だけです。もう私が教えられることはほとんどありません。

だから、そろそろお別れです。

「どうしたんだ？大丈夫か？」

少し考え込んでいたみたいですね。表情に出てしまったのかエヴァ

が心配してくれます。口調は変わっても優しいところは変わらないので嬉しいです。

「いえ少し今後の修行ことを考えていました。で、そのことなのですが、テストをしたいと思います。」

「テストか？今回は何をするんだ？」

今までもテストは時々やっていました。どここの盗賊団を倒せだとか、龍を一匹倒して来いとかですが。いつのまにか毎回ご褒美を上げると言うルールができてしまいました。がそれは別にいいでしょう。

このテストが終わったら全てを話して私は元の時代に帰ります。だから最後に弟子の成長を見ておきたいのです。最初は理不尽な力に屈して欲しくないと思って鍛えていました、ですが今では家族も同然です。離れるのは悲しいですが、それも彼女の糧になるでしょう。もともとそのつもりだったはずですよ。

「「明後日メガロメセンブリアで行われる剣闘大会に参加して優勝してくる」それがテストの内容です。これは一人で行ってもらいます。私はここで待っていますから、しっかり優勝してきてくださいね？」

「案外簡単だな？てつきり龍の巣でも壊して来いとも言われるかと思っただぞ？」

「そんなことはしませんよ、龍がかわいそうですし。エヴァも簡単にお金が稼げるのでこちらのほうがいいでしょう？じゃあ、晩御飯にしますから、お風呂に入ってきてください。」

「テストの後のご褒美を楽しみにしてるぞ？あと、晩御飯は肉の気分だ。」

「はいはい、わかりました。今日はローストビーフにでもしましょうか？」

今日はいつもより腕によりをかけて作りましょう。

エヴァンジェリンSIDE

私は食事の後ベットに潜り込んで考え事をしていた。少し彼の様子

がおかしかった気がするからだ。ほんの少しだけど実際にそう感じたのだ。この50年間、いつも二人で過ごしてきたからこそ気づくことができた本の小さな違和感だが、何故か気になって仕方が無い。そんなことを考えていると

ガチャ

部屋の扉を開けて彼が入って来る。

「今日もですか？自分の部屋があるんですからそこで寝ればいいでしょう？」

「別にいいだろう／＼私が勝ち取った権利だ！それにリゲルもいと言っただろう？」

「あれはそう言わなかったらエヴァが泣きそうだったからでしょう？あれはずるいです。」

「リゲルも何でもいいといったくせに嫌だと言っからじゃないか！」

「それもエヴァが泣きそうになりながら言ってきたからでしょう？」

「うるさい！／＼いつまでも昔のことをいう男はもてないぞ！」

「別に好きな人が居る訳でも、誰かに好かれている訳でもないですよ。うから別にいいですよ。」

流石に少し頭にくる。多分コイツは私のことを妹の様にしか見ていないのだろう。よく考えればわかることだ。こうやって私が何を言ってもすぐに言い返してくる。

でも私はそんなところでは満足できない。妹なんかじゃくて、私は・

「エヴァ、ボーっとしてないでもう少し詰めて下さい。流石に少し狭いですよ。」

「・・・はあ」

時々心が折れそうになる。まあ、こんなだから他の虫が付く心配が無いのだが、このままじゃいつまで経っても妹のまま・・・そのうち誰かがこの朴念仁の魅力に気づいてしまうかも知れない。そしていつかその誰かと結ばれて、私を措いていつてしまうかもしれない。そんなことは耐えられない。

だから今度のテストのご褒美はもう決めてある。このテストが終わったら、この気持ちを伝えてその答えを貰うんだ！

第7話 よろしい、ならば計画実行だ (3) (後書き)

本当は二話投稿する予定でしたが、時間の問題と一回消えてしまったことよる精神的ダメージで1話だけになりました。
次回はお別れです。

第8話 よろしい、ならばまた会う日まで（前書き）

一日かけて修正案を出し、なんだかんだしてたら・・・書けちゃった・・・

無理やり感が大きいですかね？

いくぞ読者ーーーー（作者に対する）優しさの貯蔵は十分か？（今日はf a t eの映画も見てました）

第8話 よろしい、ならばまた会う日まで

リゲルSIDE

翌朝エヴァがメガロメセンブリアに旅立った後、ゆつくりと準備を始めた。今住んでいる場所はメガロのはずれにある山奥のログハウスであるから、エヴァが戻ってくるのは早くても明日の朝だろう。まず私は手紙を書いたための魔具の準備をした。

この魔具はビデオカメラのようなもので撮った映像を空中に投影するものである。

そこにエヴァへのメッセージと彼女の為に造った幾つかの魔具を残して私は再びベテルギウスを使った。

「さようなら。また600年後に会いましょう。」

エヴァンジェリンSIDE

私は朝は早くに家を出てメガロメセンブリアに行きさつさとテストをこなし、優勝賞金を持って彼の待つ家に急いで帰った。そして家に着いたのが、翌朝の四時ごろだったことから相当早く帰ってきたことがわかる。

この時間なら彼も寝ているだろうからベッドに潜りこんで一緒に寝ようと思ひ彼の部屋に入る……

でもそこに彼の姿は無く、ベッドの上には「この魔具に魔力を流せ」と書かれた紙といくつかの魔具が残されていた。

そうして私は手紙に書かれていたように丸い宝石のような魔具に魔力を流した。

そしてこれがあの時感じたほんの少しの違和感の正体だったのだと気づくのは、とても遅すぎた……

「エヴァ、おかえりなさい。そしてごめんなさい。」

映し出された彼からの第一声はおかえりなさいと謝罪だった。

そして映し出された彼から聞かされたのは、自分は未来から来たこと、いつかまた会えるはずだと言うことだった。

これだけでも、十分おかしくなってしまうそうなことだったがそれにはまだ続きがあった。

それは私という存在の根幹を揺るがすほどのことだった。

彼が話したのは、吸血鬼化と私にかけられた魔法についてだった。

まず私は完全に吸血鬼になっているため、もう人間に戻ることはできないと言うこと、これはもう覚悟していたし彼が未来から来たことと不老不死であるから後から考えると良かったともいえるのかもしれない。

だがもうひとつは違った。彼は私の記憶が偽者だと言うのだ。そして彼はここにある魔具の内の1つはそれを解くための物であることとその使い方を教えてくれた。

そして私はそれに魔力を流す。魔具は彼以外が使うことを想定されていないため、他人が使うには大量の魔力が必要になる。手が震

えてるのがわかるが、より強く魔具を握り締めて押さえつける。

私はこの数年で身体も心も強くなった。だから彼はこのことを教えてくれたのだと思う。

私はそんなことを考えつつ魔力が根こそぎ削られていく虚脱感を感じながらそれを起動させた……

私はとある国の皇女で、どこぞの領主の城に預けられ何不自由なく暮らしていた。

そのころの私はまだ人間だった。

だが私は10歳の誕生日の朝、目が覚めた時にはすでにこの体だった。

そして私はあらゆるものを憎み、神を呪いながら私をこんな姿にしたあの男へ復讐を果たし城を出た……

私は全てを思い出した。そして自分の記憶が偽りだったことがわかり混乱している中考える。

おかしいのだ、1つだけわからないことがある。私は復讐を果たした後、すぐに城を出たはずだ。

そしてそのまま時が過ぎて彼と出会った。

ならこの魔法は何時かけられた？城を出たときか？それとも彼に会うまでの期間にかけられたのか？彼がかけたというのは無いと思う

彼なら最初からそんなことをしなくてもいいだろうしそんなことはやらないという確信がある。

なら誰が何の目的で？

解らないことだらけで、彼も居なくなつてで、彼に会うには何百年と待たなきゃいけないくて・・・

「~~~~~」
「~~~~~！！！！！！」

翌朝の日の出まで少女の声にならない慟哭は山に響き渡った。

一度にたくさんの事が起き過ぎて、彼女は一時的におかしくなっていた。

そして翌日、山奥のぼろぼろになったログハウスの中の、今はもう所有者の居ないベットの上で目を真つ赤に腫らして泣き疲れて眠る少女の姿があつた。

第8話 よろしい、ならばまた会う日まで (後書き)

こんな感じでどうでしょうか？

どうにか修正できたとは思うんですけど・・・

感想お願いします！そしてアンケートにご協力お願いします。

アンケート報告

ハーレムあり10ハーレムなし3

ヒロイン

マナ3、月映2、このか4、五月1、テオドラ3、裕奈1、のどか

3、月詠1、茶々丸4、千雨1、くーふえ1、アスナ4、アキラ2、

さよ1、刹那3

アーティファクト

猫っぱい奴(化かす形？もしくは猫科ライオン、チーター、トラとか)

黒猫関係(ハーデイス？もしくは夜一？)

エヴァの魔具

映像投影型魔具

記憶封印解除用魔具

e t c.....

大戦期時のステータス（前書き）

次回から大戦期にはいるかも・・・
その前に現時点のステータス

大戦期時のステータス

名前 リゲル・マクダウエル（こうした方が何かと便利だった為）

性別 男

年齢 53歳（ダイオラマを含めて）

種族 古猫

容姿 人VER 十人中八人がかつこいいと言う容姿（BLACK CATのトレイン「ハートネット」 肉体変化によって5〜20歳頃まで変更可能

猫VER 黒猫

性格 優しい 無口だが心の中ではしっかり反応している 少し気まぐれ シスコン 鈍感 基本は丁寧語ではなす

正義の魔法使いは嫌い

能力値（Fate風）「」は猫時、

筋力S+ 「A+」

耐久S+ 「S」

敏捷S+ 「EX」

魔力EX

気 EX

幸運S（アルスの加護）

能力

名称 魔具創造（アイテムメーカー）

効果 好きな魔道具を造り出せる。創造や使用には多くの魔力や気を使うが両方ともEXなので気にせず使えるが、一回の使用にこのかの最大魔力の30%近く必要である。（魔道具によって変化）

名称 自己流体術

効果 自己流で覚えた体術。完成を使ってあらゆる体術のいい所を抽出してある。

名称 武器使い

効果 あらゆる武器を使いこなす（完成による。）

名称 家事万能

効果 エヴァとの生活で覚えた。完成により全てにおいて超一流。

名称 気配探知

効果 エヴァとの生活で覚えた。半径30キロメートル圏内の全てが手に取るようにわかる。

名称 並列思考

効果 エヴァとの模擬戦中に覚えた。完成により、いくらでも並列思考ができる。

名称 無詠唱

効果 魔法を詠唱なしで使える。詠唱時と比べても威力は落ちない。

名称 神からの贈り物（ギフト）

効果 いろいろな能力を神様が（勝手に）贈った

名前をもらったことも関係しており、さまざまな効果が得られる。

名称 肉体変化（にくたいへんか）

効果 神からの贈り物。アルスの「年老いた姿は見たくない」と言うわがままから付与された能力

名称 猫化（ねこか）

効果 神からの贈り物。アルスの「ねこ耳でおそろい／／／」と言
うわがままから付与された能力

完全な猫化から人の状態にねこ耳、尻尾、猫の手足などに変
化することができる

名称 完成（ジ・エンド）

効果 神からの贈り物。めだかな物語のアレと同じ能力

名称 不老不死

効果 寿命で死ぬことが無くなる。驚異的な回復能力を有する。

e t c.....

アーティファクト（まだパクティオーしてない）

名称 ????????

効果 ????????

名前 エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル

性別 女

年齢 700歳以上（ダイオラマを含めて）

種族 真祖の吸血鬼

容姿 書かなくてもわかるでしょう？
性格 書かなくてもわかるでしょう？

能力値（F a t e 風）

筋力 A

耐久 C +

敏捷 A +

魔力 A + +

気 ？

幸運 B

能力

名称 真祖の吸血鬼（不老不死）

効果 弱点を克服した吸血鬼であり吸血鬼の最高峰。寿命で死ぬことが無くなり驚異的な回復能力を有する。だが肉体の成長も止まるので、エターナルロリータになってしまった。

名称 リゲル流体術

効果 リゲル直伝の体術。並みの魔法使いならいくらい束になって襲い掛かってきても片手で倒すことができる。

名称 闇の魔法

効果 リゲルと別れてから生み出したオリジナルスペル。魔法を自身の体に取り込む事で全ての能力を強化する。
。

名称 合気鉄扇術

効果 チンチクリンなオッサンに習った体術。

名称 人形使い

効果 人形を操ることに長けている。これに伴い糸術も使いこなせる。

名称 氷属性無詠唱

効果 氷属性のみ魔法を詠唱なしで使える。詠唱時と比べても威力は落ちない。

e t c.....

保有魔具

映像投影型魔具

記憶封印解除用魔具

e t c.....

アーティファクト（まだパクティオーしてない）

名称 ??????????

効果 ??????????

大戦期時のステータス（後書き）

今日中にもう一話いけるかなあ？
かぜで寝込んでるから厳しいかも？

第9話 よろしい、ならば旅立ちだ（前書き）

感想お願いします！そしてアンケートにご協力お願いします。

アンケート報告

ハーレムあり11 ハーレムなし3

ヒロイン

マナ4、月映2、このか4、五月1、テオドラ3、裕奈1、のどか3、月詠1、茶々丸5、千雨1、くーふえ1、アスナ4、アキラ2、さよ1、刹那3、千鶴1

アーティファクト

猫っぽい奴（化かす形？もしくは猫科ライオン、チーター、トラとか）

黒猫関係（ハーデイス？もしくは夜一？）

アーティファクトはハーデイス（魔改造ver）で決まりかなあ？
まあ、魔具つかえば他に考えてるのもどうにかなるかな？

ヒロインは茶々丸、マナ、このか、アスナあたりで決まりかなあ？
でも、このちゃんはせっちゃんとかとペアで考えないとだから・・・

まだまだ募集してます！

第9話 よろしい、ならば旅立ちだ

エヴァンジェリンSIDE

彼が居なくなってからもう600年以上たった。今思い返すとあのときの私は酷かった。あの子の数年間、頭の中にはいつも彼の顔が浮かんでいて、立ち直ることができなくて、襲撃してきた魔法使いはいつも皆殺しにしてきた。殺さなければ私が殺されていただろうしな。

その後は殺さなければ生きられない時代もあったし殺さずにすむ数十年もあった。南洋の孤島に居を構えて人と交わらずに彼から教わった技と自分の力を磨き続けていた頃もあった。（この時に闇の魔法と人形使い開発した）

その頃は既に私も落ち着いていて、むしろ彼にまた会う時まで自分を磨き続けて彼をぶん殴ってやるんだ！と意気込んでいた。

そんなことをしていたらもうこんなにも経っていた。だけど彼は見つからない。十年ほど前から、私は自分の技を磨きつつ彼の搜索も始めているが、全く成果が無い。

いつかまた会えるといった彼の言葉を信じて探し続けてきた私は、連合の辺境のある街に立ち寄っていた。

「おいつ、聞いたかよ？メガ口の拳闘大会で優勝候補だった***
***が、やられたんだってよ！」

「マジかよ！最近ラカンさんが出てないから今回はあいつが優勝候補筆頭だったんじゃないかねえのか？誰にやられたんだ？」

「それがよお最近出てきた奴でさあ、その戦いがえげつないんだよ。相手の技をそっくりそのまま返すんだ。普通なら物まねなんてして勝てるわけ無いだろ？でもそいつ、おんなじ技使ってるのに使ってた本人よりも強えんだよ！」

「そいつなら俺も知ってるぞ。優勝賞金そっくりそのまま紛争地帯近くの村に配って回ってるんだってさ。そこら辺じゃあ『癒し手』^{ヒーラー}って呼ばれてて、けが人を無償で治してるらしいぞ？何かたちの悪い魔法使いには追われてて、賞金もついてるらしいんだけどそこらへんの村じゃあ神様扱いで宗教までできてるんだと。」

「魔法使いの間じゃ『黒の抹殺者』^{ダークレイザー}、『死を運ぶ黒猫』^{ヘルキャット}、『無音の掃除屋』^{シロデス}、『あいつ速すぎて攻撃あたらねえ』^{サイレ}って呼ばれてるって聞いたぜ？」

「物好きな奴の居るもんだなあ？俺ならその金で遊びまくってやる

けどな！」

「俺たちなんかとは格が違うんじゃないか？」

「「「そりゃあ〜ちげえねえ！！！」」」

大口を開けてガハハと大笑いしながら男たちが隣を通り抜けていく。私はいちばん手前にいた男の手をつかむ。

「何だい？お嬢ちゃん？何か俺に用事でもあるのかい？」

人当たりのよさそうな笑顔を私に向けながら、私に話しかけてくる。この男は善良な人だったのだろう、悪事に手を汚さなかったのだろう、こんな小さい少女にも優しくすることができたのだから。ただ不運だったのは、彼女にいちばん近い位置に彼がいたこと、たったそれだけのことだろう。

「すまないがその話、チヨットクワシクキカセテモラエナイカナア？」

その日の夕方、とある裏路地で身体を震わせている男たちが発見された。

後日、男たちは震えながらこう語った。

「あれは魔王よりももっともつと恐ろしい笑顔^{もの}だった」と・・・
その内の一人が、新しい扉を開けてしまったのはまた別の話。（決して語らないよ！「振りじゃなくてマジで」）

そして彼女の人形は彼らにこう言った

「サイナンドッタナア、ケケケツ！」

リゲルSIDE

「ふゝ、やっぱり自宅は落ち着きますねえ。」

本当はほとんど経ってないが数十年ぶりにこの時代に帰ってきた私は、近くの村にある私の家のうちの1つでゆっくりしていた。なぜ家のうちの1つといったのかというと、各村を巡って治療していた私は、一箇所にとどまり続けるというのはどうしても難しかった。そのことを知った各村の人たちが治療しやすいようにという意味と

お礼を兼ねて私に造ってくれたのがこれらの治療場兼家である。
今は紛争も落ち着いていて、けが人も出ていない。孤児院のお金もまだ十分に渡してあるから急いであることは何も無い。それに近くには魔法使いらしき気配もない為、ゆっくりくつろぐ事ができていた。もし何かあっても各村にいる自警団の人たちには、非常用の通信装置も渡してあるし、それが壊れたりしたらすぐに判るようにしてあるから安心だ。

「そろそろですかね？」

そしてわたしは今、此処を出ようと考えている。ここはもう十分やっていける。近くの村同士が協力し合っているし、私の活動に賛同してくれている「正義の魔法使い」ではない魔法使いたちもあわせて数十人ほど各街村にいる。

そう考えた私は、ここら一帯を彼らに任せ旅に出ようと思う。

エヴァも探さなきゃいけないし、ナギたちにも合流するつもりだ。オスティア崩落による被害もどうにかして食い止めるつもりだし、魔法世界自体の崩壊に対する準備もしなくてはいけない。ここに留まり続けているわけにはいけないのだ。

「さて、まずはみんなに話さなくては・・・」

私は各村に繋がる通信機を使って話したいことがあるという旨を伝え、集会場がある村の中心へと向かった・・・

近くの村の代表が集まり、遠くの村の代表は通信機越しで集会の準備が終わった後、私は今後のことについて話していった。勿論始めは引き止められたが、私の決意が固いと判るとすぐにわかってくれた。

いつかはこうなるだろうと覚悟していただろうし、何時までも自立しないわけにもいかないこともわかっていたんだと思う。皆に「今までありがとう」と感謝を伝えその場は少し湿っぽくなったが、その後は街ぐるみで夜遅くまで宴会をした。

翌日にはもう村に彼の姿は無かった。

こうして彼は住み慣れた村を離れ、戦争の渦の中心へ向かっていった……

数日後
・
・
・
・
・

彼が旅に出て一時的に少し寂しくなっていた村は、活気を取り戻しつつあった。

そこに、こちらでは見慣れないかわいらしい少女が訪ねてきた。

「此処に『癒し手』^{ヒーラー}はいるか!？」

村を訪れて早々、数日前に出て行った青年のことを尋ねてくる少女の真意を測りかねた村人たちは、彼女に詳しく話を聞き始めた……

そして判ったのは、彼女は長寿種で彼の弟子兼妹のような者であるということと、数年前から彼を探して一人で旅をしていたということとだった。

村人たちは彼女に「大変だっただろう」とか、「一人で大丈夫だったかい？」などの労いの言葉をかけた。そしてとても言い辛そうに彼が数日前にこの村を去り、旅に出たことを伝えた。

シヨックを受けるだろうと思ってどんな言葉をかけようかと悩んでいた村人たちに彼女は

「氣にするな！ やつと手がかりを掴んだんだ！ 絶対に見つけてやる
！首を洗って待っているよりゲル！一発殴るだけでは許さんからな
？フツハハハハハ……！！」

と答え村人を大いに引かせたと共に、彼は彼女に何をしたのだらう

という疑問を抱かせた後、上機嫌で村を去っていったとさ・・・

第9話 よろしい、ならば旅立ちだ (後書き)

こんな感じでどうでしょうか？

感想、アンケート募集中です！

第10話 よろしい、ならば・・・なっ何だお前は！これは私のしごとがふ

サブタイトルが幼女により占領されたため、作者は逃亡しました・
・
・

11/08改定

流石にはじめてを奪われるのは無いだろうと思いなおしにしました。

第10話 よろしい、ならば・・・ なっ何だお前は！これは私のしごと がふ

リゲルSIDE

村を出てから、1週間経ちました。私は『導きの長杖』ガイドンスを使いながら薬味父（まだ12、13歳頃）を探しています。とは言っても大戦が始まるまでにはまだ時間がありますから、通りがかった村々で病人を治療しながら向かっています。

そんなことをしているうちに旅に出て1週間目の夜を迎えました。周りには村は無いようなので今日は野宿です。まあ野宿といっても魔具『ログハウス』を使っているので安い宿よりは質は大分いいですし、常時魔法使い専用の人払い兼認識阻害魔法を使っているので襲われる心配もありません。（エヴァがリゲルを見つけれない要因）

その後、晩御飯を食べてお風呂に入って寝たわけです。

此処までは何の問題も無かったんです・・・

「（もぞもぞ、ずりずり）はあはあ・・・寝顔お・・・ガマンし

ないとお．．．（すりすり）．．．こんなはずじゃあ．．．．」

早朝、私の意識はゆっくり覚醒していきます。これはエヴァとの生活の中で身についたもので一年を通して4～5時頃には目が覚めます。すぐに目が覚める訳ではないので、このときの私は大抵無防備です。少しうるさいだけじゃあ全く起きません。そう、例えば殺気や悪意、身の危険等を感じなければ．．．

「．．．はあはあ．．．もう．．．はあはあ．．．ガマンがあ．．．ハアハア．．．デキナイヨオ（ジュルリ）」

ゾクッ！

それを感じた瞬間に私は私の上に乗っていたモノを突き飛ばし、ベットから飛び起きてソレから離れます。動悸が治まらず嫌な汗が止まりません。今まで戦ってきた歴戦の剣闘士達全員から殺気を受けられてもこんなに動揺することは無いと思います。ソレほどにまで恐ろしかったです。

私に向けられたこの強烈なまでの劣情が．．．

「ハアハアハア．．．エモノオハアハア．．．オモチカエリイ．．．ハアハア」

私の索敵魔法を難なく潜り抜け、尚且つ気づかれずにマウントポジ

シヨンを取る……

こんなことができるのはアイツしかいません。

本来なら直ぐにでも殴りかかるところですが今のアイツは捕食者^{ヘンタイ}です。戦いを挑んだら確実に負けます。

そして哀れな獲物^{わたくし}は食べられて（性的な意味で）お持ち帰り（神界で監禁生活）されるでしょう。

私は『生きたい』という一心で無意識に気と魔力を融合させ、咸卦^{かんか}法^{ほう}を使用していました！

今まで使う必要も無かった上に見たこともなかったのですが、此処に来て生存本能が呼び覚まされたのか、最大出力（無限の魔力と気）状態で咸卦法を維持しながらヤツと対峙しています。

勝つことは考えていません！今するべきことはヤツの弱点を探しそこを突くことでショック療法的に正気を取り戻させることです！

「モオガマンデキナイイ〜〜〜！オモチカエリイ〜〜〜！！！！！」

ヤツは既に臨戦態勢をとっている！そして捕食者は襲い掛かった来た！！！！！！

ほしよくしゃ（よむじょ）のいっげき！

ほしよくしゃ（へんたい）はりげるがさっちできないほどのはやさ
でちかついた。

りげるはしょうめんからだきあつようにほばくされてしまった。

いきなりぜったいぜつめいだー！

りげるはにげるためにもがいた！だが、よりみっちゃくしてしまっ
たー！！

ほしよくしゃ（ようじょ）はよりみっちゃくしたせいか、もっとこ
うふんした。

いきがどんどんあらくなってくる！

そして、かおをじょじょにちかづけてくる。

りげるはぜんしんぜんれいをつかってもがいた！
だがにげられないー！！

ほしよくしゃ（だめがみ）はもっとこうふんしたー！
どんだんかおがちかづいてくるー！！

りげるはひっしにもがいたー！！

……だが

もう……にげられない……

ほしよくしゃ（いちず）のくちびるとりげるのくちびるがかさな
た!!

りげるのくちのなががしめったなまあたかいものにじゅうりんさ
れる

りげるのめのまえがまっくらになった……

「ア——————ッ!!」

（見せられないよッ!!）

てれれれっ てっ てっ てー！！

りげるはふぁーすときすをうばわれた！りげるはせかんどきすもうばわれた！

りげるはばくていおーにせいこう（？）した！かみのじゅうしゃになった！

りげるはけいやくしゃかーど（きんいろ）をてにいった！

りげるはしょうごう『つきめがみのこうけいしゃ』をてにいった！

こういにより、たましいのかくがあがり、かみになった！じんりよくをてにいった！

かみになったことで、しゅぞくが『こねこ』 『かみねこ』にしんかした！

じょうじてんかいがたあーていふあくと『こんじきのすず』をてにいった！（くろねこのとれいんのくびもとさんしょう）

ばくていおーにより、ようじょからじんりよくがきょうきゅうされることになった！

じんりよくにより、まぐそつぞつ まじんぐそつぞつ にしんかした！

ねこけいのたましいそうぞうができるようになった！

ねこけいのせいぶつをしえきできるようになった！ねこけいのせいぶつからつやまわれるようになった！

うんよくかみはしょうきにもどった！！！

りげるはここにきずをおった！！

かみはじぶんのしでかしたことにきがついた！！

(り)「・・・・・・・・・・・・・・・・シクシクシク」

(幼)「・・・・・・・・・・・・・・・・ダラダラダラ(汗)」

(り)「・・・・・・・・・・・・・・・・シクシク・・・・・・・・ギロリッ！」

(幼)「ビクウッ！！！」

(り)「フンッ!・・・シクシクシク」

(幼)「ガーン!!・・・サラサラサラ(砂になっていく)」

(り)「シクシクシ・・・すうすうすう(泣疲眠)」

(幼)「チラッチラッ・・・ズーン!!(罪悪感)」

(り)「すうすうすう・・・」

(幼)「ズーーーーーン!(自己嫌悪)」

アルスSIDE

やってしまいましたぁ・・・襲ってしまいましたぁ・・・

仕事をやつと片付いてえ、やつと休みが取れてえ、やつつと!彼に会うことができた反動+寝顔のせいなんですぅ・・・

悪いのはわかってますう。でも……ハウ／／……
・ハッ！

彼が寝てから起きて止めろというまで土下座し続けてえ、彼が起きてからは一万の言葉を使って謝り続けてどうにか許してもらえました。

無理やりはだめですう、神様でも御法度ですう。最上級神から「直ぐに来るように！」とお呼びがかかってますう……

減給＋謹慎は確定ですねえ……

この後、神界で行われた会議で彼女が

「でも、はじめてはわたしがほしかったんですう！」

という発言をしたため、いくら彼女が準最上級神と言えど反省の色が薄く誰もフォローできず

減給、謹慎に加え、100年間の無償神界奉仕（あらゆる雑務を押し付けられる）が決定した。

「なっ何か大切なものが奪われた気がするぞ!!」

「ケケケッ！ナニイッテルンダ御主人？トウトウボケタカ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ぐすっ」

第10話 よろしい、ならば・・・ なっ何だお前は！これは私のしごとがふ

パクティオーのいい仕方の案が浮かばずにこんなものになってしまった・・・

アーティファクト案を投稿してくださった方々、ありがとうございます。今後の展開も考え、このような形にさせてもらいましたが案の幾つかは少し改造して作中で使用させていただくつもりです。

アンケート報告

ハーレムにします。

ヒロインは

決定

茶々丸、マナ、アスナ、このか、刹那

未定

テオドラ、のどか、千雨

刹那は決定するか迷いましたが、このちゃんとセットということ
で決定しました。

テオドラは微妙なラインです。明日新作を投稿するまでに3票以上
入れてくれというメッセージが届いた場合入れます。

第11話 よろしい、ならば再会だ（前書き）

前回、流石に初めてを奪われるのは駄目だろうと思い、セカンドまでにしました。

そこは駄目ですよ。勢いで書いてしまい後悔気味・・・

お詫びで今日は2話更新予定！！！！

皆様のご要望にお答えしてテオ様ヒロイン化しました！！

ヒロインは

エヴァ、茶々丸、マナ、アスナ、このか、刹那、テオドラ、千雨

の中からになります。この作品の方向性によって出す出さないと変わるかもしれませんが最大限努力したいです！！

第11話 よろしい、ならば再会だ

リゲルSIDE

先日、大切なものを奪われたリゲルです。寝起きを襲撃され、全く抵抗もできずに一方的に蹂躪されて心に大きな傷ができました。

でも、貞操は護りきりました。（っえ？前回奪われたらって？前書きを読んでください。）

油断してたわけではないんです。確かに強くなってきた実感はあったので普通の状態ならいい勝負だったでしょう。

でもあれは格が違うんです。暴走状態は手がつけられないんです。某金ピ力王も真っ青なぐらい力の差を見せ付けられました。

……死んだらアイツの所に行くんですよ……絶対に死なないようにしましょう！不死なのでそう簡単には死には……って神様になったんですから余計死なくなりましたよね。安心ですよ。神様相手にしてもいい勝負できますよね！神様になったから少しは強くなってますよね？（実際に強化されています。全てにおいて数段階以上）

けっ決して現実から目を逸らしているわけじゃありませんからねっ！あいつならまた来そうなんて思ってますからねっ！（当分出す予定はありませんがまた出てくるでしょうね？ by 作者）

何かすごく嫌な予感がします。ヤツとはまた大切なものを賭けて戦うことになりそうですね……

なので今日からの目標はアイツに襲われても負けなくらいの強さを身に付けることです！光の速度を超えて見せますよ！主に逃げ切るために！！

さて、奪われてしまったのはしょうがないですし、あの後ものツすごく誤ってもらった（あれ、なんかデジャビュ？）から、流石に許さないところちが悪いことしてるみたいになるんです。本当はこっちが100%被害者なのにね！・・・幼女・・・恐ろしい子っ！

そんな私の心の傷を癒すために久々に登場する『なかなか良いたらい（木製＋神力で強化済み）』！この中に猫状態（何だか毛並みが大分良くなってる）で入って、近くの小川をドンブラコと流れています。

なかなか落ち着くんですよ？これ。流れが強くなければなかなか昼寝にはいい感じなんです。このあたりの地理は理解しているので、このまま流れていても全く問題ありません。薬味（父）もこの川の下流のほうにいるみたいですし・・・

くるくる回転しながら流れる『なかなか良いたらい（木製＋神力で強化済み）』の縁にあごを乗せて景色を眺めながら川を下っていきます。普通なら目が回るでしょうけど、そんなこと私には関係ありません。のんびりと目に映るものを眺め続けます。軽く鼻歌も歌ってご機嫌です。

山、川原、川、川原、林、川原、川、川原、山・・・
山、川原、川、川原、エヴァ、林、川原、川、川原、山、川原、川、川原、エヴァ、林、川原、川、川原、山・・・

んん？見慣れた顔があったような？

・ 山、川原、川、川原、エヴァ？、林、川原、川、川原、山……

いましたね、しかもこっちすごく見てますね。そんなに川を流れていく『なかなか良かったらい（木製＋神力で強化済み）IN猫』が珍しいのでしょうか？……

珍しいですよ〜そうですね〜。というかあれ、見ているというより睨んでません？もしかしてバレテマス？

「おい、その猫！」

話しかけてきましたよ！さてどうしましょう？なんかこのまま正体言つと殴られる気がするんですよえ、主に彼女の右手の具合から考えるに。まあ、反応しないと酷そうですねからとりあえず鳴いときましよう。

「ミヤア〜オ？」

少し首をかしげるのが大事ですね。猫のときは大抵これで乗り切ってきました！駄目なら逃げれば良いだけですしね。

「御主人。ナンデネコナンカニハナシカケテンダ？」

「黙れチャチャゼロ。チツただの猫か。まあいい。」

そういつてエヴァは私の上まで飛んできて、『なかなか良かったらい（木製＋神力で強化済み）IN猫』を回収して川原に置きました。少しチャチャゼロが空気みたいですが今は気にしません。

「ふむ、なかなかいい毛並みをしてるな？少し触らせろ。」

そういつてエヴァは私を抱き上げる。まあ、触らせたら話してくれるだろうと思って私は為すがままになっていたのですがこれがいいませんでした。エヴァが私を抱き上げた瞬間口をニヤリと歪ませてそのまま私を川に放り投げてきたんです！ソレも思いつきり！全く警戒もしてなかったのでそのまま私は川の中へ

「ミギヤアアア~~~~！！！！」

いきなりの事で上下がわからなくなった私は少し溺れてしまい、急いで人型に戻ります。服は常時展開型のアーティファクトである『こんじきのすず金色の鈴』に記憶してあるものを魔神具としてそのまま身体の表面に作り出します。

「ざまあみろリゲル！いきなり出て行った上に長年私を放置した罰だ！まだこの程度では許さんがな！！！」

川は人型になれば浅いので、私は落ち着いて上半身を起こします。

「そのことは謝りますが、気づいていない振りをして川に投げ込むなんてひどくないですか?!」

「お前のほうがよっぽど酷いだろうが!いきなり一人になってしかも最低な置き土産置いてったくせに良くそんなことが言えるなあ?」

「それはゴメンナサイ。でもちゃんとメッセージは残しましたし、その中でも十分誠意を込めて謝罪したつもりなのですが・・・」
その程度のことです!!」ッ!」

「その程度のことです許せるはずが無いだろう!お前がいなくなつてからの600年間私がどんな思いで生きてきたと思ってるんだ!さっさと寂しくて仕方なかったんだぞ!」

泣きそうになりながら必死に怒鳴ってくるエヴァを見ます。この顔で言われた時はいつも私の負けです。心の底ではエヴァを甘やかしてるんです。しょうがないんです、家族なんですから。血の繋がっていない家族ですからまた別の言い方になるのかもしれませんがね。

「いいかりゲル!今後は600年分私の言うこと聞けよ!まだ貰っ

てないご褒美もあるんだからな！！／／／」

「はいはい、判りましたよお姫様。何なりとご命令を。」

少しエヴァをからかう様にワザと畏まった言い方をして、片膝を付いてエヴァの手を取って手の甲に軽くキスをしてみます。エヴァの顔が赤くなっただから少しは効果があったのでしよう。

「ええい、茶化すな！お前は私を甘えさせてくれれば良いんだ！それ以外のことはするな！！」

「畏まりました。お姫様。では、こちらへ。」

そういつて即座に魔神具で『ログハウス』を造り、エヴァと一緒に入っていった。その日はこの600年の月日を埋めるように彼女の話を聞きながら甘えさせ続けました。勿論、エヴァの座る場所は私の膝の上でしたよ？

第11話 よろしい、ならば再会だ（後書き）

もっとエヴァをデレさせたい!!!

いいでしょうか？

砂糖と蜂蜜ぶっ掛けまくりますよ？いい人は返事ください！

感想待ってます！

第12話 よろしい、ならb「お前ら！俺の仲間になれ！」（1）「……………」

サブタイトル「……シクシク」

作「元気出せよ、こんなこと気にすんなよ」

サブ「ガキにも、幼女にも邪魔されるなんて……俺、この仕事向いてないのかな？」

作「そんなことねえよ！俺がこの仕事任せられるのはサブさんしかいねえよ！」

サブ「……作者！（ブワッ！）」

作者「サブさん！（抱きっ！）」

何やってんだろう？

前話訂正

エギル リギル リゲル

……ミスは一回で直さないといけないよね！まさかの主人公の名前Missorz

ご指摘、ありがとうございました。そして、ゴメンナサイ

第12話 よろしい、ならb「お前ら！俺の仲間になれ！（1）」……………

エヴァンジェリンSIDE

突然だが、今の私はとっても幸せだ。本当に突然だったが、言いたくて仕方なかったんだ！

600年ぶりにリゲルと再開して、まあその時いろいろやったがその後は……………その……………あれだ……………堪能した！！

チャチャゼロの機能を一時停止して「ヒデエゾ御主人。」……………ゴホン、ちよつと寝てもらってから思いつつきり！甘えた！！

リゲルの膝の上に座って、頭を撫でてもらいながら頭を彼の胸に擦り付けながら600年間何をしていたかを話した。できるだけ長い間こうしてたかったからチョット付け加えたところもあったがな！／／

124

その後はお風呂に入って（一緒に入ろうと言ったら却下された……………何故だ！！いいじゃないか別に！埋め合わせぐらいしてくれても！はっ！これをご褒美にすれb「エヴァ？どうかしましたか？」……………いや、なんでもない。（まだその時じゃないんだ）」

声に出てたか、まあ全部聞き取れていなかっただろうから大丈夫だろう。

で、一緒には入れなかったがお風呂に入ってご飯を食べて（久しぶりのリゲルのご飯は絶品だった！）、一緒にベットで寝た！もちろん正面から抱きついた状態だった！！後ろからも捨てがたい

がやはり顔が見える正面の方が断然いいと思んだ、確かに後ろからはいい！どれだけ匂いを嗅いでもばれないし、背中だからこそ好い所はたくさんある。

だがしかしっ！正面からのほうg

「エヴァ、さつきから変ですよ？小声でぶつぶつ言ってますし？」・
「いやなんでもないんだ、ただ幸せをかみ締めてただけだから
気にするな！／／／」

「？・・そうですか？よく判りませんけどエヴァが幸せならいいです。
(ニコッ)」

ボタボタバタッ（鼻から溢れ出す紅い愛情）

「エヴァ、鼻血が出てますよ！最近疲れてたんじゃありませんか？
私が対魔法使い用の魔法を使ってたせいですかね？」

隣で歩いているリゲルが私の鼻にハンカチを当てながら心配してくれる。一人旅の時には無かったことだから新鮮だ。・・・それに
嬉しいし・・・

「少し疲れているみたいですし、ここで少し休んでいきましょう。
(ニコッ)」

そう言いながら私を（お姫様抱っこで）抱きかかえてくる。

・・・・・・・・まあそのなんだ、あれだな、長い間会えなかった反動（？）見たいな奴だな、その内慣れるだろう。お姫様抱っこされるのは久しぶりだな・・・・・・・・

ボタボタボタボタボタッ！！（先ほどより大量に溢れ出す紅い愛情）

「エヴァ！大丈夫ですか！エヴ・・・・・・・・ヴァ！・・・・・・・・」

これは仕方ないと思うんだ・・・・・・・・

すまない、取り乱した。もう大丈夫だ、落ち着いた。べつ別に心配してくれてありがとうなんて思っていないんだ・・・・・・・・ないな・・・・でもリゲルになら・・・・・・・・（キュピントッ！）見えた！？これか

っ！！これが私の進むべき未来・・・！！

・・・これなら・・・ウヘヘヘ・・・そんなことまで／／／
・・・ハッ！

ゴホンッ！

どうにか落ち着いた私は、リゲル（黒猫VER）を抱きしめながら
川下へと進んでいる。

・・・何故リゲルが猫になってるのかって？そんなことは簡単だ
可愛いからに決まってるだろう！！！！

もうすごいんだぞ！つやつやで、ふわふわで、もふもふで、ふかふ
かで、ぷにぷにで、可愛いんだ！この魔性の魅力にやられてしまっ
た私は、600年ぶりの『ご褒美』として「好きなときに猫状態に
なってもらう権利」を貰いソレを実行した！
後悔はしてないっ！

はあはあはあ・・・ふう

昔考えていた『ご褒美』とは違うけど、今はこれでいいと思ったん

だ。リゲルと一緒にいることができて、それだけで今は十分だと思っただ。

だから、この『ご褒美』は今度にとっておこうと思うんだ。

そして私は彼の毛並みに顔を埋めてもふもふしながら川原を下流に向かって行く。きっと今の私の顔は今まで生きてきた中で一番の笑顔なんだと思う。

その頃のとある猫SIDE

「ふにゃあゝゝゝ！／／／（そこはらめゝゝゝ！／／／）」

残念っ！！

第12話 よろしい、ならb「お前ら！俺の仲間になれ！」……………

今回はエヴァオンリーでした。

だ、だって砂糖マシマシで頼むって要望があっただんだもん！
後悔はしてない！！

感想待ってます！

こうして欲しいって言う意見もあればドンドンドンどうぞ！

総合PV 150 / 694 アクセス

総合ユニーク 21 / 586 人

皆さんありがとう！！！！

第13話 よろしい、ならば「お前ら！俺の仲間になれ！（2）」（前書き）

作「今回はしつかり連携取れたな。」

ナギ「前は悪かったな、サブさん。」

サブ「気にすんな、若い時にはソングぐらいの元気がなきゃいけないよ」

ナギ「サブさん・・・あんたい奴だな！俺のなかm「いや、止めときな」 何でだよ！」

サブ「俺はお前らみたく若くねえのさ、こんなにかまってねえでもっと人を笑顔にさせることをしな」

ナギ&作「サブさん・・・」

サブ「じゃあな坊主ども、立派になんな。あはよ・・・」

ナギ&作「サブさーん！！！！」

またまた何をやってんだろう？てゆうかサブさんマジダンディ

第13話 よろしい、ならば「お前ら！俺の仲間になれ！（2）」

リゲルSIDE

こんにちは、リゲルです。今私達の目の前には今回の旅の目的である薬味（父）がいます。ついでに若き日の巫女好き剣士もいますね。

「お前強いな！俺の仲間になれ！」

皆さんいきなり過ぎて意味がわからないと思いますから、とりあえず回想です……

数時間前

私は今エヴァの腕の中にいます。何故こうなったのかというと

「さっきの姿はなんだったんだ？」

とエヴァに聞かれて、ついとっさに

「私の正体は猫の神様なんですよ」

と本当のことを教えてしまったからです。その後はいろいろ追求されました。もちろん最初は黙秘しようと思いましたよ……でもエヴァが……

「……おしえてくれないのか？／＼／（涙目＋上目遣い＋ほんのり頬が赤い）」

と聞いてきて無意識に身体が反応してしまったようで、気づいたときには全てを話して後でエヴァの頭を撫でていました。

全てと言っても『転生したことや、神様と知り合いなことや、ある程度未来がわかることや（流石にそのときの私も此処がファンタジーの世界に良く似た世界とは言わなかったようです。）、私のこと（能力のことも含む）』などを話していました。

全てとは言わなくても大体のことは話してしまってますね……。まあ良いんですけどね、エヴァになら話してもいいかな？と思ってましたし。

そんな感じでそのまま質問され続けていたのですが、エヴァが急に

「そういえば、『ご褒美』まだ貰ってなかったよな？」

と言ってきたので

「そうですね。今回は何がいいですか？お詫びも含めて多少無理なことでもいいですよ？」

私がそう言ったら、エヴァは呻きながら悩み始めました。

「（昔は『リゲルに気持ちを伝えてその答えを貰う』つもりだったけど、今考えるとこれは違うんじゃないか？こんな願いで本当に良かったのか？………違うな。こんな強制することなんて私はしたくないっ！なら何にする………っ！！これだっ！）」

エヴァが勢い良く顔を上げたので「決まりましたか？」と言つと、エヴァは頷きました。なので

「何がいいですか？」

ともう一度聞きなおすと

「『私の好きなときに猫の姿になってもらって、好きなこととしていい権利』が欲しいっ！」

その結果今は……………

すぐくモフられてます。抱きつかれて、頬擦りされて、体中撫でられて…………これは気持ちいいかも…………ふにやあ…………ふにや？（あれ？）…………うにやにやつ！？（そこはっ！）…………ふにやあ…………！／／／（そこはにやめえ…………！／／／）

猫状態のリゲルは尻尾が弱点です。エヴァにいきなり尻尾を思いつきり弄られて腰砕け状態になってピクピクしています。

エヴァの目の前で猫の状態になったことはこれまでなかったの、こんなにエヴァが猫が好きだったなんて思っていますでした。（エヴァはけっして猫が大好きという訳じゃありません。猫の状態のリゲルが好きなのです。by作者）
まさかいきなり尻尾を触ってくるなんて…………今度からはあまり触らせないようにしましょう…………
その前に身体を洗いたいですね。

エヴァは腰砕け状態のリゲルを見て溢れ出す紅い愛情が噴出して

しまいました

仕方なくエヴァと川で身体を洗い流していると、

「GYRAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA
A!!!!」

空から轟音と巨大な翼を羽ばたかせる様な音が聞こえました。嫌な予感を感じながら上を向くと案の定巨大な黒竜が空高くからこちらに向かってきます。血の匂いを嗅ぎ付けて襲ってきたようです。あんな声を出したら、辺りにいる魔法使い達が集まってきてしまいますね。これ以上声を出されて『正義の魔法使い』が集まってきたらとても面倒ですからさっさと片付けたいところです。

ちょうどいいですから、エヴァの成長を見せてもらいましょう。

「エヴァ、あれ倒してください。できるだけ早くですよ？あれからどれほど強くなったか見せてください。」

エヴァはにやりと口を歪めて

「今日の食事は期待してるからな？」

そう言つて虚空瞬動を使い、黒竜に向かって行きました。

「これが私の修行の成果だ！リク・ラク・ラ・ラック・ライラック

『契約に従い、我に従え、氷の女王。来れ、とこしえのやみ、えい
えんのひょうが』

おお、氷属性の高等呪文ですか！威力も昔とは比べ物にならないくらい上がっていますね？一瞬で黒竜が氷付けになりました。上出来ですね？今日はエヴァの好きなモノをたくさん作りましょう。

「これで終わりだ！『全ての命ある者に等しき死を。其は、安らぎ也。おわるせかい』

凍り付けにされた黒竜は跡形もなく粉碎されました。弟子の予想以上の成長を見てとても嬉しいですね。思いっきり褒めてあげようと思ってエヴァに近づきます。

その時！

「お前強いな！俺の仲間になれ！」

と言っわけですね。

ナギ……このタイミングで現れますか……流石は薬味（父）ですね。薬味のあの性格はやはり遺伝だったのですね？納得しました。彼の後ろにいる巫女好き剣士は此方を鋭い目付きで睨んできます。流石は最強の剣士ですね。魔の気配はわかりますか。まあ私は魔ではなく神ですけどね？

「ナギ、待つてください。彼女たちは人ではありません。」

「何言ってんだ詠春？猫が人なわけないだろうが。」

「違いますよナギ。その少女もその猫も魂の格、生物としての格が人より高いですよ。巧妙に隠されていますが、魔を滅する神明流剣士である私の目は誤魔化せません。」

予想以上に巫女好き剣士は鋭いようですね。少し評価を上方修正しときましょう。

「いいじゃねえか、旅の仲間がたくさんいた方が楽しいだろう？で、どうなんだ？仲間にならねえか？それと俺と勝負しろ！」

「にやにやあゝ？（エヴァ、何だか面白そうですから仲間になってもいいですか？彼らとの旅は退屈しませんよ？）」

「（勝負するかは別として、リゲルがそういうのなら別に私は構わんが？）」

「（なら、決定ですね。）いいでしょう、少年。私の名前はリゲル・マクダウエルです。此方の可愛い少女はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルと言います。私たちは人ではありませんし賞金もかかっていますが、それでもいいならあなた方と一緒に旅をしてもいいです。」

ナギは「オツシャ〜！仲間ゲットだ！」と喜んでいますが、巫女好き剣士は可哀想な位顔が青くなっています。私たちは有名ですからどこかで聞いたことがあるのでしょうか？

さあ、この後どうなりますかね？

第13話 よろしい、ならば「お前ら！俺の仲間になれ！（2）」（後書き）

ナギと詠春に出会った！

さあ、さっさと大戦突入したいです。

ヒロインのアーティファクト（エヴァ、マナ、このか、茶々丸、アスナ、刹那、テオドラ、千雨の8人）募集中です！

読んでくださった皆さんありがとうございます！

第14話 よろしい、ならば仲間になってやろう(前書き)

今日から、毎日投稿は一時中断するかも。

ネタをしつかり練って2日〜3日ぐらいのペースで上げていくことになるかも。

第14話 よろしい、ならば仲間になってやろう

前回の確認

「お前強いな！俺の仲間になれ！」

最悪のタイミングで（エヴァにとって）現れた薬味（父）と鋭い目付きで此方を睨む巫女好き剣士。

巫女好き剣士はリゲルとエヴァが人ではないことを指摘するものの

「何言ってんだ詠春？猫が人なわけないだろうが。」

とナギに言われたことにより少し傷つく。だがめげずに二人が異常だと言っことを訴えるが

「いいじゃねえか、旅の仲間はたくさんいた方が楽しいだろ？で、どうなんだ？仲間にならねえか？それと俺と勝負しろ！」

と言う一言で流されてしまう。

一方、二人は『何だか面白そうだから』と言うリゲルの言葉により、共に旅をすることを了承し、彼らに自分達の素性を明かす。

「いいでしょう、少年。私の名前はリゲル・マクダウエルです。此方の可愛らしい少女はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルと言います。私たちは人ではありませんし賞金もかかっていますが、それでもいいならあなた方と一緒に旅をしてもいいです。」

ナギは「オッシャー！仲間ゲットだ！」と喜んでいるものの、巫女好き剣士は可哀想な位顔が青くなっている。

この後どうなる？

「オツシャ〜！仲間ゲットだ！」

ナギが能天気にかんがいでいますが、そんなことは気にしていられませんが。ナギに考え直すように言うこともできません。

私達の目の前にいるのは

『ダークイレイザー黒の抹殺者』、『ヘルキャット死を運ぶ黒猫』、『サイレントデス無音の掃除屋』の異名を持つ500万ドルの賞金首リゲル

『ダーク・エヴァンジェル闇の福音』、『ドール・マスター人形使い』、『マガ・ノスフェラトゥ不死の魔法使い』、『あしきおとずれ悪しき音信』、『かいんのしと禍音の使徒』、『わらべすがたのやみのまおう童姿の闇の魔王』と呼ばれ、魔法世界で「なまげのような扱い」を受けている600万ドルの賞金首エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

リゲルは昔、とある国の魔法庫に侵入しありとあらゆる魔法書（禁書を含む）を『無断で』読破した為、その時の王の反感を買い、侵入されたことは公表されなかったものの（沽券に関わるため）多額の賞金をかけられた。（ただしもうその時の王は亡くなった為、何故こんなに賞金が高いのかは国の上層部と本人ぐらいしか知らない。）そして、賞金目当てに向かって来る魔法使いを撃退してたらいつの間にかこんな額になっていた。

今の私たちでは敵うわけがない様な化け物です。ある程度の実力を持つものならば、その姿を見ただけでそのことがわかるでしょう。

（ナギは敵意がない事と悪い奴ではない事を直感で見抜いています）

その化け物が何故か二人で行動していることも驚きですが、「リゲル」と言う名前しか知られていなかった賞金首の名にエヴァンジェリンと同じ「マクダウエル」が入っていることは只ならぬ関係と言

うことです。この事はこの業界に激震を与えるでしょう。

そんな化け物達がナギの一方的な提案に対して『旅に同行しても良い』と言っているのですから何か裏があるのかと疑うのは当たり前です。

そんなことをしても彼女達にメリットがないことや、その気ならば既に私たちは死んでいるということがわかっていても警戒しないわけにはいきません。

もしもの時に、少しでも私たちが生き残る可能性を高めるために・
・

ですが、それが杞憂だったのだと悟るのにはそれほど時間はかかりませんでした。

「俺はナギ・スプリングフィールドだ！これからよろしくな！」

「ええ、よろしく願いしますね？それで、そちらの方のお名前は
何というのですか？」

「っ！あ、青山詠春と申します、リゲル殿、エヴァンジェリン殿。
」

「フンツ！そんなに畏まれたら堅苦しいわ！そうだな、リゲル。」

「……………何故エヴァンジェリン殿はリゲル殿をなで続けている
のでしょうか？（詠春警戒度 70%）」

「その通りですよ、詠春さん。そこまで堅苦しい呼び方をしないで
ください。」

「しかたねえんだよ、前から直せっつても全然直さないんだよな。
堅苦しくてこっちが嫌になるぜ。」

「全くだ。こんな口調の奴と喋っても面白くないな。」

「それは大変ですねえ。私もこんな口調ですけど、嫌なら直しましょうか？」

「いや、別に直さなくてもいいんじゃないか？リゲルのは何故か堅苦しい感じはしねえからな。」

「リゲルとアイツでは比べる価値もないぞ？」

「そうですか、それならこのまま喋らせてもらいますね？あと、エヴァは言いすぎですよ。」

「………本当に、これがあの有名な賞金首達なのでしょうか？……リゲル殿は出会って間もないにも関わらずナギと親しげに話してますし、エヴァンジェリン殿はエヴァンジェリン殿で先ほどと変わらずリゲル殿を撫で続けてますね。そしてリゲル殿はそれを気にすることなくナギと話続けています。（詠春警戒度 20%）」

「言いすぎだと？そんなことある筈がないだろう？あんな奴をリゲルと比べる事自体がおかしいんだ。見るこの艶々の毛並みを！素晴らしい触り心地な上に、なんだか好い香りがするんだぞ！（エヴァの錯覚です）見るこの丸い瞳を！キラキ………」

「………目の前にいるのは600万ドルの賞金首ではありません。ただの彼氏自慢している彼女です。そしてその彼氏は彼女の

腕の中でされるがままになってます・・・彼氏と言っても今はどう見ても猫ですが・・・ところで彼らはカップルなんですか？

ですがそんな風には見えませんね。エヴァンジェリン殿の片思いというところですか？（詠春警戒度0%）

私はエヴァンジェリン殿の彼氏（？）自慢を聞き流しながら『これは警戒する必要があるな』と悟りました。・・・ところで何故か私の悪口ばかり言われてませんか？

「聞ってるのか！！」「ハイッ！！！」なら良い、でだな、リゲルの良い所はまだいっぱいあってな、その中でも一番なのは抱き心地だな、これは・・・・・・・・・・・・・・・・」

エヴァの『リゲルの良い所』の話はリゲルが止めるまで続いた・・・

この時詠春は『アラルブラ紅き翼で一番気苦労が絶えない男』としての第一歩を踏み出したのだった。

第14話 よろしい、ならば仲間になってやろう（後書き）

ヒロインのアーティファクト募集中です!!!!!!

エヴァ、マナ、このか、茶々丸、アスナ、刹那、テオドラ、千雨の
8人です。

特にエヴァとアスナをお願いします！

第15話 よろしい、既に保護済みだ（前書き）

今回は長いです。

駄文ですがどうぞ。

ヒロインのアーティファクト募集中です！！！！

エヴァ、マナ、このか、茶々丸、アスナ、刹那、テオドラ、千雨の
8人です。

特にエヴァとアスナをお願いします！

第15話 よろしい、既に保護済みだ

リゲルSIDE

ナギたちと出会ってから、7年経ちました。最近戦争が始まると噂になっています。

今は、皆で鍋料理を食べています。

思い返せばこの7年・・・色々なことがありました。

『アラルアラ紅き翼』として活動を始めたり、ナギがいつの間にかいなくなっていて、帰ってきたと思ったら「新しい仲間見つけたぜ！！」と言って、傍らにはアルビレオ・イマロリコンがニコニコしながらエヴァを見つめていたり、詠春の愚痴（ナギに対する）を聞いたり、エヴァに撫でられたり、エヴァを撫で返したり、またナギがいなくなったと思ったら「魔法の師匠見つけたぜ！！」と言って、傍らにはフィリウス・ゼクトがいたり、エヴァが「イジられたのが悔しい！」と涙目で頼んできたのでロリコンをボコボコにしたり、エヴァに抱きつかれたり、それを見たロリコンにエヴァがからかわれたり、今度はエヴァがボコボコにしたり、ナギがいつの間にか魔法使いと戦っているのを止めたり（武力で）していました。

一番印象に残っているのはアスナちゃんと出会ったことです。彼女は今、私の造った魔神具の中にで生活しています。私が生み出し

た猫たち（超廃スペック）と一緒にです……問題になってい理由は能力まで一緒に偽物を身代わりに行っているからです……

アスナちゃんと初めて出会ったのは、『紅き翼』としてオスティアの紛争に介入・援護していた時でした……

「せ 精霊砲全弾消失！」

「消失！？王都の魔法障壁ではないのか！？まさか……！！」

「広域魔力減衰現象を確認！減衰速度増加中……間違いない
りません！！」
『黄昏の姫御子』です！！」

「くっ、遅かったか。」

「ちっ……気に入らねえぜ！」

「全くです。」

この時は、エヴァは違う地域での活動をしていたので（直前まで「リゲルと一緒にいい！！」と言われて他のメンバーから生温かい視線が向けられました・・・）私、ナギ、詠春、アル（この頃はまだゼクトはいませんでした）の4人で紛争地帯に乗り込んで行きました。

「『たそがれのひめみこ黄昏の姫御子』・・・・・・・・何だってそんなもん！？」

「歴史と伝統だけが売りの小国に他に手はないでしょう。」

「だが王族だろう！？まだ小さな女の子だって話も聞けず。」

「冷静になりなさい、ナギ。熱くなるだけじゃ人は救えませんよ。」

「だけどリゲル・・・・・・・・」

「戦争ですからね（だからな）」

「向こうの真の目的もおそらく・・・・それに少女の年齢も私同様見た目どおりとは・・・・・・・・」

（アルは外見上は20代に見えますが、見た目どおりの年齢ではありません）

「くそっ！」

「見えてきましたよ、ナギ・・・っ!!」

「防御結界・・・うわぁ!!」

ドンッ!!

「大丈夫でしたか？」

「そんなガキまでかつぎ出すこたねえ。後は俺たちに任せときな。」

「お・・・お前たちは・・・『アラルブラ紅き翼』・・・『黒の・・・
それに』千の呪文の・・・」

「そう!! ナギスプリングフィールド!! そしてリゲル・マクダウエル!! またの名をサウザンドマスターとブラックイレザー!!」

「・・・フッフフ（ボキュ ドキュ バキュ ズキュ ガキュ
ゴキュッ）」

「安心しな俺たちが全て終わらせてやる」

「な・・・しかし・・・」

「私たちなら大丈夫だ。『自称最強の魔法使い』もいることだしな。」

「あんちよこ見ながら呪文唱えてますけどね。」

「あーあーるせーよ。だから魔法学校中退だつて言つてんだろ？」

「そこまでにしてくださいよ？彼女が見てます・・・こんにちはお嬢さん？お名前を伺ってもよろしいですか？」

無感情な瞳でこちらを見ている彼女に胸が痛みます・・・

「ナ・・・マエ・・・？」

その片言な喋り方で話す彼女の瞳を見ながら彼女の口元の血をハンカチで拭きます。そして私は決めました……彼女を救おうと・

「アスナ……アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオ
フュシア。」

「アスナちゃんですか？いい名前ですね。……魔神具発動・
……『猫は全てを停止させる』（ボソツ）」

チリンツ

私の首元の常時展開型アーティファクト『金色の鈴』が鳴ります・

そして、セカイは色を失い、全てが停止します。

ここで魔神具の説明をしましょう。魔神具とは、魔力と気と共に神力を使用することでその能力をセカイに干渉できるほどに強化したものです。

今回の『猫は全てを停止させる』は形を固定させなくても『金色の鈴』を媒介にすることにより即時発動が可能です。そしてこれはセカイの時間を止める魔神具です。私と私が触れたもの以外の時間は全て止まります。ただし、長時間の発動はできません。30分ほどが限界です。

「少し失礼しますよ？・・・魔神具発動『99%』^{タミ}」

そして私は魔神具『99%』^{タミ}をアスナちゃんに使用します。これは魂以外の全てを完全に本人と同じな魔神人形を作成する魔神具です。とはいっても魂は入ってませんし、今までの行動パターンを記憶から読み込んで本人がするであろう行動を予測し、実行するだけです。しかもこれは私とリンクしているので今人形がどう過^{コスモエン}ごしているのかわかりますし、任意で破壊することができます。これで『完全な^{テレクイア}世界』にさらわれても大丈夫です。

「これでいいですね。あとは・・・魔神具発動『全て猫だらけの理^ニ想郷』」

まさかここでこれが役に立つと思ってませんでした。この魔神具は任意の異空間を創造する能力で、この中には私が魂から生み出した猫たち（廃スペック+耳と尻尾が付くが人にもなれる）が300人ほど暮らしている。中には東京一つ分の自然豊かな空間が広がっています。

でも、何故か女の人（全員美女（美猫？））しか生み出せません？多分またアイツの所為でしょう・・・

中から出てきた猫たちに、「この子を預かってくれ、すぐに会いに行く。」と伝えて、猫たちにアスナちゃんを預けて空間を閉じ、^{クロノス}猫は全てを停止させる』の発動を停止させる。

少し誘拐つばい気もしますが、気にしません。オスティアにいる方がよほど犯罪つばいですからね。

これが終わったら、予定がいっぱいですね。エヴァを慰めたり、アスナちゃんに説明したり、アスナちゃんの心を取り戻したりと本当にいっぱいです。……

まあ、私は後悔しないようにするだけですけどね？

こうして私はアスナちゃんと出会いました。戦闘後、直ぐに『全て猫だらけの理想郷』^{ニヤハロン}に行き、まず謝罪から入り今の状況の説明、何故私がこうしたか、ここが嫌ならば直ぐに元の場所に帰れることを説明しました。

ですが、やはり今のアスナちゃんでは正常な判断ができませんし、意味もわからなかったようなので（当たり前ですよね）時間を遡れることを説明して（年は取らないようにクスリ漬けだったようなので大丈夫ですね……大丈夫じゃありませんし余計あそこに返したくなくなりましたが）その日は分身体をおいて帰りました。

こうして数年が過ぎアスナちゃんも心を少しずつ取り戻していき、大分自分の意見を話せるようになりました。そして自分の意思で「アソコには戻りたくナイ」と言ってくれました。

ですが同時に問題も発生しました。1つ目がエヴァにバレた事です。

何故エヴァにバレたのかというと・・・

「・・・おいリゲル・・・何だか最近お前から同じ女の匂いがするんだが・・・ドウユウコトカオシエテクレナイカ？」

時間があるときは分身体と交代してたりしていたので、人よりの鋭いエヴァにはバレてしまいました。・・・あの時はとても怖かったです・・・

正座をさせられながら本当のことを話し、実際に『ニャバロン全て猫だらけの理想郷』に連れて行き、アスナちゃんにも会ってもらいました。

そこで二つ目の問題です。最近のアスナちゃんは私によく抱きついてきます。よく手をつないだり、私の上に座ったりもします。・・・お分かりの通り、エヴァと行動パターンが同じなのです。

そういうことなので必然的に場所の取り合いが始まるわけです。流石に子供なのでエヴァは魔法を使いませんから（使っても無効化でしょうし）、肉弾戦になるわけです。といっても顔の抓り合いなの

ですが……
これにより二人の相手をより一層することになり、とても大変な
です……フウ……

アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシアSIDE

ワタシハ、アタリヲミマウス……サツキマデセンジョウニイ
タノニイマハチガウバシヨニイル……

アタリヲミマウス、マワリニハジュウジンガイテ、ココノセツメ
イヲシテクレタ……

ヨクワカラナイケド『リゲル』トイウヒトガワタシヲココニツレテ
キタラシイ……

アノトキワタシニナマエヲキイタオトコノヒト

ナゼカワカラナイケド、ソノナマエヲオモイウカベルトムネガアタ
タカクナツタキガシタ……

時は流れる・・・・・・・・

ワタシは少しずつだがココロを取り戻しているラシイ。ラシイというのはリゲルがソウ言っただけで自分デハあまり分らないカラダ。

最近ワタシは『エヴァ』というオナジくらいのオンナの子とよくリゲルをめぐって戦ってイル。

ワタシはリゲルといると何故かムネが温かくナル。ソシテ、エヴァがリゲルの近くにイルのを見るとムネがイタクナル・・・・

ドウシテムネがイタイの？って猫のミンナに聞いても、笑ってばかりでオシエてくれナイ・・・ミンナ揃って

「リゲル様とアスナ様のことですから・・・これ以上は言えません」

と言っていつも笑ってイル・・・・・・・・イツカココロを取り戻せ

タラわかるのカナ？

デモこれだけは言エル……

エヴァンジェリンSIDE

私は今、とても気分が悪い！！あの小娘のせいだっ！！！！あいつのせいで私だけの特権がいくつも奪われた！！

撫でてもらうのも、抱きつくのも、一緒に寝るのも、猫の状態を撫でるのも、匂いを嗅ぐのも……全部！！

リゲルから女の匂いがし始めたことに気づいて（リゲルは巧妙に隠していた為、バレるのに時間がかかった）直ぐに追及し、あの小娘と出会った。

あの小娘と目があつた瞬間「こいつ（コイツ）は敵だ！！」という共通認識が出来上がった。

そのあとは簡単だ。会うたびに喧嘩し、目が合えば睨み合い、片方がリゲル抱きつけば妨害し、自分が抱きつく。

だからアイツは、私の敵だ！！絶対に認めんぞ！！そして・・・

――

「「^{エヴァ}小娘にだけは（ダケは）、負けられん（負けラレナイ）！！！」」

第15話 よろしい、既に保護済みだ（後書き）

アスナフラグが立ちました!!

無理やりな感じもしますから、あとで手を加えるかもしれないです・
・・・

第16話 よろしい、ならば鍋將軍だ（前書き）

今回は会話中心ですから少し読みにくくなっています。

お気を付けください。

第16話 よろしい、ならば鍋將軍だ

SIDE

「対象はこの3人の男それに……この少年、少女の2人に、猫1匹だ。」

「フン……なんだただのガキ2人じゃねえか……それと、何で猫なんだ？」

「油断していると痛い目を見るぞ。オスティア回復作戦の失敗の要因はこいつらだ。すでに精鋭で組織された討伐隊も送ったが悉く返り討ちだよ。君が望むなら部下もつけよう、正規兵ではなく傭兵・賞金稼ぎになつてしまつが……」

「いらねーよ……一人で充分だぜ、任せときな……で、何で猫なんだ？」

「それはな……そいつがあ有名な『死を運ぶ黒猫』だからだよ。」

リゲルSIDE

「んっふっふっ、こいつが旧世界は日本の鍋料理って奴かあ。じや、早速肉を〜」

「あっナギおまつ・・・何、肉先に入れてるんだよ！」

「トカゲに肉でも旨いのかのう？」

「流石にトカゲの肉でも美味しいのかは判りませんね。」

「（ムグムグ）ほらリゲル、肉だぞ。あーんしろ。」

「あーん（むぐゴツクン）。ありがとうエヴァ。でも食べにくいので戻ってm「駄目だ。」・・・肉だけじゃなくて野菜も一緒に食べてくださいね。」

「いいじゃねえか、旨いもんから先だよ。ホラホラ（ひよいひよい）」

「

「バツバカ！火の通る時間差おいうものがあってだな、まずは野菜を入れて・・・あーちよっ！！」

「あーうつせ！うつせーぞえーしゅん！」

「フフ・・・詠春、知ってますよ。日本では貴方のような者を『鍋將軍』・・・と呼び習わすそうですね。（ズガンー！！）」

「ナベ・シヨーグン！？（ピシャーン！！）」

「つ・・・強そうじゃな。」

「わかったよ・・・詠春、俺の負けだ。今日からお前が『鍋將軍』だ。」

「全て任す。好きにするが良い。」

「んー・・・嬉しくないなー。」

「……まあ、本当は『鍋奉行』ですけどね？」

「そういえばリゲルの出身も日本だったな？」

「そうですよ。とはいっても大分昔の話ですけどね。」

「おお！何じゃこのソース。うまいぞ？」

「ホントだうめえ！？」

「これが日本の誇るお醤油ですよ。」

「それに大根おろしですね。」

「これがしょうゆかつ！スゲエうめえっ！！」

「ナギ。お前は日本に来た時、寿司食ったろ。」

「姫子ちゃんにも食わしてやりたいくらいの旨さだな?」

「姫子ちゃ・・・?ああ、オスティアの姫御子のことじゃな?」

「まあ・・・戦が終われば、彼女を自由にする機会も掴めるやも・・・です。」

「まあ、既に私が救い出していて、鍋どころか寿司もてんぷらも食べたことがあるんですけどね?」

「私も一緒に食べたぞ?でも私はリゲルと2人きりで食べたかったかな?」

「へーそーなのかー。」

「「「はあ!?!」」」

「ど、どうゆうことですか、リゲル！？姫御子が浚われたなんてことは知らないのですか？」

「数年前からあの姫御子は偽者ですよ、アル。会った時にそっくりの神魔人形を置いて、本物は私の造った魔具の中で私の知り合い達と一緒に生活してますよ。完璧に隠蔽してたのですが1年ぐらい前にエヴァにはバレてしまいましたけど。あっ一応秘密ですよ？」

「でかしたぞリゲル！でもよくそんなことできたなあ？……まあ、リゲルならできるのか？……」

「いつか大変なことを起こすと思っていましたけど、そんな大事を！」

「別にいいじゃないですか詠春。あちらのいた方が酷いですよ？」

「そついう問題じゃありませんよ！！一国の姫を誘拐するなんて……」

「いいじゃないですか、別に。それに能力まで99%本物そっくりな人形も置いてありますし……別に良いですよ？アル？（反対するようなら会わせてあげませんよ？）」

「・・・ふう、仕方ないですね。冷静に考えれば、リゲルの元のほうが比べるまでもなく良いですね。（絶対に会わせてください、約束ですよりゲル。）」

「後は詠春だけですよ・・・ああ偽者のことが心配なのですね。大丈夫ですよ？あちらの様子は私も把握してますし、いざとなれば超ド級の爆弾に早や代わりです。」

「ち、ちなみにどれくらいの威力なのじゃ？」

「そうですね・・・半径500M以内の物体は消滅しますよ？爆風は広がらない代わりに効果圏内の物体は完全破壊です。障壁を張っていても、障壁ごと破壊するので防御不可能です。」

「そつえばお前がこの中で一番バグだったな・・・この状態のリゲルに何を言っても無駄だぞ。」

「流石エヴァです、私のことをよくわかってます。また今度皆で会いに行きましょうか？・・・ですがこのままだと今後に影響が出そうですから・・・皆さん忘れてください」「・・・はっ？」「・・・」
ロストメモリー
魔神具発動『忘却』

チリンッ

「その戦だが・・・やはりどうにも不自然に思えてならん。」

「何が？」

ここにいる4人の中から（エヴァは今更ですからね）アスナちゃんの話の記憶を消しました。ロストメモリー『忘却』は記憶操作の魔神具で、今回は私の発言からロストメモリー『忘却』を発動するまでの記憶を消しました。影響が出て取り返しの付かない失敗をする訳にもいきませんし・・・うつかり今回は喋ってしまいましたけど、今後は自分の発言にも注意しましょう。

「何もかもだよ。お前が言い出したんだろうが、この鳥頭・・・ッ！（ドガッパシパシッ）」

突然、大剣が鍋に向かって飛んできました。詠春以外はそれに反応して飛び散る鍋の具材を空中で取ります。エヴァは自分の分と私の分として大量の肉と野菜を確保しました。そしてまたあーんをします。本当は自分で食べたいんですけどね・・・

「食事中失礼~~~~~ッ！俺は放浪の傭兵剣士ジャック・ラカン！！ittyちやろっぜッ！！」

そして筋肉ダルマ（ラカン）が姿を現しました。

「何じゃ？あのバカは？」

「帝国のつて訳じゃなさそーだな？」

「エヴァ、やりますか？軽い運動には持つて来いですよ？」

「いやいい。今は鍋を食べたい・・・ほらリゲル、あーん。」

「あーん（むぐゴックン）。猫だと頬が伸びませんから食べにくいのですが・・・」フ・・・フフフフ・・・「詠春・・・避けられなかったですね。」

「フ・・・食べ物を粗末にする者は・・・」

「どーしたー来ねーのかあー？来ねーならこっちから・・・」
「斬る！」いッ（キンッ）・・・おほ？」

「お？詠春の攻撃凌いでるぜ？」

「あの大男やりますよ、見たことがあります。ちよつと南で話題になった剣闘士ですよ。」

「ホイー丁あがり。」

「ほう、詠春がやられたぞ。（もぐもぐ）」

「エヴァ。野菜も食べてくださいね？」

「んむ、わかった。ちなみに今回のあーんのお礼は今夜は一緒に寝ることだからな。」

「人に戻らせてくれれば・・・一緒に寝ることだからなッ!!」・・・しかたないですね。おや、やはりナギが行きましたか。」

「てめえら手えだすなよ!!」

*****13時間にもおよぶ戦闘中*****

「フ・・・フフ・・・やるじゃねえか小僧（ハアハア）」

「あんだこそな（ハアハア）」

「うん、むう・・・フフフ／＼（スリスリ）」

エヴァは鍋を食べ終わると同時に私を抱いて寝始めました。（防音結界を張って、飛んでくる魔法や気や瓦礫は障壁で弾きました）

「エヴァ、終わりましたよ。起きてください、抱きつかれたままじや辛いです・・・仕方ないですね。詠春はナギを頼みます。（パアッ）」

私は人型に戻り、エヴァを抱きかかえます。

「ああ、わかつている。」

「リベンジすんぞ！必ず決着・・・つけてやる・・・ぜえっ！」

「おおーいつでも・・・こいや筋肉ダルマあ。戦争やってるより気が晴れらあな！」

こんなこと言ってますが両者共にプルプル身体を震わせています。これが喧嘩するほど仲が良いという奴ですね・・・

数カ月後……

「おうナギ！もう飲めねえのか？ガハハハハ！」

「バカいうんじゃない？！まだまだいけるぜ！！ハハハハハ！」

何故か知りませんがいつの間にかラカンが仲間になってました。

この頃戦争は激化の一途を辿っています。

そして帝国によるまさかの大規模転移魔法の実戦投入により連合の首元『グレートブリッジ』がついに陥落しました。

そこでアルギユレーの辺境に追いやられていた我々『^{アラルブラ}紅き翼』は前線復帰を果たしたのです。

第16話 よろしい、ならば鍋將軍だ（後書き）

こんな感じでどうでしょうか？感想お待ちしております。

ヒロインのアーティファクト募集中です！！！！

エヴァ、マナ、このか、茶々丸、アスナ、刹那、テオドラ、千雨の
8人です。

特にエヴァとアスナをお願いします！

第17話 よろしい、ならば協力者だ（前書き）

ヒロインのアーティファクト募集中です!!!!!!

エヴァ、マナ、このか、茶々丸、アスナ、刹那、テオドラ、千雨の
8人です。

今回も前回に続いて会話中心ですから少し読みにくくなっています。

お気を付けください。

第17話 よろしい、ならば協力者だ

リゲルSIDE

我々『アラルブラ紅き翼』は前線に復帰するなり、あらゆる戦場で活躍し、瞬く間に劣勢を覆しました。その中でも最大の激戦となった『グレートブリッジ奪還作戦』での活躍は後世に語り継がれるほどのものでした。

この決戦により戦況は逆転し、敵軍を攻め戻し帝国領内に侵攻しました。

この頃から、ナギや他のメンバーのファンクラブもできました。ただ、私のファンクラブだけは異質です。魔法世界の猫族の大半が加入しており出会ったびに崇められます。まあ、猫の神様みたいなものですから理解はできますが、納得はできません。もはや宗教のようになってしまったファンクラブって何ですか？ファンクラブの名前は『ブラックキャット黒猫』と言います……このクラブの創始者はエヴァでした……会員ナンバー0番で役職は名誉会長……

「フン！後悔もしてないし、辞める気もないからな！！」（エヴァはファンクラブができたと聞いてそれを即座に潰し、自分が新しい創始者になることで色々とコントロールしてます。）

・・・はあ・・・そんなことより

最近事件が発覚しました。アスナちゃんが『ニャバロン全て猫だらけの理想郷』の中で猫達から稽古をつけてもらっていたらしいのです。そして私が気づいた時には、既に『咸卦法』を使いながらの模擬戦に入っていました。何故発覚したのかと言うと

「~~~~~」

「おや、ミナ（猫の名前）何か良い事でもありましたか？」

「あつ御主人！いや〜最近アスニヤ様がどんどん強くなってきて、その成長が嬉しいんですニヤ。」

「よくわかりませんが、アスナちゃんの成長は嬉しい限りですね。で、何が強くなったのですか？」

「勿論戦闘ですニヤ！最近では『咸卦法』も自在に使いこニヤせるようにニヤつてきて・・・ウニヤ？このこと御主人には秘密だったかニヤ？」

「ほう・・・私に知らせもせず勝手に戦闘訓練ですか・・・ちゃんと言いましたよねえ？勝手に変な事教えないように、もし何かするならそれにちゃんと報告するようにと・・・」

「そ、ソソニヤこと言ってたかニヤア???（汗）」

「今すぐ全員此処に集めなさい、説教してあげます!!今日は寝かせませんから覚悟しなさい!!!!!!後で罰も考えないといけませんね?」

「フニヤ~~~~!ゴメンなさいにや~~~~。悪気はなかったんだニヤ~~~~。だからマタタビだけは!マタタビだけは~~~~~!!」

あの猫^こ達は無駄に廃スペックですし、妙なところで張り切ってしまう癖がありましたから今回もまた無駄な連帯感を發揮して私にはバれない様にしながら修行してたようです・・・しかも1年以上前から・・・

あの子達は単独で準最強クラスのスペックはありますからね・・・
・全員で協力して本気で隠蔽してきたのでしよう・・・

勿論お仕置きとしてマタタビ一週間禁止の刑を言い渡し問答無用で全てのマタタビを回収しました。

「そんなにや殺生にや!」とか「アスニヤ様が自分から教えて欲しいって言っただんですニヤ!」とか「皆で相談して御主人を驚かせたかっただけなんだニヤ~~~~!」とか言っていました但し今回は許しません。駄目なものは駄目としっかり教えておかないといけませんからね。

その後、実力行使に出た猫達を（流石に一週間マタビ抜きは耐えられないみたいで）全て沈黙させた後（後書き参照）、アスナちゃんにも話を聞きに行きました。アスナちゃんいわく

「ワタシ、エヴァに負けたくナイから。」

「リゲルより強くナツテ、護ってあげル。」

だ、そうです。初めて自分から「やりたい」と言ってくれたことですから、保護者的立場から言うとな最後の歯痒しかったですし、勿論やらせてあげたいです。

• ですが……でも……いやしかし……やはり……

いろいろ考えた結果、今後は私立会いの下訓練すると言うことと、他にやりたいことがあったら直ぐに相談する事になりました。

そんなこんなで色々ありましたがその後はガトウさんとタカミチ君と出会ったり、戦争の黒幕である「完全なる世界」「コスモエンテレケイヤ」の存在が発覚したりしました。

そして今は、ガトウ（呼び捨てで良いと言われました）に呼び出たところです。まあ何故呼び出されたのか知っていますけどね。

「何だよガトウ、わざわざ本国首都まで呼び出してさ。」

「会って欲しい人がいる。協力者だ。」

「協力者？」

「そうだ。」

「あなたは・・・マクギル元老院議員！」

「いや、わしちゃう。主賓はあちらのお方だ、ウェスペルタティア王国・・・アリカ王女」

「・・・・・・・・」

「ん（ナギの奴見とれてんな）・・・おう姫様。俺は『千の刃の男』こと、ジャック・ラカンだ。」

「気安く話しかけるな下衆が！」

「お初にお目にかかります、王女様。私は『紅き翼』^{わたくし アラルブラ}の一員、リゲル・マクダウエルと申します。此方にいるのは弟子のエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルです。私には性がなかったのですが、弟子であるエヴァンジェリンの性を貰い、マクダウエルと名乗らせていただいております。ご協力感謝します。」

「うむ、よろしく頼む。……1つ訊ねるが、本当にお主は人なのかな？今は何処からどう見ても猫にしか見えぬが。」

「では、後ほどお見せしますね。」

「うむ、頼む。では……。」

*****数時間後*****

「ワハハハハ！上手いことやりやがってこのガキヤ！」

「ああ！？何の話だ！？」

「とぼけんじゃねーよ！お姫様とイチヤイチャキヤイキヤイおしゃべりしてたろーがっ！」

「してねっつの！何がイチヤイチャだ！そんなことならリゲルも姫さんと喋ってたじゃねーか！」

「私のあれはナギのとは大分意味合いが違いますからね？」

「なーに言ってるんだよ俺なんか・・・」気安く話しかけるな下衆が！「だぜ~~~~~？ありやイイ女だぜ。一本芯の通ったな？」

「そうですね。目から強い意志が感じられましたからね。」

「ほう、リゲルはああゆうのが好みなのか？（だそうだぞ？アスナ）」

「（ワかった。今後ノ方針はコレで行こう）」

（最初は喧嘩ばかりだったが、最大の敵はリゲル自身であることに気が付いた二人は、協力体制を取るようになっていた。）

「（ゾクッ！何故か寒気が？）それはまた別ですよ。」

「お前ら大丈夫か？俺あんなおっかねえ女見たコトねえぞ。」

「その内分かりますよ？」

「リゲルの言う通りだな。グハハハハハハ！」

「何だよ！意味わかんねえよ。」

「（仲いいな by 詠春）」

そして、アリカ殿下の協力も得た我々は「完全なる世界」コスモエンテレケイアの正体を
探し始めるのです。

数日後……

「「気安く声をかけるな（ナ）、下衆が（ガ）」」

二人の少女に暴言を吐かれてうな垂れている黒猫がいましたとさ。

第17話 よろしい、ならば協力者だ（後書き）

「猫達の反逆」

「諸君 私はマタタビが好きにや 諸君 私はマタタビが大好きにや

猫じゃらしが好きにや

刺身が好きにや

ササミが好きにや

猫缶が好きにや

アスナ様が好きにや

御主人が好きにや

平原で 街道で 塹壕で 草原で 凍土で 砂漠で 海上で 空中

で 泥中で 湿原で

この地上でありとあらゆるマタタビが大好きにや

更なるマタタビを望むにや？ 最高のマタタビ酒を望むにや？

怠惰の限りを尽くし猫の本能がみやみやにマタタビを望むにや？

『ニヤー！ ニヤー！ ニヤー！』

よろしい にやらば反逆にや

我々は渾身の力をこめて今みやさに振り降ろさんとするネコジャラシにや

だがこの暗い闇の底で半世紀みよの間堪え続けてきた我々にただの
マタタビではもはや足りにやい！！

マタタビ酒を！！ 勝って最高のマタタビを手に入れるのにや！！

『ニヤー！ ニヤー！ ニヤー！』

「はい、そこまでですよ〜〜〜（ペシペシペシッ!）」

「目ぢや!目ぢや〜〜〜〜!..!」

「痛いっ!サ ンパスが目染みるニヤ〜〜!..!」

「フニヤ〜〜!..!」

「勝手にアスナちゃんに色々教えた罰です。フハハハハ〜〜〜〜!」

「「「「「ミギヤ〜〜〜〜!..!」「「「「」

数分後、寝そべってピクピクしている猫達が大量に発見された。

第18話 よろしい、ならばあえて畏に嵌ろう（前書き）

ヒロインのアーティファクト募集中です!!!!!!

エヴァ、マナ、このか、茶々丸、アスナ、刹那、テオドラ、千雨の8人です。

今回も前回、前々回に続いて会話中心ですから少し読みにくくなっています。

お気を付けください。

感想に対する対処の仕方がわかりません。返事をした方がイイのでしょうか？

よくわからないので此処でお礼を・・・

感想をくれた方、ありがとうございます。それを励みに毎日投稿を続けることができます。今後ともこの作品をお願いします。

第18話 よろしい、ならばあえて罅に嵌ろう

前回、アリカ殿下の協力を得て、『紅き翼』アラルブラは『完全なる世界』コスモエンテレケイアの正体を探り始めた。

その頃のリゲルは・・・

「二人の中での私は下衆^{げす}だったんですね・・・Orz」

予想以上に「気安く声をかけるな（ナ）、下衆が（ガ）」の一言が効いたため寝込んでしまっていた。

そして二人の少女は自分達の間違いに気づき反省した後、嬉々としてリゲルの看病に当たった。その見返りとして後日二人に『ご褒美』をあげるようになったリゲルは、本人は気づいていないが傍から見ればとても不憫である。

そしてリゲルは数日間全く使い物にならなかった為、リゲル達（エヴァ）とバカ2人を除いた5人で『完全なる世界』コスモエンテレケイアの調査を始めていた。

ウエスペルタティア王国の王女アリカ・アナルキア・エンテオフュシアじゃ。

数日前、此度の戦の黒幕であろう「完全なる世界」コスモエンテレケイアについて調べる為に『紅き翼』アラルブラに協力することになったのじゃが、その関係上今は『紅き翼』アラルブラの者達と行動を共にしてゐる。

行動を共にしてゐると言つたが今は実際に何か協力できるわけでもないのじゃから、なぜか氣になるあの者と買い物にと思つたのじゃが………

「買い物に付き合え？何で俺がッ！」

バチーン

しかしアヤツはせつかく誘つてやつたといふのにあるうことが断わりおつた！！

つい頭にきた私は、魔力を込めた右手で思いっきりビンタしてやつたのじゃ！

「5分じゃ、それまでに準備しておくのじゃぞ。」

そして今はナギと一緒に買い物をしておる。

「これはなんじゃ？」

「しらねーよ。」

「そうか・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「あれはなんじゃ？」

「知るか。」

バチーーン ！！

別にこの程度のこと国務である『古狸共との騙し合い』と比べれば何という事はないというのに、なぜかナギにこの様な態度を取られると頭にくるのじゃ！！自分でも訳がわからぬ！？

トクン

この時すでに気づいておったのかもしれない。

だが、私の名はアリカ・アナルキア・エンテオフユシア

それ故にこの気持ちを無意識に心の奥底に閉じ込めたのかもしれない
な・・・・・・・・

本人以外には隠しきれてはおらなかったと思うがの

リゲルSIDE

やっつと立ち直ることができた私は、今滞在している拠点のリビングに向かっています。なにやら遠くから詠春の怒鳴り声が聞こえるので、またナギがやらかしたのでしょう。

「どうしたんだ、リゲル？（ナデナデ）」

「いえ、詠春の怒鳴り声が聞こえたのでまたナギがラカンが何かやらかしたんでしょう。」

「あいつはよく懲りずにああも問題を起こせるものだな？（スリスリ）」

おや、アリカ様がタカミチ君に話しかけてますね。それにゼクトも一緒ですか？珍しいですね、どうかしたのでしょうか？

「その少年。」

「ひゃ、ひゃいー!!」

「ナギに昨日は楽しかったと礼を伝えてくれぬか？（ニコッ）」

「／／／」

ほう、いい笑顔ですね。いつもは無表情ですから普段とのギャップで威力は倍増です。この笑顔にナギもやられたのでしょうか？

「ムウ……（リゲルの奴、あんな小娘に見惚れよって！！あんなのよりも私の方が……ブツブツ……）」

ワシヤワシヤワシヤ……！！（無意識に力が増していく……！！）

「あの・・・エヴァ？撫でるのならもう少し優しく（ワシヤワシヤ
ワシヤシヤシヤシヤシヤシヤ……………！！！！！！！！）ヤッ！ソコ
は！本当につ・・・ヤ・・・ダ・・・フニヤアアア~~~~！！・・・
・・・・・・（ガクツ）」

「おや、エヴァ殿ではないか。リゲル殿がぐったりしておるがよいのか？（何度見てもリゲル殿の毛並みは素晴らしいのう。いつか触らせてもらえぬじやろうか？）」

「大丈夫だ、問題ない。（コイツツ……もしやりゲルのことを！

!!・・・いや、無いな。それにこいつはもう売約済みだからな。」

グテ~~~~ン（頭＋足＋尻尾に力がいっておらず、エヴァに抱かれたままピクリともしないリゲル）

「そうは見えぬがのう？（リゲル殿・・・不憫じゃな）」

なんだかんだで最近エヴァ（達）に色々やられて全く役に立っていないリゲルだった。

そして、アリカ様は自分にできることをするために帝国へ向かった
（後書き参照）

その頃……

「あの執政官コンスルがテロに関与！？確かなんだね……」

「ハ、確かな証拠が……」

「よくやった……では今夜にでも……」

「了解しました。」

その日の夜……ナギ、ラカン、ガトウ、私の四人でマクギル元老院議員に会いに行った。そして、本当の黒幕の1人が姿を現した。

「マクギル元老院議員。」

「ご苦勞、証拠品は『ちょっと待ってください』……なんだね、リゲル君。」

「いえ、ただ偽者には早々に退場してもらおうと思ひましてね？
魔神具顕現『ハーデイス』リロード！
『超電磁砲』
レールガン」

ズガガガガガー！

「「な．．．」」

「ちょー！ー！っ！？りげるおまつ．．．何やってんだよ！ー！も
しかして、マクギル元老院議員死んでんじゃねえか！？」

「ナギ．．．気づいてますよね？」

「もちろんだ！！お前ら．．おっさんをよく見てみな。」

「何っ．．．」

「．．．よくわかったね。流石は『黒の抹殺者』
ダークイレイザーだね。でもこ
んなに簡単に見破られるなんてね．．．もう少し研究が必要なよ
うだね。」

「その様子だと、マクギル元老院議員は既に・・・」

「ご想像通り、既にメガロ湾のそこだよ。」

「てめえっ!!」

ナギが飛び出して行きますが、両側から二つの気配が来ています。

「通しませんよ。」

「くらえ」

「!?!」

ナギを挟むようにして二人の男が現れます。ですがっ！

「そつはさせませんよ?」

ドンッ!!!

「あとはあなた一人ですよ、アーウェンルクス創物主の玩具?」

ナギに襲い掛かっていた二人を無力化し、改めて彼を睨みます。

「「「なっ!!」「」」」

「ふっ、もしかしたら知られているかもしれないと思っていただけまさかそこまで知っているなんてね……お前、どこまで知っている?」

「本当に言うと思ってますか?」

「いや、まあいいよ……わ、わしだ! マクギル元老院議員だ……うむ、反逆者だツ! ああ、うむ、確かだ。奴らに暗殺されかけたっ……は、早く救援を頼むツ。スプリングフィールド、ラカン、マクダウェル、ヴォンデンバーグ。奴らは帝国のスパイだった! 奴らの仲間もだ! 軍に連絡を……」

「げ!」

「やられたな。」

「では退散と行きましょう。魔神具発動『てんそつぎょう転送鏡』……それで

はまた会いましょう?」

「・・・本当にキミは何処まで知ってるんだい? 『黒の抹殺者』^{ダークレイザー}・・・」

連合からも追われる身となったのでとりあえず安全であろうオリンポス山の隠れ家に転移しました。

「ふう、皆さん無事ですか?・・・ちゃんとタカミチ君たちも拾えましたね? やったこと無かったので心配でした。さて・・・」

「「話聞かせてもらおうか(くれねえか)(じゃねえか)?」」

「まあ、こうなりますよね〜。」

こうして私は自分の秘密の一部を仲間に明かすのでした。

第18話 よろしい、ならばあえて罫に嵌ろう（後書き）

魔神具説明

ハーデイス……そのまんまアレです。とは言っても色々と魔改造されてます。

転送鏡……予め登録した場所に登録してある人物を転送させる魔神具

とある王女様の苛立ち

「あの証拠があれば、戦を終わらせられるのじゃない？」

「ま、多分な。」

「では、主に任す。」

「あんたもよくやるぜ。戦火の中こんなボ口舟で帝国第三皇女と接

触しいこつってんだからな。」

「なんじゃ、心配しておるのか？（トクン／＼／）」

「へ？心配？何の？」

ブチィ！！

バチバチーーン ！！！！！！！！

そうして王女様は舟に乗って去っていきました。

「フン、私がいれば問題ないわ！ハーハッハッハ！」

一人の少女と共に

第19話 よろしい、ならば説明しよう（前書き）

総合 PV307,019アクセス・・・皆さんありがとう！！
30万アクセス記念に何かしようかな？

感想ですが、これからは更新が遅れない程度に返信します。

アーティファクト募集中です。

エヴァ、マナ、このか、茶々丸、アスナ、刹那、テオドラ、千雨
お願いします。

あと、イヴを出してはどうか？と言う感想をくれた方（ありがとう
ございます！！）がいたのですが、チャチャゼロを改造してどうに
かできないかと考えております。

どうでしょうか？皆さんの意見が欲しいです。

第19話 よろしい、ならば説明しよう

リゲルが本国首都を脱出する直前……

エヴァンジェリンSIDE

「ちっ！数が多過ぎる！！」

私はリゲルに頼まれて小娘（私から見れば大抵はガキか小娘だが）の護衛と言うことで帝国第三皇女との接触に同行していた。どうにか接触に成功し、情報交換等を済ませこれから本格的に会談を始めようとしたとき

キイイン

「っ！！この魔力は……転移魔法だと！小娘共！直ぐに逃げる準備をしろ！！」

周囲に幾つモノ転移魔方陣が広がり、それと同時に複数の悪魔が召

喚されるのを感じる・・・事態は最悪だっ！

非公式な接触であるために碌な戦力になる者は少ない上に何処からか情報が漏れていたためであろうか相手は数百を超えるほどの十分な戦力を準備してきている。

私一人ならば逃げることも容易い・・・だが小娘二人を護りながらとなると話は変わる。

一人がどれだけ大きな力を持っていようと、護る人がいる状態ではその力は十分に生かすことは不可能、それに加えて相手はその一人を数に物を言わせて蹂躪しようとしてくる。

「クッ！（遠すぎてリゲルとも連絡はつかんっ・・・魔法を使ううにも手数が多すぎて護りながらでは手が出せん・・・手詰まりか・・・）・・・せめて小娘共だけでも！」

護りながらの戦いに慣れていないエヴァはどうか二人を逃がそうとするが

「準備完了しました！」

「チャンスは一度きりだ！外すんじゃないぞ！・・・総員・・・撃てー！！！」

襲撃者達の大魔法が完成し、絶体絶命の事態に陥ってしまう。

リゲルSIDE

「「話、聞かせてもらおうか（くれねえか）（じゃねえか）？」」

「まあ、こうなりますよね〜。」

私たちはオリンポス山の掘っ立て小屋に転移したのですが、すぐさまナギたちに尋問されています。それにゼクトやアルも加わって（タカミチ君は少し離れた場所にいます）体感圧力が倍になりました。

「リゲル、あいつらは何モンなんだ？」アーウエンルクスで言うのはなんなんだ？」

「そうですね・・・ならば話しましょうか。まずアルの『イノチノシヘン』が私に効かないのは私の名前が特別だからです。」

「それはとても興味深いことですが、質問の答えではないですよ？」

「まあ最後まで聞いてください。正直に言いますと、私、神様と知り合いな上に私自身も神みたいなものなんですよ？」

「……………は？」「……………」

「私の名前は神様の贈り物ですから色々と『抵抗』^{レジスト}しちゃうみたいなんですよ。私が猫になれるのも、さつき武器も、転移したのも神である私の能力です。あとそんな私が此処にいるのは少し気に入らないことをしようとしている奴がいたのでサクツとやってしまおうと思ったからなんですよ。その標的が『完全なる世界』^{コスモエンテレイア}と言っわけです。だからその情報を持っていてもおかしくないでしょう？今まで言わなかったのはあまり手を出しすぎると歴史に干渉し過ぎるかもと思っていたからです。ここまでやっても問題ないようですからもういいですね。あ、あとこのことはエヴァは既に知ってますよ。何か質問はありますか？」

すこし嘘を加えながら、私のことを話します。そして彼らの反応は私の予想通りだったようで

「……………ポカーン」「……………」

全員が突然のことに反応し切れていません。コレが本当の狙いで、深く聞かれてボ口を出す前にこの話をここで終わらせようと畳み掛けます。

「無いようですからコレでこの話は終わりです。今後質問は受け付けません」「ちよつとまった！」ナギ、何か質問ですか？でもコレで最後ですから慎重に質問内容を考えてくださいね？」

もう少しだったんですが……

「あいつらの……『完全なる世界』「コスモエンテレケイア」の本当の目的は何だ？」

コレなら答えられますね。もつと無茶なことを聞かれたらとヒヤヒヤしました。

「魔法世界の救済です……ただし、とても愚かな方法での救済ですけどね。これ以上は言いません。今一番やるべきことを見失ってしまいそうですからね。でも、コレだけはいえます。彼らのやり方は間違っている。」

「そうか……。ならこの話はここまでだ！それだけわかれば十分だ！『完全なる世界』「コスモエンテレケイア」は俺達がぶっ潰す！……。俺は難しいこととはわかんねえし、お前が神様みたいなモンだとしても態度を変えるつもりなんか全くなえ、俺は俺の好きなようにするし、あいつ等をこの手でぶん殴る！いいよなりゲル！！」

「はい、勿論です。じゃあまずはこれからの事ですが、アリカ様と

エヴァと帝国の第三皇女様は捕らえられてしまったようです。エヴァは何らかの方法で封印されているようですから今は動けません。ですから私たちで迎えにいったあげましょう。」

「よしっ！行くぞ野郎共！！仲間を助けに行くぞ！！！！！」

真っ先に駆け出すナギでしたがアルの

「ナギはアリカ様のいる場所はわかってるんですか？」

と言う発言によってとまらない訳にはいかず、私にアリカ姫の場所を聞いてから

「行くぞ野郎共！！！！仲間を助けに『夜の迷宮』ノクティス・ラビリントウスに突入だ！！！」

そいつってまた駆け出していきましたが詠春の

「作戦もなしに突っ込んでいったらアリカ様たちが危ないだろ！」

と言う発言によりまたもや止められ、ナギは作戦会議が終わるまで不貞寝していました。

それを見てすこし笑ってしまったのは秘密です。

第19話 よろしい、ならば説明しよう（後書き）

明日、更新休むかも知れません。知人が入院するので・・・

第20話 よろしい、ならば救出だ（前書き）

この小説も20話となりました、振り返ればあっという間でした。

ここまで続けられているのは皆さんのおかげです。ありがとうございます。
います。これからもよろしくお願いします。

今回はリゲルがキレます。少しグロ注意！

今回はアスナは出ません。次回こそは出したい！！

何時にも増して駄文に仕上がってしまいました。ごめんなさい。

第20話 よろしい、ならば救出だ

数日後の『夜の迷宮』にて……
ノクティス・ラビリントウス

「交代の時間だ。何かあったか？」

「何も問題ありませんでしたよ。後は頼みます。（チリン）」

「……ん？あんな奴いた（チリン）……あれ？今か聞こえたよう」（ザシュ！！ゴトン！！ブシュ……！！！！！！）……」

「……まずはエヴァを探しましょうか。」

（チリン）

その男が通った道に残っているのは人の形をした膨大な数の肉塊だけだった。

リゲルSIDE

ただ今我々『紅き翼』^{アラルブラ}は『夜の迷宮』^{ノクティス・ラビリントゥス}に囚われの身となっているアリカ様、帝国第三皇女様、エヴァの三人の救出作戦の実行中です。

「ん、何してんだ？まだ交代の時間じゃないだろ（ザシュ！！ゴトン！プシャアアー！！）……………」

今回の作戦は、まず『紅き翼』^{アラルブラ}の中で一番隠密活動にむいている私（変装済み）がエヴァの救出に向かい、エヴァの救出後『夜の迷宮』^{ノクティス・ラビリントゥス}内部を破壊し始めます。ナギたちは私が侵入してから5分後に混乱に乗じてアリカ様たちの救出に向かい、私たちもきりが良い所で合流し脱出という流れです。

「（エヴァとアリカ姫の救出を）同時にやればいいんじゃないか？」

とラカンに言われましたがコレには理由があります。

私がエヴァに持たせている魔神具の1つによってエヴァの大まかな現在地と状態を把握することができます。

その情報から考えるにエヴァは瀕死の状態で強力な魔法が何かで拘束されているはずです。

エヴァは真祖の吸血鬼ですから体力や魔力は直ぐに回復するはずなのですが、今のエヴァの状態は『重体』です。真祖だからこそ生きながらえているという危険な状態です。一刻も早く回復を阻害している原因を破壊し、治療する必要があります。

この状況で同時に救出しようとした場合エヴァの命に関わるかも知れない為、同時に救出するのは不可能なのです。

「おいお前！ここから先は吸血鬼が封印されている場所だ！

許可が無ければ入r」五月蠅いです。死んでください（グサっ！）」

ゴフッ！・・・き、きさm・・・（ズボッ！ブシャー！）

「

ここで「エヴァはなぜ重体のままなんだ？普通なら殺されているはずだろう？」と思う方もいると思いますが、真祖の吸血鬼ということを考えれば自ずとわかるはずです。

少し考えればいくらでも利用する手段があるエヴァを『腐った豚共』がそう簡単に殺すはずがありません。

確実に反抗できない状態で何らかの強力な魔法で拘束されているでしょう。そして、もしもの時のために軍を駐留させているようです。今頃上層部の豚共は、エヴァをどう利用するかを考えていることでしょう。

「今迎えにいきます、エヴァ……」

私は自分の感情を抑えながらエヴァの元へ急ぎますが、抑えきれなかった感情は周りを傷つけていきます。

私の通った道は全て血まみれです。

私が今まで生きてきた中でこれほどの怒りを感じたことはありません。

彼女達を救出したあかつきには……ここを地図上から消滅してやります。

ここにいる人には確実に死んでもらいます。そして、今回の首犯であろう上層部の豚共は、いつか必ず生きてきたことを後悔させてやりますよ……

「ヒイイ！！止めてくれ！！命だk（ザシュ！！）……わ……」

特殊な魔法がかけられている扉を超高濃度の魔力と気と神力を纏わせた手刀でそこにいた衛兵ごと切り裂き、消滅させます。その先にはボロボロな状態で魔方阵に囚われて気絶しているエヴァがいました。

「やっと見つけました。今助けますからね？」

神力を込めた目で魔方阵を睨み粉々に破壊した後、私が使える回復魔法でもっとも強力なものをかけ、ボロボロな服の変わりに様々な防御魔法を組み込んである外套を着せます。

ここまでで侵入してから三分です。アリカ様のいる場所も把握しますから直ぐにそちらに向かいます。ナギたちに『来なくていいです。姫様たちは直接そちに転移させるから離れていてください』と一方的に伝え、念話終えます。

幸い、壁を24、5枚壊したらその先にアリカ様たちはいましたから、何か言われる前に直ぐに転移させることを伝え転移させようとした時、急に奥の壁が破壊され、その先にナギがいました。

「よお来たぜ姫さん。あとリゲル！俺の仕事とってんじゃねえよ！」

「遅いぞ我が騎士。リゲル殿が来た後に来るとは何事だ！！一番先に助けに来ぬか、馬鹿者！！」

「なっ！仕方ねえーじゃねえーか！！そという作戦だったんだよ！！」

「痴話喧嘩は後にしてください、エヴァが起きてしまいます。皆さ

と一緒にオリンプス山に転移させますから」

「ちょ、痴話喧嘩ってどうゆーこと『転移開始』……………」

後で色々言われそうですね？言い訳を考えておきましょう。

さて、一人たりとも逃がしませんよ？

数日後、どれだけ呼びかけても応答しない『夜の迷宮』ノクティス・ラビリントウスの軍隊の様子を調査するために送られた部隊が発見したのは、あちこちが血に染められた迷宮だった。だが何故か死体は存在せず、おびただしい量の血痕のみが残されていたと言っ。

これは後に『真紅の迷宮事件』ブラッドディラビリンントウスと名づけられ、その存在は上層部によってもみ消された。その為この事件はほとんどのものに知られることは無かった……………

私は皆を転移させた後、天井を突き破り上空へ飛翔し半透明の純粋な神力を両手に収束させ圧縮します。

痛々しいエヴァの傷が目には浮かびます。そのたびに神力の収束圧縮速度は上昇していき、悲鳴のような表現できない音が鳴り始めます。そして私はゆつくりと両手を『夜の迷宮』ノクティス・ラビリントゥスに向けま

「『我が手に集え終焉の焰！我が命に応え敵を滅せよ！！其はその全てを無に誘う者！全てを殺せ！！』
虚空炎こくえん」

両掌の神力球は黒く染まり、二つが合わさり『夜の迷宮』ノクティス・ラビリントゥスに光速で飛んで行き一瞬だけ直径1kmほどに膨らんだ後、揺らめきながら消えていきました。

虚空炎こくえん は莫大な量の神力を圧縮し、それを高濃度の消滅の概念を付与した黒い焰に変換し球状に圧縮して発射する『広域選別消滅技』です。これは標的に当たると同時に球状に膨らみその内部にいる複数の標的のみを選別し塵1つ残さず消滅させる技です。でも技というのは少しおかしい気がするので今後名前を変えるかもしれませんね。

『夜の迷宮』ノクティス・ラビリントゥスの内部にいた人間だけ
虚空炎こくえん によって全て焼く尽くされ、消滅しました。魂ごと消滅させたので輪廻の輪に戻ること
も叶いません。

気が狂うほどの激痛を与え続けるのも良いですけど、そんなことをしても時間の無駄ですし、証拠を残したくは無いですし、早くエヴァの元へ行きたいので一瞬で終わらせることにしました。

エヴァが起きる頃には近くにおいてあげましょう。そして

「よく頑張りましたね。」

と言いながら頭を撫でてあげるのです。そうすればエヴァは笑ってくれますからね。

第20話 よろしい、ならば救出だ（後書き）

ほとんど進んでません……次回こそはしっかり進めたい！！
けど……無理そうです。

とても時間がかかりそうです。

感想に返信してますけど……間違えてませんよね？

あと……評価と感想とレビューが欲しいです。
どうかお願いします！！本当に励みになりますから！！

第21話 よろしい、ならば杖と翼を預けよう(前書き)

ふと、はがないを書きたくなりました。

一人オリ主入れて幼なじみ設定で・・・

性別は男？にしたいですね・・・

更新が遅くなりそうですからまだ検討中ですけどね・・・

どうでしょうか？

第21話 よろしい、ならば杖と翼を預けよう

??? SIDE

安心できるにおいがする。

さっきまでの痛みも無くなって、暖かい何かに包まれている。

思わずそれにギュッと抱きついて私はこう言って、また意識を手放した……

「ありがとうリゲル。大好きだよ。」

リゲル SIDE

少し遅れて私はオリンポス山の隠れ家に合流しました。

「何やってたんだ？」

と詠春に聞かれましたが

「証拠隠滅してただけですよ？」

と言って誤魔化しました。

今は、エヴァを抱きかかえながら目を覚ますのを待っています。

「何だ、これが噂の『紅き翼』^{アラルプ}の秘密基地か！どんなところかと思えば・・・掘っ立て小屋ではないか！」

「俺ら逃亡者に何期待してんだこのジャリはよ？」

「何だ貴様無礼であろう！！」

「へっへん！生憎ヘラスの皇族にや貸しはあっても借りはないんでn「そこまでですよ？」ゲッ！リゲルもう来てたのかよ！」

「子供相手に何やってるんですか？わざわざ言い争いになるような事をしなくてもいいでしょう？またO・H A・N A・S I が必要いや！だいじょうぶだ！次から気いつけるから、なっ？なっ？」・

・次は問答むようですからね？」

（リゲルの圧倒的な戦闘能力をフル活用したO・H A・N A・S I
はラカンにも有効でした。）

「さて……私は『紅き翼』^{アラルブラ}のリゲル・マクダウエルと申します。
へアス帝国の第三皇女様とお見受けしますがお名前を伺っても宜し
いですか？（ニコツ）」

「おおっ！御主は私の王子様ではないか！！（ノノノ）」

「ええーと……何故私が王子様なのか伺っても良いでしょうか、
皇女様？」

「そんな堅苦しいしゃべり方をするでない！！あと私のことはテオ
と呼ぶのじゃ！！！」

「では、テオd「テオじゃ！」……テオd「テオと呼ぶのじゃ
！！あと敬語は要らん！妾も御主のことをリゲルと呼ばせてもらっ
からの！」……わかりましたよ、テオ。で、何故私が王子様
なのですか？別に王様の息子という訳ではないのですが？」

「一目見たときから御主は妾の王子様じゃ！！（ノノノ）」

「アル・・・これは・・・そういうことなのか？」

「フッフ・・・多分その通りですよ、詠春？」

「どうゆーことだ？説明しろよ！アル！」

「それはですね・・・ということですよ、ナギ。」

「オホッ！リゲルの奴モテモテじゃねえか！これは面白くなりそう
だぜ！！」

「タカミチ君、こっちに来なさい。（これはタカミチ君の教育に悪
いな）」

「（??）わかりました、師匠。」

「エヴァ殿も大変じゃのう。」

「?よくわかりませんが、私はテオの王子様になった覚えはないのですが? (コテン)」

訳が分からなくて思わず首を傾げてしまいます。

「(~~~~!!//) リゲルは妾の王子様なのじゃ! 誰がな
んと言おうがこれは絶対なのじゃ!! 異論なんてモノは存在しない
のじゃ~~~~!!!」

ピクリッ!

「リゲルが誰の王子様だとー!!!!」

「おや、目が覚めましたか? 身体の具合はどうですか? どこか痛い
所はありませんか?」

「ああ、大丈夫だ。心配かけてゴメンなりゲル? (はんっ!! お前
なんかとは親密度が違っんだよ!! ドヤッ!!!)」

「グヌウ!! (こやつはっ!.....敵じゃ!!!!)」

そのころとある理想郷にて・・・

ピキーン!!

「敵が増えた気がスル!!!」

「いきなりどうしたんですか、アスニヤ様？」

「何故力わからないケドそう思ったノ。」

「????そうですか?・・・続けましようか、では次にニンジン
を切りましよう。これは・・・・・・」

遠くでテオとエヴァが言い争いが次第にヒートアップして、リゲルがその仲介をしている頃・・・

「じゃが・・・主と主の『紅き翼』アラルブラは無敵なのじゃろ？」

いつの間にか話は進んでいました。

「ならば我等われらが世界を救おう。我が騎士ナギよ、我が盾となり剣となれ。」

「・・・へ。やれやれ、相変わらずおつかねえ姫さんだぜ。・・・
いいぜ、俺の杖と翼。あんたに預けよう。」

その頃リゲルは

「今私はあの有名な光景を見ることができて感激してます。」

言い争いを二人を撫でることと治め、その様子を見て感激していました。

その後、ナギと痴話喧嘩についてのことで一悶着ありましたが、結果は想像にお任せします。

そして、『アラルブラ紅き翼』の反撃が開始しました。

私たちはあらゆる国にいる敵を倒し、徐々に味方を増やしていきま

した。
ですがそれは『コスモエンテレケイア完全なる世界』の中の末端に属する者達で本当の敵は創物主です。

そして戦い続けること約半年、ついに奴らの本拠地に追い詰めまし

た。

世界最古の都、王都オスティア空中王宮最奥部『墓守り人の宮殿』

我々は今まさに最後の戦いを始めようとしています。

まあ、既に敵の計画は失敗しているのですけどね？主にアスナちゃん的に・・・

あ、あとどうでも良いですけどゼクトの髪がテオによって切られました。
私も今度切ってもらいましょうかね？

第21話 よろしい、ならば杖と翼を預けよう(後書き)

はないの件……どう思いますか？

b y、最近執筆時間が短くなってきているのが嬉しい作者

第22話 よろしい、ならば……………爆破から始まる最終決戦(?)だ！

今回は作者の悪ふざけ分が大量に含まれております。

ご了承ください。

第22話 よろしい、ならば……………爆破から始まる最終決戦(?)だ!

リゲルSIDE

「不気味なくらい静かだな、奴ら。」

「なめてんだろ。悪の組織なんてそんなもんだ。」

「私が思うにコレは何かの計画のうちだと思えますよ?何かはわかりませんが……………」

「ナギ殿!帝国・連合アリアドネー混成部隊、準備完了しました。」

「おう、なら外を抑えてくれ。そうしりゃ俺達が本丸に突入できる。頼んだぜ。」

「ハッ。それで、あの……………ナギ殿とリゲル殿……………」

「ん?」

「はい、なんですか？」

「ササ、サインをお願いできないでしょうか？」

「おお？ああ、いいぜそれくらい。」

「別に良いですよ。お名前を伺っても良いですか？」

「セ、セラスです。お二人ともぞ、尊敬しました。」

手早くサインを終え、決戦前の最後の話し合いをします。

「連合の正規軍は間に合わん。帝国のエヴァと皇女も同じだろう。決戦を遅らせることはできないか？」

何故かあの後仲良くなった二人は、最近一緒に行動してます。今回も護衛としてテオにエヴァが付いて行っています。

例のごとく最初は喧嘩ばかりだったが、最大の敵はリゲル自身であることに気が付き、協力するようになっていた。テオには既にも

う一人いることは伝えてあるが、それが姫御子アスナだということは知らない。」

「無理ですね。私たちでやるしか無いでしょう。」

「既にタイムリミットだ。」

「ええ、彼らはもう始めています……。『世界を無に帰す儀式』を……。世界の鍵『黄昏の姫御子』たそがれのひめみこは今彼等の手にあるのです。」

「あの……。。」

「ああ、（待つてろよ……。姫子ちゃん！！）よおしつ野郎ども！行くぞ」だからちよーと待つてください！！！！」何だよりゲル！今から決戦って時に！！」

「非常に言いにくいんですけど……。この決戦……。既に私たちの勝ちですよ？」

「「「「「はあ???」「「「「「」

「だからですね・・・ナギの言う姫子ちゃん『黄昏の姫御子』ことアスナちゃんは既に私が保護しているのであちらのアスナちゃんは私の造ったダミーで、なおかつ高性能爆弾です。』」

「じよ、冗談ですよネ?リゲル。」

「アル、私の言うことが信じられませんか?・・・仕方ないですね、ならば証拠を見せましょう。『アスナちゃん、少し出てきてください。』(チリン)」

(フォン)

「リゲル、何か用?」

「おや、最近会っていませんでしたけどだいぶ発音が良くなりましたね。よく頑張りました。(ナデナデ)」

「他のことも頑張ってる。すぐにエヴァを追いついてみせる。」

「焦って身体を壊さないでくださいね？・・・これが証拠です。
何か問題ありますか？（ナデナデ）」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ではまずは『^{タミ}99%』を爆破しましょう。そうしたらまずは私が
広域殲滅技を使いますから離れていてくださいね？・・・んん
？皆さんどうかしたんですか？」

「・・・・・・・・・・て・・・・・・・・が「「「「「」

「なんですか、言いたい事があるならしっかり言ってくれないと分
かりませんよ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あ？・・・何でしょうか？あ、あ・・・ああ、アスナ
ちゃんですか？すごいんですよアスナちゃんは！！前なんて料理を
作ってくれたんです！！美味しかったですね・・・あのオムライス・
・・・」

「・・・・・・・・あるに決まってるーが（でしょーが）（るのじ

や)!!!!!!!!!!!!!!」

「いきなり怒鳴らないでください。アスナちゃんがビックリするでしょう・・・さてアスナちゃん、本当はもう少し話していたのですが、ここにいると危ないので家に帰りましょう。今日は行きますから何か料理を作ってくれると嬉しいんですけど・・・駄目ですか?(コテン)」

「大丈夫、頑張って作るから楽しみにしてて。(///)またね。」

「はい、またねです。」

(フォン)

「・・・では、聞きましょうか・・・」

「「「「「あたりまえだ(じゃ)!!!!!!」」」」」

「「「「「はあはあはあ・・・」」」」」

「もういいですね？それじゃあ始めましょうか？」

その時『紅き翼^{アラルブラ}』の5人（ナギ、アル、ゼクト、ラカン、ガトウ）はこう思った……………

コレだけ文句を言われ続けてるのにまったく堪えてないコイツはこ
の中で一番のバグだ

と……………

その後決戦は予定より30分ほど遅れて始まりました。結果は既
に見えています……………

さて、気を取り直して決戦を始めましょう。

「んならリゲル。任したぜ。」

「分かりました。少し此方から力を送って爆弾の強化をしてから爆破しますから離れてください。」

「どの位離ればいいのじゃ？」

「そうですね．．．．．ここから後方へ1kmほど離れないと巻き込まれますね。」

「爆風ぐらいならどうにかなっから突っ込めばいいじゃねえか？」

「？巻き込まれるのは爆風じゃなくて爆発ですよ？爆風が無い爆弾ですからね、純粹に巻き込まれて大ダメージをくらってしまいますよ？」

「．．．．．フウ。私はもう諦めました。」

「おいこら！アル！お前だけ逃げんじゃねえ！！」

「?????よくわかりませんけどあと1分で発動しますよ？早く離れてください。」

*****1分後*****

ゴウ！ギャガガガガガガガガガガ――

宮殿を中心に黒い球体が広がり、外にいた自動人形、召喚魔、召喚師は全滅、内部にいた『完全なる世界』幹部も大ダメージを受けたようです。数人死んでいるようですね。

そして、偽アスナちゃんがいなくなったことで儀式は失敗したはず

です。

これは……もしかしたなくても詰んでますよね。

あれえ？こんなつもりじゃ無かったんですけど……

戦闘せずに制圧しちゃいましたか？

『ははははははは！私を倒すか人間、それもよからうッ！！！！』

．．．．．遠くにラスボスが見えるのは気のせいですね？

気のせいなはずですよ！！！！！！

第22話 よろしい、ならば……………爆破から始まる最終決戦(?)だ!

はい、作者はヤツテシマイマシタヨーー!!!

まさかの最終決戦で戦闘描写が無いという衝撃の結果!!!

だって……………こっちのほうがスッキリしませんか?こつ気分的に?

第23話 よろしい、ならば終戦だ（前書き）

イヴの出し方をまだ迷っている今日この頃……
エヴァのアーティファクトで……もしくは猫の魂で……
ハッ！イヴ猫耳フラグが立った気がする！！

妄想が止まらないwww

そしてエヴァのアーティファクトが決まらない（涙）

第23話 よろしい、ならば終戦だ

前回・・・

『ははははははは！私を倒すか人間、それもよからうッ！！！』

先制攻撃のつもりが一撃で相手を敗北させてしまい、目の前（といっても大分離れてますから私ぐらいしか見えていませんが）にボロボロのラスボスが現れました。

安心してくれ。第二形態、第三形態は無い！・・・はず

リゲルSIDE

「少し様子を見てくるので、合図をするまで待機しててください。」

「

「それじゃあ、俺も一緒」待機しててください。」・・・一緒

にい「待機しててください。」・・・わあつたよ！だけど10分で帰って来いよ！それ以上は待たねえからな！！」

「ごめんなさいね、コレだけは譲れないんです。」

「わあつたから、さっさと行って帰って来い！」

「じゃあ、行つてきますね？」

「なんかあつたらすぐに行くかな！！」

ナギには悪いですけど、ここは私一人でケリをつけさせてもらいます。この中でナギを除けば彼女と対等に戦えるのは私しかいませんからね。

数秒後にはラスボスの前についていました。無論他の人はこんなことできませんよ？

「お待たせしました、では、最後の戦いを始めましょう。」

ゴウ!!

私は気と魔力を解放し、全力で『咸卦法』を発動します。ですが今回は神力も混ぜることで効果を増幅しています。

『ほう?・・・(ウオガツ・・・ドドドドドドドドドドッ!・・・)』

創物主は強力な攻撃を放ってきます。満身創痍なはずなのにここまですると思いませんでした。

「軽すぎますね。」

究極技法を完全に使いこなし、更に神力で効果を増幅している私の敵ではありません。
素の状態でも傷ひとつ付かない自信がありますけどね。

ピーーン(某作品の傷ひとつ付かない人が乗り移る!!!)

ん？「ならばなんでそんなことをしたのか？」だと？・・・その答えは簡単だ！

『何故なら、その方がカッコイイから！！！（キラーン！！）』

・・・ハッ！どこかのブラボーな戦士長の魂が乗り移っていたようです。

話がだいぶ逸れましたね。一応戦闘中なんですけどね？

さて、タイムリミット時間制限は残り5分。

今頃私の魔力に反応したナギ達が此方に向かってきているでしょうから、彼らが到着するまで・・・それまでに決着をつけます。

ゴツガガガガア！！

『はははははは……そうか、お前も私と同じ存在か！だが、ゆめゆめ忘れるな！全てを満たす解はない、いずれ彼等にも絶望の帳が下りる。貴様も例外ではない！！』

ボツ……ドゴゴゴゴオーーーー！！！！

「私はあなたと同じではありません！！それに今は全てを満たす解がなくてもこれから創れば良いだけです！絶望なんてものは私がこの手でぶん殴ってやります！！」

『くつくく……だが貴様もいずれ私の語る「永遠」こそが「全ての「魂」を救い得る唯一の次善解だと知るだろう。」

キュンツズガーーン！！

「私がいなければそうになっていたかも知れませんが……でも今ここに私は存在しています！！この世界が幻想であろうとも、いつか崩壊するものであるうとも、今は無理でもいつか救って見せます！！未来を諦めている者に民を幸福に導く権利などありません！！出直してきなさい！！！！」
神具 最高神の魔槍^{ゲンゲニール}！！！！

ボツ……ズガガガガガーーン！！！！

『フツハハハハハハ・・・そこまで知ってまだそんな戯言を・・・だが既に・・・私はいつか・・・・・・・・・・』

そう言って創物主は消えていきました・・・

完全に消えたわけでは無さそうですが、一先ずコレでオスティアの崩落をとm「ズツ・・・・・・・・」

「何故・・・・・・・・止まってないのですかっ!!」

何故かはわかりませんが既に広域魔力衰退現象が発生しています！それも世界呑み込むほどの規模です！既に『99%（ダミー）』を破壊したので儀式は失敗したと思っていたのですが、甘かったようです!!

ゴオンゴオンゴオン

連合、帝国、オスティアの艦隊が遠くに見えます。既に大規模反転封印術式を展開しているようです。
ですがコレでは出力が足りません!!

「（ギリッ！！）魔力、気、神力開放。収束、術式作成……完成。」

ならば足りない部分は私が補うまでです！！

「なんなんだこれは……」

「オイオイ何だよこの光球は！？ドンドンでかくなってるぞ！！」

「世界の始まりと終わりの魔法……！この力場が全地上を覆った時世界は無に帰します。……いくら我々が最強を誇るうと、ナギが自らを無敵と嘯うはなこうと、こうなってしまうては我々にできることは何も……っ！」

「おいリゲル！！どうなってんだよ！！」

ナギ達が到着しました。ですが今は……

「少し黙っていてください！！アリカ様が大規模反転封印術式の展開を命じました。今からその足りない部分を私が補います！でなければ世界が崩壊することになりますよ！」

「な・待つてください！リゲルはそんなことまでできるのですか！？」

「いいから黙っててください！失敗するわけにはいかないんです！！・・・」
「我は祈りをささげる、其は隠された太陽。我が祈りに応え冥界の門を開き、顕現せよ！！」
秘アメンされし太陽神

ミシミシミシッ！！バリッ！！！！

『墓守り人の宮殿』の後方の空間にヒビが入り、そこからナニカ（・・・）によって抉じ開けられます。

[illegible]

その見えないナニカは反転封印術式を包み込み、一瞬の後に空間のヒビごと霧のように消えていきました。

そうしてそこに残っていたのは見えないナニカに補強された大規模反転封印術式でした。

これにより広域魔力減衰現象を押さえ込むコトに成功し魔法世界の消滅は回避されました。

こうして決戦は終局を向かえ、世界は救われたのです。

オスティアの崩落という代償によって・・・

第23話 よろしい、ならば終戦だ（後書き）

そう簡単に作者はオスティアの民を殺したりしませんよ？

作者は原作を完璧に崩壊させない程度にハッピーエンドを目指します！！

少しストックできたけど・・・見たい？

あと、アリカ様がヒロイン化できるんだけど・・・したい？

第24話 よろしい、今度こそ決戦だ（前書き）

先に皆さんに言うておかなければ成らないことがあります。

先に謝っておきます。

本つつつつ当に申し訳ありません!!!!!!!!!!!!!!

意味がわからないと思いますが、読んでいただければわかると思います。

本当に申し訳ありませんでした。

第24話 よろしい、今度こそ決戦だ

『・・・きて・・・お・・・』

誰かが呼んでいる気がします。

『起き・・・きないと・・・ス・・・ぞ・・・』

『エ・・・それ・・・！！わた・・・キス・・・』

『黙・・・！私・・・先に・・・スするんだ！！・・・』

『抜・・・駆けは許・・・い！！・・・』

枕元が騒がしいようで、徐々に意識がはつきりしてきます。それと同時に今言い争っているのが誰であるのかも分かりました。

「……おはようございます、エヴァ、アスナちゃん。起こしてくれるのはいいですけど喧嘩しながらは止めて欲しいです。」

「ムッ、悪かったな。／＼／＼（お前のせいで失敗したではないか！）」

「ごめんなさい。／＼／＼（エヴァが抜け駆けしようとしてせい）」

「今度から気をつけてもらえればそれでいいですよ。それに起こしてくれてありがとうございます。今日は大事な日ですから遅れるわけには行かないんです。」

「そうだな、では私はテオの元へ行かないといかんから先に行く。そっちは任せるぞ？（しょうがない。今度からは平等に行こう。）」

「いつてらっしゃい。（わかった。でも一番は譲らない。）」

「ええ、『完全なるセカイ（コスモエンテレケイア）』の好きにはさせませんよ?」

「じゃあ、行って来る。（フンッ小娘ごときに負けはせんよ?）」

そう言ってエヴァは転移札でテオの元に転移していきました。

「リゲルも頑張っただね。」

「勿論です、アスナちゃん。これが終わったら三人で美味しいものでも食べましょう。今日のご飯は腕によりをかけて作りますね。」

「楽しみにしてる。行ってらっしゃい。」

「はい、行ってきます。」

そう言って私は『全て猫だらけの理想郷^{ニヤバロン}』を出ます。さて、コレが本番です。

そうして私は最終決戦地である世界最古の都、王都オステイア空中王宮最奥部『墓守り人の宮殿』に向かったのです。

「……え？「もう既に終わったじゃないか？」ですか？

いえ、そんなこと無いです。多分それは私の見ていた夢のことでしょう。今は最終決戦の朝ですよ？

け、決して作者が『このままだとやべえええ！！！』なんて焦ってこんなことした訳ではないですよ？（詳しくは活動報告「コレを見ている方へ」を御覧ください）

時系列的には「第21話よろしい、ならば杖と翼を預けよう」の後です。

「さて、行きますか……」

そして我々『紅き翼』^{アラルブラ}の大戦最後の戦いが始まったのです。

そして……

「ああ、（待つてろよ・・・姫子ちゃん！！）よおしつ野郎ども！行くぞ」だからちよーと待つてください！！！！」何だよりゲル！今から決戦つて時に！！」

第22話のごとく爆破したところまではだいたい同じです。（違うのはアスナが今日料理を作らないという点）

宮殿を中心に黒い球体が広がり、中にいた『完全なるセカイ（コズモエンテレケイア）』の幹部たち、外にいた自動人形、召喚魔、召喚師を呑み込もうとしました。
しかし、その球体を覆うように何者かが強力な魔方陣を展開し、それを抑えきったのです。

「夢のようにはいきませんか・・・流石は創物主ですね。」

本当は夢のようになってくれればと思っていましたけど、そう甘くはなかったようですね？
ですが偽アスナちゃんがいなくなったことで儀式は失敗したはずですよ。

「ナギ！偽アスナちゃんはいなくなったので（夢のようになければ）儀式は失敗したはずですよ！外の敵は私がどうにかしますから

突入してください!!」

「ああ、んじゃ野郎ども!!行くぜっ!!!!」

「「「「ウオオオオオオオ - - -!!!!」」」」

そういつてナギ達は『墓守り人の宮殿』へ突っ込んでいきました。
そして私は外にいる敵を倒し始めました・・・

予想以上にうじゃうじゃと幾らでも増えていくので手間取りました
がようやくナギ達に追いつくことができました。

「!!!いかんッ クラティスデー・アイギス『最強防護』!!!」

ドッ!!

クッ!少し遅かったようです。

「ぐっ・・・バカな・・・」

「まさか・・・アレは・・・」

フッ

「待てコラてめえ！！！！」

「任せなジャック。」

「い・・・いけません！ナギ！その身体では。」

「私は皆さんに忘れられているのでしょうか？・・・頑張って追いついてきたのに悲しいです。『治療』」

もう魔力や気が残っている人は少ないですから私が『治療』を使います。

「『治療』を使ったといえどうにか戦えそうなのはナギとゼクトだけですね。流石に今はラカンなくなった腕の再生もできませんし、詠春とアルはもともと負った傷が深すぎますから戦闘では足手まといになりかねません。」

「リゲルは『治療』が得意ですがそんな無茶な治療ではッ！」

「ナギは言っても聞かないですし、ゼクトもここぞと言う時は頑固ですからね。」

「そのとおりじゃな。」

「流石リゲル、わかってんじゃねえか！それに俺は無敵の千の呪文スターの男だぜ？俺は勝つ！！任せとけ！！」

「では行ってきます。」

「たとえ！明日世界が滅ぶと知ろつとも！！あきらめねえのが人間つてモンだろうがッ」

「くつくく・・・貴様もいずれ私の語る「永遠」こそが「全ての魂」を救い得る唯一の次善解だと知るだろう。」

「人間をなめんじゃねえええーッ！！」

ドンッ！！！！

とまあこんな風にナギが創物主を倒してしまいました・・・

私は少し別のこともしながらでしたから、そこまで役には経ってませんよ？

こうして大戦は終わりを迎えました。

・・・しかし残念ながらオスティア崩落は避けられず、夢の通りになってしまいました。

第24話 よろしい、今度こそ決戦だ（後書き）

・・・・・・・・コレしかなかったんです。

活動報告を読めばどうしてこうなったのかわかると思います。
本当に申し訳ない。

第25話 よろしい、ならば奇跡を起こそう（前書き）

ちょっと無理やりな感じがありますね？

多少、書ききれてない部分がありますけど問題ないようにしたつもりです。

では、どうぞ！！

P S 、もう少ししたら更新を一時停止せざるおえないかもしれません。

理由は原作の進行具合です。進んでくれないと対処できません！！
一部原作と離れていますから、修正していきたいのですが真実が明かされないと無理なんです。

第25話 よろしい、ならば奇跡を起こそう

ゴオオオオオオオ!!

『・・・人間は度し難い。英雄よ、貴様も我が2600年の絶望を知れ。さらばだ・・・』

フオツ・・・

「ぬっ・・・グ・・・お、お師匠・・・師匠・・・ッ師匠才おおお
おおー！ーッ!!」

「・・・ふう、コレでいいで
すね・・・では次ですね。」

「陛下！……これは罨ではないのですか！？おそろくMM元老院……」

「よいクルト……全艦艇、光球を取り囲み押さえ込め！！魔道兵団、大規模反転封印術式展開！！全魔法世界の荒廃はこの一線にあり！！各員全力を尽くせ！後はないぞ！！」

「よろしいですね……？女王陛下。」

「（ギシギシッ）よろしいハズが……ないっ！（ブツンッ）」

（フォンッ！！）

転移術式発動直後、何者かが此処に転移してきた。

「その通りです、いい筈がありません。ですから手伝わさせていただきますよ？女王陛下。」

「……何故お主が此処にいる？——？」

「うおー!!」

少年は歓声で皆に迎えられ、そして仲間の下へ向かっていった。

「ナギさぁーん!!」

「リーダーの登場だあ!!」

「来たかナギ!」

「てめえ傷はもういいのかよ!? (ドスドスドスッ)」

「とつくにリゲルに治してもらったつーの! お前こそさっきまで両腕なかったくせに偉そうなこと言いやがってッ!! (ガガガッ)」

「傷をド突き合うな貴様らぁーッ!!」

「詠春てめーが一番の怪我ひでえのによく式典とか出るぜ? ワハハ
――!!」

「だから傷をド突くな！！開いたら死ぬぞ！！」

「つかアル！てめえは何で受勲式出ねえんだよっ！？」

「私、上がり症なもので・・・」

「嘘つけーーーーっ！！」

「ですがナギ。私以外にも2人ほど出ていない人がいたでしょう？
むしろそちらの方が問題ではないですか？今回の決戦も彼がいなければ勝てたかどうかわかりませんよ？」

「そーだけでよぉー！今あいつらいねえーじゃん！」

「まさかあのゼクト殿が逝ってしまわれるとは・・・」

「いやお師匠は・・・」

「ナギ（言つては駄目です。）」

「アルさん、僕は諸悪の根源を倒した翌日に停戦合意、即記念式典

なんてずいぶん手際が良過ぎる気がするんですけど?」

「タカミチ君、それは本格的な講和はまだ先でしょうけど、まずは全世界へのアピールがしたいからではないのでしょうか?」

「……でもアルさん、式典をこんな王都から遠い離宮でやるなんて……何かおかしいと思いませんか?」

「……」

「おう、どうした英雄さんよ。暗えな!もしかして女か?」

「ちげーよバーカ!」

「……あの冷血王女があんなコト……よっぽどだぜ……」

「ちょっと約束してたの思い出したただだよ。」

少し飛んでいる部分はネギま！29巻参照

「・・・・・・・・・・彼に話を聞く必要があるかもしれませんね。」

「ここからが、本番です・・・・・・・・エヴァ、アスナ、行きますよ。」

「フン！！ご褒美は期待しておくからな！」

「私には要らない。リゲルが手伝って欲しいならいくらでも助ける。」

「なっ！ずるいぞアスナ！！」

「欲張ったエヴァが悪い。」

「……崩落が始まればその限りでは……全市民の救出は困難を極めるかと!!」

「……ツかった。」

「妾も直接指揮にあたる!!」

「ちょっと待ってください。その必要はありません。」

「リ、リゲル!!今まで何をしていたんだ!?崩落まで時間がないんだぞ!!」

「……必要がないとはどういうことじゃ?」

「63%……残りは我々が引き受けます。」

「なっそんなことは無理に決まっています!!この13時間でやっと37%なんですよ!!」

「少し冷静になれ、クルト。……言っからにはできるのか?」

「はい、既に準備はできています。今すぐにも可能です。」

「……わかった。直ぐに実行してくれ。」

ズズズンッ！！！！

「もう始まりましたか。では始めます……魔神具発動『猫は全てを停止させる・改』！！（チリン）」

『金色の鈴』が鳴り、セカイは色を失い、全てが停止します。

ただ前と違うのは、動いている存在が1人ではないということです。

『猫は全てを停止させる』の『このセカイでは自分以外の時は止まる』という概念を『このセカイで自分を含めた複数人以外の時間は止まる』という概念に書き換えたものが『猫は全てを停止させる・改』です。ただし今回のものは触れたものの時間は止まったままですし、前回同様長時間の発動はできません。そして動ける人の人数によって発動時間が左右されます。

今回は私が制御に徹しても、10分ほどが限界です。

ですがこれだけあれば充分です。

「後は任せましたよ、みんな？報酬は一人につきマタビ酒5本です。」

「「「「「「「「「「にやああー！！！！！！！！」」」」」」」」」」」

私には頼れる仲間達がいますからね？

ですがナギ達には今回の件には関わってもらえません。だって主役の一人がいない今、その代わりがいるでしょうからね？

「じゃあ始めてください！！誰一人として見逃さないでください！！」

こうしてかつて千塔の都と称えられた空中王都オスティアは地図から消滅した。

だがその崩落による犠牲者は一人もおらず、崩落したはずの場所にいた人々からは

「いつの間にか違う場所にいた!!」

という証言が寄せられ、『神の奇跡』と呼ばれることになった。
だが、その証言の中には

「猫に助けられた!!」

という証言や、猫アレルギーの人たちが苦しむということもあり

「これは猫が関係しているのでは？」

とも言われたが、真相は一部の人以上には知られていない。

この奇跡は今回の大戦の英雄達の一人とその仲間達が起こした奇跡だということを……

第25話 よろしい、ならば奇跡を起こそう（後書き）

そろそろアリカ様が捕縛されます。

だがしかし！！！！またリゲルがあの手を使ってやっちやいますよ！！！！

そしてMM元老院の一斉駆除が始まります！！！！

乞うご期待！！！！

第26話 よろしい、ならば処刑だ(1)(前書き)

処刑されるのはアリカ様に在らず!!

エヴァの件でも借りがあるあいつらですよ!!

第26話 よろしい、ならば処刑だ(1)

「今回の崩落では犠牲者は出なかったようです。普通ならありえませんが……」

「確実にアイツが絡んでんだろ？ だけどよお、マジで大変なのはこれからだろうしな……」

「……姫さん」

リゲルSIDE

オスティア崩落から2ヶ月と少しが経ちました。

今の王国は災害復興支援の名目で派兵されたMM軍によって実効支配されています。そしてオスティアの民は金も、家も、仕事も失い数百万人のものが難民となり周辺各国に流出しました。

そしてアリカ女王はその現状を解決しようと奔走し各国に難民受け入れを承諾させ、難民が生き続けられるように『奴隷公認法』を可決させ、今は彼らをいち早く解放できるように尽力していました。

そしてMM元老院に直談判し支援を要請した際に元老院の屑達によって冤罪を着せられ逮捕拘束され、ケルベラス無限監獄に収容され今に至るわけです……

「お久しぶりです、アリカ姫。」

「……何故お主が此処におるのは知らんが……妾が多くの憎しみを引き受けて処刑されることで世にある不幸を少しでも減らせるなら本望じゃ。このまま……捨ておいてくれ……リゲル殿。」

「嫌です。」

「いいか」「嫌です。アスナちゃんもそう言ってますし。」何を言っておる、アスナは今『墓守り人の宮殿』に封印されているはず「そんなところにアスナちゃんはいませんか？私が何年前から保護してますし。」じゃがアスナは『完全なるセカイ（コスモエンテレケイア）』に浚われるまでは「それは偽者ですよ？とはいつでも本物同然の人形なので分かるはずありませんけどね。」……全てリゲル殿の手の平の上で転がされておったという訳か。

「

「ですから最後まで付き合ってくださいね？（ボフンツ！）これがアリカ様の身代わり人形です。この人形が処刑される二年後までにMM元老院の不正の証拠を集めますから、それまではアスナちゃん

と一緒の場所にいてもらいますけど・・・いいですか？」

「だが妾が皆の不満と憎しみを受けねば！！誰かが犠牲にならねばいけないのじゃ！！その義務が妾には「甘ったれるな小娘！！！」（ビクウ！！）」

少々言葉が荒くなってしまいました。ですがそれほどにまでアリカ様の言っていることが気に食わなかったのです。

「何を勘違いしているのか分かりませんが、あなたにはこれからしなければいけないことが山ほどあります。そしてあなたが義務と言ったことを受けなければならないのはM M元老院の一部の議員共です。あなたがやるべき義務は少しでも多くのこの戦争による被害者を救済することでしょう？だから死んで詫びて逃げようだなんてことは許しません。それに私の手の平で起きたことなんですから全てどうにかして見せますよ。あなたにはちゃんと幸せになつてもらいます。私たちは仲間ですからね？」

「ナギに出会つておらなかったら・・・今でお主に惚れてしまいそうじゃない？」

「それは光栄ですね。さて、行きましようか？」

そして、その部屋には人形のみが残された。危険物や記録装置、通信装置などがつけられた人形が……

2年後……

ケルベラス無限監獄にて

「刑の執行は10日後と決まりました。———その前に今一度お尋ねしましょう。『黄昏の姫御子』と共に封印された墓所の最奥部。そこに到る方法をあなたは知っているはずだ。」

「……………」

「言うのです！！これは世界を滅びから救うためでもあり、最愛のアスナ姫をお救いする為でもあるのですぞ！？」

「……………」

「フン……使えぬ女だ……いや、失礼。これは言い過ぎました。貴女は10日後の死によって十分に世の役に立つことになるのでしたな。そう———世界平和の礎として。」

カツンツカツンツカツ・・・・・・・・

そうして今まで唯一元老院の中でコレと言った証拠がなかった議員は去っていった。

「（ニヤリ）リゲル、最後の証拠みつけたぞ。」

偽者からいつもとは違う声が発せられる。その目は爛々と紅く輝き、
獰猛な捕食者の瞳をしていた。そしてその首には昨日までは見られ
なかった擬態の能力を持つネックレスがかかっていた。

そう、彼は最後の最後で致命的なミスを犯してしまったのだった・・・

シチリス亜大陸 紛争地域

「う・・・」

「もう大丈夫だ。すぐに治療してやる。」

「ア……アリガトウ……立派な魔法使い……ナギ……」
マギステル・マギ

「ん……あんまりそう呼ばれんのは好きじゃねえんだがな……」

「ナギ！詠春さん！」

そうして彼等にもアリカ様の件について知らされるのだった。

だがそれが既に解決していること彼らは知らない……

そして、紛争地帯での被害が何者かによって最小限に抑えられていることも彼らは知らない……

「今日もまた一人の命を救えたぜ……姫さん……」

何も知らない彼らだが、彼らは紛れもなく英雄である。なぜなら今日もたくさんの命を救うことができたのだから……

アリカ・アナルキア・エンテオフュシア（本当はMMの豚共の）処
刑執行日当日

「魔獣うごめくケルベラス溪谷。魔法の一切使えぬその
谷底は魔法使いにとってまさに「死の谷」」

「古き残虐な処刑法ですが・・・この残虐さをもって
ようやく魔法世界全土の民の溜飲を下げることとなりましょう。」

「歩け!!」

「触れるな下郎^{げろっ}。言われずとも歩く。」

そういつて紅い瞳をしたアリカ女王は歩いていく。そしてそれを内
心でニヤニヤと見つめている豚共がいる。
すぐに自分が同じ目にあうとも知らずに・・・
此処にいない豚共も時計を見ながらニヤニヤしているだろう。何故
か一瞬でその場所にいて、自分が同じ目に合わされるとも知らずに・
・・・

「（・・・・・・・・アリカ様・・・ッ）」

そして自分の無力さかみ締めている少年は、気づかない

その背後に完璧に気配を消して、獰猛な笑みを浮かべている男に・
・
・

「（クルト君……早く離れていてください。危ないですよ？）」

小声で話しかけられ一瞬身体を強張らせるが、それ聞きなれた声であることに気づき安心する。

彼ならば彼女を助けてくれるだろうと……

「さあ、借りを返させてもらいますよ？エヴァのこと、戦争のこと、アリカ様のことも、アスナちゃんのこととも全て利子つきでね・
・
・」

そう言っ大戦の英雄は戦の後片付けを始めたのだった。

第26話 よろしい、ならば処刑だ(1)(後書き)

次回

ヒャーハーーーー!!汚物は消毒だーーーー!!

乞うご期待!!(こんなタイトルではありません)

閑話 よろしい、ならば誕生だ（前書き）

無理やりな感じですが例のあの子を登場させました。

今後は本編にも参加させる予定です。

閑話 よろしい、ならば誕生だ

この閑話の時系列は、終戦の数日後頃です。

ピッ・・・ピッ・・・ピッ・・・

ウォンウォンウォンウォン

シュコー・・・シュコー・・・シュコー

ここは『ニャパロン 全て猫だらけの理想郷』の住居地区・・・最末端のプロジェクトを丸ごと一区使用して作られた施設の中。
現代では考えられないような高性能の機材があちこちに設置されており、数名の白衣を着た猫人たちが忙しなく動き回っている。

オーバーテクノロジーが溢れているそこに、私はいた。

皆さんは覚えているでしょうか？

随分前の話になりますが、私が『超電磁砲^{レールガン}』を撃つたことを・・・

しかし、普通の人が『超電磁砲^{レールガン}』なんてものを撃つことは魔法を使わない限りは不可能です。ですが私はあの時魔法を使用せずに『超電磁砲^{レールガン}』を撃つていたのです。

そしてあの時使用した魔神具『ハーデイス』の能力は無限の銃弾と他の追従を許さないほどの速射性能だけです。未知の金属オリハルコンを使用して作られていますから他にも能力はありますが、『ハーデイス』でただ銃弾を撃つただけでは絶対に『超電磁砲^{レールガン}』なんてものは撃てません。

なら、どうやって『超電磁砲^{レールガン}』を撃つたのか

それはこの研究施設で行われている「魔法を併用することによる劇的な科学の進歩」の成果なのです。

通常ならば製作するのに10年かかるものでも魔法と私を含む猫人達の優秀な頭脳が合わされば一週間で完成させることなんて造作も

無いことです。

魔力で補えないものは神力を使つてますから不可能はほとんどありません。

だってオリハルコン作れちゃったんですよ？作ることのできないものの方が少ないと思います。

そして、私が使った物の中には『超電磁砲^{レールガン}』を撃つために使用したナノマシンもあります。

コレを製作するのに半年もかかり、私の最高傑作といっても差し支えないものです。

ナノマシンとは極小の機械のことです。これを体内に投与して馴染ませると体内で自動的に増殖していきます。生き物みたいな機械です
すね？

そしてこれは予めプログラムした動作を行ったり、宿主のイメージに合わせて宿主の肉体を変化させることができます。コレを使えば魔法に頼らなくても簡単確実に治療ができます。

とはいっても使用するエネルギーは宿主の魔力、気、生体エネルギーを使用するのでその分疲労が溜まったり、魔力切れ、気切れを起こす可能性が大きいですし、並みの人間では身体組織の崩壊を招き

かねませんから改良が必要です。

そしてコレを使用して体内の微弱な電気を増幅し、『ハーデイス』に充填させることで私は『超電磁砲』レールガンを撃つことができたのです。そのころはまだ試作品段階で色々と不便でしたが、今体内に入っているものは私専用にカスタマイズした完成系です。

具体的には『超高エネルギー』を必要とする代わりに大抵のことはできちゃうよ？雷速なんて魔法使わなくても超えられるし、亜光速もいけちゃうよ？』って感じです。

身体をあらゆる形状、物質に変えることができますし、元からこの身体はスペックが高いので幾ら使っても副作用等は出ません。

……『ハーデイス』使わなくても、某ビリビリ娘のごとく『超電磁砲』レールガンを撃てたときには感動しましたね。無論、弾にはコインを使用しました。

形式美って大切ですよね？

ですがナノマシンがなくても十分に戦えますし困ることもほとんどありません。魔法や神力で同じことができますからあれば便利という程度です。

なら、何故こんなものを作ったのか？

それは最近私を悩ませている問題を解決しようとしたからです。

その問題とは……猫人が女性しかいないことです!!!

一見「そんなものは問題じゃないだろう」と思いかも知れませんがこれは大問題なのです。

私の魂創造ではなぜか女性しか産み出せなくて、『^{ニャバ}全て猫だらけの理想郷』のなかにいる男性は私一人です。

そこで問題が起こります。ヒントは

1 女性多数

2 男性一人

3 猫

4 本能

5 無駄に廃スペックな上、変なところですよーい団結力を発揮する

6 襲ってきた皆に「外の世界にもいい男はいますよ？」といつて

も「目の前の男のほうが好み」と言われたと同時に襲われたあの瞬間の恐怖

の6つです。ここから導き出される答えは……わかりますよね？

最近、寝ていると貞操の危機を感じるんです。いつの間にか囲まれていたなんて事は日常茶飯事ですし、奴らは結界を張っても私に気づかれること無く突破してきます。

最後はいつも絶好のタイミングでアスナちゃんかエヴァが助けられますから逃げ切れることができていました。あの頃はナノマシンをまだ体内にいれていなかったので、魔法や神力を使う前に一気に攻め込んでくる奴らには対処仕切れなかったんです。

そんな時ふとエヴァとアスナちゃんがいつもタイミング良く助けてくれるのが気になって何故かと聞いてみたら

「リゲルの（貞操の）危機は何処にいてもわかる（わかるぞ）。」

「

だそうです。全く理屈はわかりませんでしたけど、そこはもうどうでもいいです。毎回助けてくれて本当に感謝してます。お礼に今度ケーキを作りたいと思います。

昔はみんな小さくてそんなことも無かったのですが、女性は早熟ですし最高齢の猫人はほとんど大人と変わらないぐらいに成長してますから、このままでは本当に喰われます。

・・・あの事件以来トラウマなんです・・・突然女性に襲われると身体が硬直して動けなくなる時があるのです。

それに男の猫人の友達も欲しいのです。女数百人の中に男一人というのは疲れます。そして何より男の猫人がいれば私も襲われることがなくなる筈です！！

男の猫人がいても襲われ続ける可能性があることにリゲルは気づいていません

だから今回はナノマシンなどを使用して男性体を産み出したいと思っています。具体的には魂が身体を作り出すときに男性のイメージを込めたナノマシンによって性別を男に変えるつもりです。

使用するものは

1 ナノマシン

- 2 魔力、気、神力の結晶
- 3 魂（猫人）

の3つです。魔力、気、神力の結晶を入れたのは強い男性体になつてもらうためです。理由はわかりますよね？

「ではいきます・・・フツ！！！！！」

それら全てを徐々に融合させていきます。それと同時に私のこと、一般常識、あらゆる分野の学力、戦闘経験、ナノマシンの使い方等の情報を込めていきます。こうすることにより肉体的にも精神的にも成長を促進することができます。

これで、やつらの包囲網からも抜け出せる廃スペックのさらに上を行く兆廃スペック（誤字にあらず）な存在が生まれるはずです！！

（パアアアア！！！！）

いつもより神々しい感じの光があたりを埋め尽くします。神力を込め過ぎたかもしれません但至少スペックが上昇してくれても構いませんし、奴らから逃げるためにスペックが上がるのは喜ばしいことです。

光の奔流が収まり、待ちに待った猫人初の男友達（予定）が今目の前に！！！！

「・・・どこどこ？」

目の前にいたのは中学校に入るかは入らないかぐらいの年齢の、見惚れるような金髪に黒猫耳がすごく似合っている美少女でした。

ええ、少年ではなく少女でした。

一瞬で夢が砕けちり、膝から崩れ落ちそうになりますがまずは彼女に服を着せます。勿論見てませんよ？これは当然のことです。

「大丈夫？どこか痛い？」

渡した服を着終わった彼女が優しい言葉をかけてくれます。こんなに優しい子が生まれてきてくれてすごく嬉しいです。嬉しいのですが・・・男じゃないんですよ。

ここまでして男性体が生まれないのなら、もう無理です。ナノマシンも効きませんでした。これは呪いですね？それに違いありません。もしくはあの駄神が何かしたのでしょう。

「・・・ハア」

「？」

何時までも落ち込んでいても仕方ないですし、「あなた」とか「キミ」とか呼ぶのはいけませんからまずは彼女に名前を付けたいのですが

元々男性が生まれるつもりだったので……どうしましょう？

考え中………

生まれてきた男性には、男猫人の一人目ということで『アダム』と名づけようと考えていたのですが……なら、『アダム』ではなく『イヴ』なんてどうでしょうか？

我ながらなかなか良いと思いますし、彼女のイメージと名前も合っていると思います。

「あなたの名前は『イヴ』なんてどうでしょう？」

「……うん、気に入った。ありがとう。」

こうして『ニャバロン猫だらけの理想郷』に新しい仲間が加わったのでした。

彼女はとても純粹で、私の疲れた（猫達の襲撃で）心を癒してくれました。彼女を見ていると本当に癒されます。マイナスイオンでも出ているのでしょうか？

数日後の深夜、秘密の会合にて・・・

「最近の御主人は私たちに対して冷たいと思わニヤいか？」

「確かにそうだにゃ！一緒に寝ようと思っても、最近はいつも逃げられるニャー！」

襲うからです。

「そうだニャー！！最近ウチらに対する愛が足りんにゃー！！」

自業自得です。

「最近新しく入ってきたイヴって子ばかりかまってるニャー！」

普通に考えれば当たり前のことです。

「愛情がほしいニャー!!」

「そうだニャー!!ニャらばやることはたった一つ………戦争ニャー!!」

「「「「ニャーニャーニャー!!!!」「「「「

こんなときばかり無駄に団結力のいい猫達は、すぐさま準備にとりかかった。

そんなことをしても逆効果であることに気づきなさい。

翌日、『^{ニャバロン}全て猫だらけの理想郷』の猫達（参加率は100%）はリゲルに一斉襲撃を行った。

だがそんなものに捕まる訳がないリゲルは逃げ続けるが、一向に終わる気配のない襲撃に嫌気が差してついつい

「私を捕まえた最初の一人の命令を無理なことではなければ一回だけ聞いてあげます。」

といってしまう。だがそれは火にガソリンを入れるようなもので、襲撃は激化し、猫達は見方同士で潰し合いを始める始末であった。

そしてその隙に近づいていたイヴの

「リゲル、抱っこして？」

という一言で結果は決まった。その時は何の気なしにイヴを抱っこしたリゲルだったが

「捕まえた。私の命令一回聞いてね？／／／」

という一言を聞いて、自分の失敗に気が付き、彼女が兆廃スペックであったことを思い出した。イヴはリゲルの心理を読みきり、油断したところに普段からよくやっている抱っこをせがむことで何の違和感も感じることなくリゲルを捕まえることに成功したのだった。純粹だと思っていたが彼女も他の猫人と同じようにやる時はやるようだ。

無論、猫達からは反発があったが、次の日にはイヴによって完全に鎮圧されており（金色の綺麗な髪が血に染まったらしい）、リゲルは隠れてこの件をつやむやにしようと試みるも即座に捕縛され、その後イヴが

『リゲルはずっと私と一緒にいて／＼／』

という命令（告白？）をしてリゲルを困らせ、それを聞いたエヴァとアスナとの喧嘩が始まり、それを止める為にリゲルがイヴを抱きかかえたことでさらに激化し・・・

最後にはイヴは正当な権利を持っているのだから今後はエヴァと同じようにリゲルと一緒に行動するということで決着がつかしました。

それに伴ってイヴVSエヴァ＆アスナの抗争も始まり、数日間の戦いの末、終結した。

そしてエヴァ、アスナ、テオ、イヴによる協力体制が確立された。協力体制を取ることになった理由はやはり「リゲル自身が一番強敵」という共通認識だったらしい。

閑話 よろしい、ならば誕生だ（後書き）

イヴの容姿は、black cat のイヴ、もしくはToirov
eのヤミを想像してください。

今後はイヴを色々と原作に絡ませていきたいです。

感想、評価等お待ちしております。

第27話 よろしい、ならば処刑だ(2) (前書き)

今回は長いです。その為クオリティが下がってないか心配です。

この作品の感想、指摘点、評価をもらえると助かります。

第27話 よろしい、ならば処刑だ(2)

たんっ たんっ たんっ

一歩ずつ確実に歩を進めていく。目の前には何もなく、もう一歩進めば谷底に落ちるだろう。

それでも彼女は歩を進める。その下に見える魔獣も死の恐怖も最初から感じていないかのように。

そう、彼女は恐れていないのだ。魔獣も、この高さから落下するということも全く自分が恐れる要因にならない。

だって彼女は『真祖の吸血鬼』で、神の従者なのだから……

そして彼女は最後の一步を踏み出した。

数日前の理想郷にて……………

私が木陰で本を読んでいると、エヴァとアスナちゃんとイヴの三人がこちらに向かってきました。

近くまで来たのを確認して、私は本を閉じてそちらを見ます。するとエヴァが

「り、リゲル！わ、わ私と契約しろ！／＼／＼」
バクティオー

「ええ、仮契約ならいいですよ？」

「じゃあ私も仮契約してくれない？」
バクティオー

「勿論いいですよ。」

「私も駄目？」

「イヴだけ駄目なんて事は言いません、いいですよ。」

仮契約は、簡易型仮契約魔具を使用して行いました。どちらがマスターかを選んで、球体の形をした魔具に手を触れさせるだけです。とても簡単に仮契約できるので、マホネットで売り出したのですがなかなかの売り上げを誇っています。

仮契約をする際、三人から「（ジトーーーーー）」という視線を向けられました。何故なのでしょう？

・・・もしかして私が最近作った試作ケーキ（ミルフィーユ）を一人で食べてしまったことがばれてしまったんでしょうか？三人とも甘いものは好きですからね。

「……………はあ（絶対勘違いしてる（な）。）」

今度は三人そろってため息をつかれました。その上「ジトーーーー」という視線は向けられたままなのでごく居心地が悪いです。

「あの・・・一人で食べてしまったことは謝ります。でも、もともと一人分しか作ってませんでしたし、三人のうち誰か一人だけというのは・・・ごめんなさい、完成したら皆の分も作りますからその目を止めてくださいお願いします。」

「……………はああああーーーーー」

「・・・ならそれに追加で、エヴァにはワイン、アスナちゃんにはフルーッタルト、イヴにはたい焼きつけますからこれで勘弁してください。」

「……………はああああああーーーーー」

「――」

「な、なら……」

こんな感じで三人はリゲルと無事に仮契約バクティオーしたのでした。

その日の食後のデザートにはケーキ、ワイン、ジュース、タルト、たい焼き、パフェ、プリン、アイス、クッキー、ゼリーなどのたくさんさんのデザートがテーブルに並び、ようやく視線から開放されたりゲルはぐったりしていたらしい。

ああ、言い忘れていましたけど最近のアスナちゃんは言葉遣いも改善され、もう普通に話すことができます。不老の魔法薬の効果はまだ抜け切れていませんで今はまだ身体が成長することはありません。

ナノマシンを投与して治すという方法もあったのですが、アスナちゃんは「このままでいい。」と言ったので自然に効果がなくなるのを待とうと思っています。

それでは三人の仮契約カードを紹介します。

名前 A T H A N A S I A E C A T E R I N A M A C D O V
E L L E V A N G E L I N A (アタナシア・エカテリーナ・マク
ダウエル・エヴァンジェリン)

称号 神に守護されし真祖

色調 堇色 (v i o l a)

徳性 信仰 (f i d e s)

方位 北 (s e p t e n t r i o)

星辰性 月 (l u n a)

アーティファクト ? ? ? ? ? ? ? ?

名前 アスナ・ウエスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア

称号 神の加護を受けし亡国の姫

色調 赤色 (R u b o r)

徳性 勇気 (a u d a c i a)

方位 東 (o r i e n s)

星辰性 月 (l u n a)

アーティファクト ??????????

名前 イヴ

称号 神造魔猫

色調 金色 (a u r u m)

徳性 知恵 (s a p i e n t i a)

方位 中央 (c e n t u r m)

星辰性 月 (l u n a)

アーティファクト ??????????

三人とも星辰性が月になってますね？これは私と仮契約したからだ
と思います。一応私は月の女神の後継神（？）という立場の神にな

っているはずですからそれが関係しているんでしょうね。

アーティファクトはまだ秘密です。でもすぐにわかると思いますよ。

こうして三人は神の従者になったのでした

クルトSIDE

フワッ

「アリカ様ッ！」

アリカ様が落ちていってしまふ。彼を信用していないわけではないけど声が出てしまふ。自分が仕えている人が今まさに処刑されているのだから。

「お願いします、リゲルさん。今の僕の方じゃどうすることもでき

ません。だから・・・アリカ様を助けてください!!!」

今僕がどれほど頑張ったとしてもアリカ様を救うことは不可能だ。だから僕は彼に頼ることしかできない。それが悔しくて、ついつい彼の服を強く掴んでしまう。

「勿論です。では、はじめましょう。イヴ、エヴァ、行きますよ！
」

彼は僕の手を優しく服から離させた後、僕も良く知っている人と知らない人を呼ぶと同時に、僕の目の前から消えていた。

「クツクツ・・・王家の血肉はさぞや美味でしょうな。

この処刑方法の長所は復活がほぼ不可能な点です。魔法の使いぬ谷底で幾百の肉片となって魔獣の腹に収まってしまえば、たとえ吸血ハイ・デ
イライトウォーカー鬼の真祖といえども復活は困難でしょう。」

MM元老院議員の一人がその顔を愉快そうに歪めながらドヤ顔で説明しています。

「よろ」それは本当ですか？」・・・当たり前でしょう。
吸血鬼の真祖といえどもこの谷から生き残るのは不可能です。
それと、私の話を遮るなんて君は少し礼儀というものを学びなおしたほうが良いですね。名を名乗りなさい。」

「私の名前ですか？すぐにわかると思いますよ。だって・・・」

ピキンッ！！

谷底で強力な氷魔法が使われます。

「吸血鬼の真祖といつも行動を共にしている人なんて私だけしかないでしょう？」
ハイ・デイトライトウォーカー

私は目深にかぶっていたローブを脱ぎ、最近愛用している『ハーデイス』を議員に向けます。

「きつ貴様は・・・」

「あなた達に不吉を届けにきました。」

「『死を運ぶ黒猫』ヘルキャット・・・リゲル・マクダウェル！
？」

「おいリゲル、俺のセリフ盗んなー!!」

「千の刃の・・・ジャック・ラカン!!・・・それに青山詠春とアルビレオ・イマー!!」『アラルブラ紅き翼』だとッ!!では谷底の女王は・・・」

「てめえ!!離せこの野郎!!なんでアリカじゃなくてお前が落ちて来るんだよ!!てかなんであそこで魔法使えてんだ?!!」

「うるさいぞ鳥頭。あと私は野郎ではない!!魔法はリゲルにどうにかしてもらったわ!!」

「真祖の吸血鬼・・・エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルと千の呪文の男・・・ナギ・スプリングフィールドだ!!!!ならばあの女王は・・・お前が擬態していたのか!!吸血鬼!!!!」

やっと事態が飲み込めたようで憤慨している馬鹿がいますが気にしません。

「早かったですね?イヴはどうしましたか?」

「下で凍った魔獣どもをチャチャゼロと一緒に掃除中だ。そろそろ他の奴らも集めるか？」

「そうですね、この放送は我々が生中継してますから一気にやらな
いと逃げるかもしれませんから・・・『捕縛転送』」

掃除するなら一気にやってしまったほうが気持ちが良いですからね？

ヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュンヒュン

次々と汚職していた元老院議員がここに転送されてきます。少し前からマーカーをつけて一気に転送できるようにしておいたのです。

「ムッ？ここは何処だ？」

「そんなものは殺してしまえb・・・さっきまで執務室にいたはずなのだが・・・何故私はここにいる？」

「はあはあh・・・はああー！ー！？（コイツは俗に言うH・E・N・T・A・Iだったようです。女装趣味している中年のおっさんを思いうかb・・・オエエ）」

「お前が助けを呼んだところで誰も来るわけ……あれ？」

最後の奴は少女を誘拐していたらしく、その後リゲルによって保護され両親の元へ帰されました。

大体集まったようですね？全部で数十名ほどでしょう。

「では、世界中のこの放送を見ている皆さんに重大発表があります。此度の戦争によってこのたび処刑されるはずだったアリカ様が多く、の非難を受けていますがそれは間違いです。ここにいるMM元老院議員たちこそが今回の戦争の黒幕と結託し多くの死者を生んだ重罪人なのです！！この二年間の捜査で証拠は全て集まっています。それでは読み上げます。まず 氏の罪状は……」

こうしてここにいる元老院議員全員の罪状とその証拠を読み上げていき、とりあえず逃げないように拘束してケルベラスに投獄。そしてアリカ様の無罪を証明するために自作の大戦映画（アリカVER）を上映し、その後、アリカ様が捕まった時の映像を見せて、元老院議員の醜悪さをアピールしておきました。

あとは全国各地に証拠の複製品をばら撒き、一週間後にも各国に問いかければ終わりです。ついでに集めた他国重役の犯罪歴をまとめたものも公開しておきましょう。

こうしてアリカ様の無実が証明され、MM元老院の信用は地に落ちたのでした。

私は、エヴァの時の仕返しができるとても満足です。

「アル、俺ら来た意味あったのか？」

「詠春、それいつては駄目ですよ。」

「リゲル！俺のアリカはどこいったんだよ！！」

「俺のとは・・・妾は何時の間にお主のものになったのじゃ？教えてくれぬかのう、ナギ？（ニヤニヤ）」

「お、おまえ！いたならいたって言えよ！！／＼／」

「そんなことは別にいいのじゃ。で、誰が誰のものなのじゃ？ほら、言ってみよ。（グリグリ）」

「ち、チクシヨーー！！」

これが後に女王様モードと呼ばれるサドなアリカが誕生した瞬間だった。

その頃の谷底

「ケケケケケ・・・コノゴロ出番ガナイカラ忘レタカトオ思ツタゼ。ストレス解消サセテモラウゼ！！（ヒュンヒュンヒュン）」

「・・・チャチャゼロ怖いよ？私も後片付けしないと・・・（ガガガガガガガガ！！！！）」

こうして、ケルベラス渓谷の魔獣は一匹残らず駆逐されたのだった。

第27話 よろしい、ならば処刑だ(2) (後書き)

二週間後にMM元老院議員はオコジヨ刑にされ投獄された。

後日、各国の重役が一斉に捕まりオコジヨ刑にされたい。

最近ナギがアリカの尻に敷かれている光景がよく目撃されているそうだ。その時の二人の顔は満面の笑顔で、とても幸せそうだったそうだ。

だが、アリカとリゲルの二人が一緒に歩いていたという証言も・・・

閑話 金色の少女の気持ち（前書き）

駄文過ぎる・・・

多々読み辛い部分があります。ご容赦ください。

閑話 金色の少女の気持ち

「・・・どこどこ？」

目が覚めて最初に見た光景は真っ白な部屋と目の前に佇む真っ黒な男の人だった。

最初はわからなかったけど、徐々に自分の状況がわかってきた。私は彼が産み出した命だということ、そしてこの身体のことと使い方、ありとあらゆる分野の知識、一般常識などが少しずつ身体に馴染んでいくのがわかる。

そして彼は私に服を与えた後、少し顔をしかめた。それを見た私は

「大丈夫？どこか痛い？」

自然にこの言葉を発していた。自分でも何故こんなことをいったのかわからなかった。

その後、彼は私に衣服を渡してきた。自分の姿を確認した私は黙ってそれを着る。なぜか頬が熱い気がする。彼は私が服を着たことを確認した後、

「あなたの名前は『イヴ』なんてどうでしょう？」

私に名前をつけてくれた。何故かわからないが胸が少し温かくなつた気がする。

「・・・うん、気に入った。ありがとう。」

これが私と彼の出会い。
ファーストコンタクト

そして、私という存在の始まりだった。

episode 金と黒の生活

翌朝、目が覚めるとドアの向こう側から良い香りがした。彼に与えられた部屋で寝ていた私は、ベットを出てキッチンに向かう。自分が空腹だということはなんとなくわかっていた。初めて感じることだからよくわからない。

「おはよう、イヴ。朝ごはんを食べる前に顔を洗ってきてください。ああ、朝ごはんはパンとお米どちらが良いですか？」

「……どちらでもいい。御主人に任せる。」

私はそう言って洗面所に向かう。私は彼のことを御主人と呼んでいる。理由は特にない。猫人の皆がそう呼んでいたから私もそうしただけだ。

私が顔を洗って戻ってくると、アスナとエヴァが起きてきた。

「おはよー。ふあー、まだ寝足りんなあ。」

「リゲル、おはよー。今日の朝ごはんなに？」

「はい、おはようございます。エヴァとアスナちゃんは顔を洗ってきてください。朝ごはんはそれからですよ？あと、パンとお米ならどちらが良いですか？」

エヴァはパン、アスナはご飯と答えた後、二人は洗面所に向かった。

二人のことは昨日紹介された。これから一緒に住むから仲良くしてねと言われた。私は自分の知識の一般常識、対人関係の項目からどうすればいいのかを調べて、常識的な行動を取った。

全員が揃ってから、朝ごはんを食べた。初めて食事と言つものをしたけれど、これが美味しいということはわかった。

食後はみんな自由に過ごしているようだ。私は特にすることがないから御主人についていった。

御主人が掃除している。

御主人が洗濯している。

アスナがやってきて「私のパンツは洗濯しないで！！自分でやるから！！（バチーン！）」というやり取りをしている。

アスナがエヴァに「一緒に洗濯されて恥ずかしくないの？」と聞いて、エヴァが「何年一緒に生活してると思ってるんだ？お前とは重ねてきた年月が違うんだよ？（ちよつと得意げ）」と答えているの。御主人は微笑みながら見ている。

それにアスナが「そんなに長い年月をかけてるのに全く進展してないんだね？（クスクス）」と言い返した。

エヴァとアスナが喧嘩しだすの見て「これは止めないといけませんね？」とこっちを見ながら笑いかけてくれる御主人。

そして喧嘩を止めようとする御主人。

ずっと御主人を見ている。特にやる事が無かったからせいなのかもしれないけど、いつも御主人を見ていた。なぜか目が離せなかった。

数日間が経った。

そして私は気づいた。いつも御主人の周りには誰か女の人がいる。

大抵エヴァやアスナが御主人のそばにいる。二人が忙しいときは、数人の猫人が絶対に傍にいる。

それに気づいたとき何か違和感を感じた。

アスナの話を微笑みながら聞いている御主人を見た時。

エヴァが御主人に抱きついていて時。

御主人が二人を見て、優しい笑みを浮かべているのを見た時。

それらを見たときと同じように胸が鈍く痛む……

他の猫人に相談したら「それは心が成長した印だニヤ。」と言われた。

私は心が成長すると言う意味が最初はわからなかった、自分の知識と照らし合わせてその時初めて自分の気持ちに気が付いた。私は

『御主人と一緒にいたい。離れたくない。』

心の底からそう願っていた。

この気持ちを何時から感じていたのかは私自身わからない。少し前からだったのかもしれないし、生まれたときからかもしれない。気が付いた時には私の心の中にこの気持ちはあった。

それが思慕の念かそれとも俗に言う家族愛なのか私には判らない。

この感情の答えが知りたかった。

それから数日間、私はいつも御主人の傍にいた。

・ アスナみたいに甘えてみたり、エヴァみたいに抱きついてみたり、御主人の呼び方をリゲルに変えてみたり、一緒に料理をしたり・・・

色々なことをした、私はリゲルと一緒にいると自然に笑顔になった。
これが幸せというもののだと解った気がした。

でもまだこの気持ちが異性に対するものなのか、家族に対するものなのか・・・私には判断し切れなかった。

次の日、リゲルが皆に襲われた。

これは皆にとつて遊びの延長なのだとわかっていても少し嫌な気持ちになる。そんな時リゲルがこんな事を言った。

「私を捕まえた最初の一人の命令を無理なことではなければ一回だけ聞いてあげます。」

コレを聞いた私は、必死に作戦を考えて自分の知識と照らし合わせて最良だと思ふ案を導き出していた。

ただ『他のみんなにリゲルを盗られたくない。』という気持ちが心の中に溢れていた。

「リゲル、抱っこして？」

その作戦は見事に成功した。私は嬉しくて、リゲルに力いっぱい抱きついた。リゲルも抱きしめ返してくれる。その時私は自分の気持ち異性に対するもの……『恋』だと気づいた。

今思い返してみれば何で初めて彼と出会ったとき彼のことがあんなにも気になったのかわかる。多分私は最初から、彼を一目見たときからこの気持ちを抱いていた、一目惚れだったんだ。

「捕まえた。私の命令一回聞いてね？／／／」

だから私は、彼は絶対に誰にも渡したくない。心の底からそう思った。

その日の夜は頭の中の知識から、何をお願いしようか決めるのに時間がかかって、やっと決めれたのは朝日が昇った後で全く眠ることができなかった。

自室から出た私は、あの後どこかに行ってしまったリゲルを探すために家から出る。すると外では問題が発生していた。

昨日の結果が気に入らなかった人たちが、『直談判だニヤ!!』と言ってリゲルを襲おうために仲間を集めていた。

当然私は気に入らない。自然と「リゲルは私のものなの!!」と言いながら皆に向かって走っていた……

その後のことはあまり覚えていない。気が付いたら髪の毛が血だらけになっていた。

猫人にとってこの程度の流血は、怪我の内に入らないから気にしない。今はみんな気絶してるけど2、3時間もすれば怪我也治ってるだろうし目を覚ますだろう。

だからみんなが起きて邪魔をしてくる前にリゲルをお願いを聞いてもらわないといけない。

リゲルは隠れて逃げようと思ったから昨日の内に隠れやすい場所には罠を仕掛けておいた。

ピーー！ピーー！ピーー！

・・・ちょうど引つかかったらしい。こつも簡単に引っ掛かってくれるとは思ってなかったから拍子抜けした。気を取り直して、彼に逃げられる前に捕獲するために急いでそこに向かう。

*****移動中*****

どうにか間に合った。脱出寸前だった彼に抱きついて、逃げられないようにしてから私が一晩中悩んで決めたお願いをする

「リゲルは私とずっと一緒にいて？／＼／」

昨日、いろんな知識を集めていたらある雑誌に『好きな人に告白するならこの言葉！』と言う見出しの記事の中にこの言葉が載っ

ていた。

このお願いを聞いてもらえればずっと一緒にいることができるし、いっぱい甘えることができるらしい。

あの二人よりリゲルの近くにいることができると言うことがわかった私は、お願い候補の1つとして採用した。

リゲルは無理なこと以外と言っていたけどこれは無理なことなのだろうか？

もしこのお願いが駄目なら他のものにすればいい。たくさん考えてあるからいつかは良いといってくれるお願いもあると思う。

（あまりに過激な表現）とか

（ノクターン的な表現）も良いかも知れない。

（女性の読む一部の雑誌には、たくさんの過激な用語が飛び交っている物もあります。）

「これは困りましたね。叶えてあげたいのですけど、いつも一緒と言うのは少し無理がありますし、いろいろ問題もありますから・・・」

私のお願いはリゲルにとって『無理なこと』らしい。でもリゲルは私のお願いを叶えてあげたいと思っているから困っている。

そんな優しい彼を見ていると、私はとても嬉しくなる。

私のために頑張って悩んでくれることがとっても嬉しい。

私は彼とのこんな日々がずっと続いて欲しいと心から願った。

「ん？リゲルどうしたんだ？」

「いや、それがですね……………」

その為には、目の前にいる鬼を倒さないと……

でもその前に

「誰にもリゲルは渡さない、リゲルは私のもの！（チュッ）」

エヴァの目の前でリゲルに抱きついて頬にキスをした。これは私からエヴァへの宣戦布告。

これが私達の絶対に譲れないものを賭けた戦いの始まりだった。

閑話 金色の少女の気持ち（後書き）

次回は、閑話 『じゃじゃ馬姫の気持ち』を予定しています。
早く原作に突入したい……

けどここから一週間ほど忙しいので、更新は無理かもです。

少しお休みをいただきますけど12月に入ったら再開します。

閑話 じゃじゃ馬姫の気持ち（前書き）

この一週間忙しかったorz

まだまだ多忙な日々が続くけれど・・・

多分不定期になるけどこれからも更新はしていきますから！！

閑話　じゃじゃ馬姫の気持ち

ヘラス帝国第三皇女の自室にて

「はぁ・・・」

この部屋の主である少女は本日39回目のため息をついた。

最近の彼女は様子がおかしい。以前はとても活発でお付の侍女たちはいいつも彼女に振り回されていた。

それが今や騒ぐこともなく窓の向こう側を見ながら儂げな表情をしている。

その光景は一種の神聖を帯びてさえいるようにさえ見える。

そんな彼女の様子を見た彼女の両親である国王夫妻もとても心配しており、

「もしかして病気ではないのか?!」

と国王は国中の名医が集めようとしたほどだ。

その計画は女王の手によって阻止されました。その翌日、傷だらけの国王が目撃されたいらしい。

その一方、心配をかけている姫君の様子はというと

「うううううううう王子様に合いたいんじゃないのじやうううう。」
（ギユウウ
ウ）

恋する乙女状態で自室の天蓋付きベットの上で枕を抱きしめていた。
症状は既に末期であり、国務も満足に行えなくなるほどだった。

こんなことになっている理由は

1 大戦が終了してから既に3年ほど経っているが、リゲルと話せた回数、会った回数は数回ほどだけである。

2 1によるリゲル分（同盟内では有名な必須栄養素の1つ。幾つかの部類に分けられている。）の不足

3 自分だけが一緒にいられないハンデ

4 四人目の加入

上記の4つの要因によるストレスや寂しさによってもう既にボロボロだったテオに、数日前のあることによって止めの一撃を刺されたからである。

数日前

ザザア…………ザア…………

「…………聞…………るか？…………こち…………聞こえたら返事をしろ？」

「こちらテオじゃ。聞こえておるぞ。」

「よし、通じたな。それでは恒例の活動報告会を始めるぞ。」

これは同盟内で行われている活動報告解である。本当ならばテオは帝国にいるため参加できないのだが、リゲルに投影型通信魔神具を

造ってもらいこの問題を解決している。

「さて、妾は最近リゲルと会うことができておらぬから報告はないのじゃ。お主等は何かあったのかの？」

「クツクツクツク・・・そんなに私の報告を聞きたいのか？（意地悪そうな表情のエヴァ）」

「~~~~~~~~（だらしなく顔を緩めているアスナ）」

「・・・・・・・・（無表情だがどこか嬉しそうに見えるイヴ）」

あからさまな態度の三人の様子を見て、何かがあったことを悟ったテオは

「ムウ！その様子から何かあったのじゃな！！なんじゃ！何があったのじゃ！！妾にも教えるのじゃ！！」

その後三人によって語られた内容によってテオは大打撃を受けたのだった。

一言で説明すると仮契約を三人に自慢されたと言うことです。

「フフフ・・・これを見るが良い!!」

「仮契約カードじゃとお!! エヴァに先を越されるとは・・・一生の不覚じゃ・・・妾の王子様は汚されてしもつたのじゃ・・・ハッ!! もしやお主らまで・・・」

「エヴァだけじゃなくて私たちもリゲルと仮契約したのよ? フフフ
フフ」

「私ともしてくれた。(先ほどと表情は変わらず無表情だがどこか嬉しそうに見えるイヴ)」

喜色満面の様子で残りの二人も仮契約カードをテオに見せる。
一方それを見せつけられたテオは

「妾の王子様が・・・王子様が・・・グスッ・・・そんなの信じないのじゃ～～!! うわああ～～～ん!! (ブツンッ)」

泣きながら通信を切りそれを破壊した後、自分のベットに潜り込んでいった。

こうして現在に至るのである。

コツコツコツ・・・

そんな状態の第三皇女の部屋に、一人の女王が訪れてようとしていた。

コツコツ・・・ガチャギイ

「ブツブツ・・・妾じゃって・・・ブツブツ・・・」

コツコツコツ・・・

「妾じゃって本気を出せば・・・一瞬で骨抜きに・・・」

「んむ？何が本気を出せばなのじゃ？」

「そんなこと決まっておるではないか？妾が本気で王子様を誘わく・・・フニヤアア！？ただただ誰じゃ！！侵入者か！？」

「侵入者とは酷い言い草じゃのう？共に戦った仲ではないか？」

「おお！？アリカではないか！久しいのう、元気にしておったか？・・・さて、それはともかく・・・先の話、どのあたりから聞いておったのじゃ？」

「ふむ、『妾じゃって本気を出せば王子様なんて一瞬で骨抜きにして結つこり』そこまで！！そこまでじゃあ！！！全部言わずとも良いではないか！！そんなに妾をいじめて楽しいか！？（ウルウル）」
「・・・これは新しい趣味に目覚めそうじゃの・・・（ジュルリ）」

「変態じゃ！変態がここにいるのじゃ！（ガクブルガクブル）」

「抵抗しても無駄じゃぞ？観念して妾に身を差し出すがいいのじゃ？（ニヤニヤ）」

「嫌じゃ！！妾のこの身体は頭の前から爪先まで王子様のものなのじゃー！」

「ほほう？頭の中から爪先までと言うのかのう？最近の女子はここまで大胆になったのじやのう（ニヤニヤ）」

「つつつ!!／＼／＼　も、もしや妾を騙したのか?! ならばアレも演技じゃったのか・・・そういえばアリ力は既に結婚していたのう? ならば妾を襲う訳はないはずじゃな?」

「そのとうりじゃ、決して本気で襲いそうになつたわけではないじや。（そろーり、そろーり……）」

「……何故ゆっくりとこちらに寄り寄ってくるのじゃ？」

「なんじゃ？妾がテオの近くに行つてはいけないのかのう？そんなに妾は嫌われておつたのか……」

「手を不自然に動かしながら近寄ってくる奴が言うセリフじゃないのじゃ!!こつちに来るでないわ!!このっ……変態!!!!」

「（ゾクゾクッ）まして新しい雇が開いた気がするのじゃ！！・・・テオ~~~~？もっと！もっとなのじゃ~~~~？？」

「ギャーーーーー!!!!」
「うっちに來るでないわ~~~~!!」

*****少々お待ちください*****

「嫌じゃ！！嫌なのじゃ！！！！妾はそんなもの着ないのじゃ！！」

「仕方がないのう？ならば妾が・・・（脱ぎ脱ぎ）」

「自分で着ようとするんじゃないのじゃ～～～！！！！」

どんな服かはお想像にお任せします。

*****さらにお待ちください*****

「シクシクシク・・・ついに妾まで汚されてしまったのじゃ・・・」

「まあ冗談はさておき、テオに知らせねばならぬとおもったことがあつてのう・・・今回妾は公務でここを訪れたわけなのじゃが、テオも良く知っている男が今回の妾の護衛なのじゃ。最近元気がないと聞いておったから、少し無理を言つて付いて来てもらったのじゃ。」

「・・・・・・・・それは本当か？」

「お主が最近元気がない理由ぐらい分かっているから。戦友があまりにも可哀想じゃったから少し手助けしてやろうと思ってる？・・・・・・・・ここからは妾の独り言じゃが、その護衛にはこの部屋来るよう妾が呼んでおいたのじゃ。あとその護衛は万能でう、なんと本人そっくりの人形を作り出せるのじゃ。しかも本人と同じように考え、行動する上に本人ともリンクさせることができるらしいのじゃ。こんな人形があれば自分の仕事を人形に任せて自分は好き勝手にできるの？」

「なんじゃと！！そんなことが可能なか！？それなら・・・・・・・・ブツブツ・・」

「既にテオのご両親とは話をつけてあるのじゃ。テオの父上は最後まで渋っておったのじゃが、テオの母上の助力もあってどうにかO・H A・N A・S I だけで解決できたのじゃ。その母上からの伝言で『しっかり幸せになりなさい。でも時々帰ってきなさいね？』と言っておったのじゃ。」

「母上・・・・・・・・ありがとうなのじゃ！！妾は王子様と幸せになるのじゃ！！」

「そろそろかのう・・・・・・・・ふむ、急に散歩がしたくなったのじゃ。多分30分ぐらいは帰ってこぬからのう・・・・・・・・上手くやる

のじゃぞ?」

ガチャギイ……コツコツコツコツ……

「アリカ! ありがとうなのじゃ!!……フフフフフ……
やっと妾にもチャンスが来たのじゃ!! 逃がさぬ、絶対に逃がさ
ぬからのう!! 待っておれ、妾の王子様!!」

テオによるリゲル説得ダイジェスト

全て描写すると、とっても長くなるので簡潔にまとめました。

「わらわも連れて行って欲しいのじゃ!!」

「姫様だからあきらめなさい、国務があるでしょう?」

「嫌じゃー！絶対についていくのじゃー！（上目＋涙目）」

たじろぐリゲル

「それに親御さんが許可するはずないでしょう？（コレでテオも諦めてくれるでしょう）」

「許可があればいいのじゃな？」

「でも許可なんて出るわけないでしょう？それにテオにしかできない仕事もたくさんあるでしょう？もし許可が出たなら話は別ですがね。」

「フッフ・・・言質を取ったのじゃー！許可なら既に取っているのじゃー！コレで障害は無くなったのじゃー！あとは王子様がアリカの言うすごい人形を出してくれれば万事解決じゃー！これからよろしく頼むのう？王子様？」

こうしてテオは帝国を離れてリゲルと一緒に過ごすことになった。

これにより四人の抗争が激化したのは簡単に想像できることだろう。

閑話　じゃじゃ馬姫の気持ち（後書き）

いつの間にかアリカが変態になってる！！

何故こうなった！！！！！！！！俺のせいだった！！

第28話 よろしい、ならば京都に行こう+第??話

とある人形のあったか

短い・・・時間がなくて長文は書けなかったので2話を1つにまとめてみました。長さはいつもと同じくらいです。

自動車学校やらなにやらで更新が遅くなっています。お待たせして申し訳ないです。

全部片付いたら一日一話に戻したいな・・・

一話一話のクオリティも向上させたいです。

注意

クオリティが低いです。どうか許してください。

第28話 よろしい、ならば京都に行こう+第??話

とある人形のあったか

リゲルSIDE

大戦が終結して5年経ちました。その間私は、依然お世話になった村を回ったり、アリカ姫の護衛をしたり（ナギが嫉妬していました）、戦争孤児を見つけてはアリアドネーに送ったりと色々していました。

私が昔住んでいた村を中心に近隣の村を合併させて色々改造していたら首都規模にまで大きくなってしまった時は流石に怒られましたね。

難民を受け入れてくれていたのでいろいろしちゃったのですよ。

戦争で居場所を失ってしまった人たちや幼い戦争孤児の皆を保護するには多くの設備や家が必要ですし、食べ物も、医療機関や移動手段も・・・とやっていたらいつの間にかという訳です。

今では村の総人口は故国ウェスペルティア王国の全国民の25%に迫るほどです。もはや村とは呼べない代物になってしまいました。

あと『全て猫だらけの理想郷』^{ニャバロン}とこの村（？）^{ニャバロン}を繋いで多くの問題も解決させました。『全て猫だらけの理想郷』^{ニャバロン}中の研究所の技術力で大抵のことは解決できますからね。

食料や働き口の問題が解決した時も嬉しかったのですが、一番私が嬉しかったのが『襲われなくなった事』ですね。猫人の女性達は村（？）の男性を品定めするのに忙しいらしいです。

予先が変わってくれてホッとしています。

あとMM元老院は一時解体されました。アレだけのことを起こしたのですから解体は当たり前でしょう。ですが、またいつか別の形で復活する可能性が大きいですがね……

それと、他の国も多数の有力議員が汚職していたのですから最近まで人事入れ替えが激しかったみたいです。最近になってやっと以前の落ち着きを取り戻してきた様に見えます。

おっと、話が逸れてしまいましたね？ 気を取り直して、村の話の続きです。

このごろは以前は忙しさからは想像できないほどに、村の仕事も安

定してきたので正直やることはないです。これならもう私がいなくても十分やっていけると思っています。なのでそろそろここを離れようかと思っています。

幸い『アラルプラ紅き翼』の皆と別れるときに詠春が

「いつでも来ていいぞ？だが先に連絡しろよ？」

と言ってくれていたのでそろそろ京都に行ってみましょうか。

数十年ぶりの日本です、全力で堪能したいと思います。

温泉に入って、上がったら牛乳を飲んで、和食を食べて、コタツの中で丸くなる、そして火照った身体に染み渡る甘い蜜柑……いいですね、最高です。

では、荷物の準備を始めましょう！！

詠春SIDE

私は関東呪術協会の長、近衛詠春と申すものだ。

一週間前に私の友人であるリゲルから「一週間後にそちらに行きま
すね。」と言う連絡を受けて、我が関東呪術協会では私の友人達の
歓迎の宴会の準備の真っ最中だ。

巫女達は忙しなく動き回り、料理や部屋の掃除の最終確認をしてい
る。

普段から綺麗にしているのだから急ぐこともないと思うのだが、巫
女達のが言うには

「手を抜く訳にはいけません。私たちができる最高のおもてなしで
お迎えしたいのです!!」

だそうだ。

つい先日知ったのだが、我が家の巫女達の殆どがリゲルのファンら
しい。そのファンクラブも今では二つの世界の中で1、2を争うほ
どの規模らしい・・・本人はこの事を知っているのだろうか？

リゲルファンクラブこと『黒猫』の全てはエヴァの管理の下で運
営されています。そのおかげで西洋魔術師に対する反感はリゲル達
(エヴァ、アスナ、テオ)には向けられてません。勿論リゲルはこ
のことを知りません。

そういえば最近、木乃音^{このね}さんが巫女達とよく一緒に話している所を見かけるな？

近衛木乃音^{このえこのね}：詠春の愛妻 陰陽術の達人 体が弱い 妖怪ぬり
ひよんの娘 大和撫子

・・・大丈夫だ、木乃音^{このね}さんまでそうなったと決まったわけではないはずだ。偶然だ、決してファンクラブの会員になったと決まっ「詠春はん、クロ様は・・・こほんっ、リゲル様は何時いらっしやりはるんどす？」

クロ様とは、リゲルファンクラブ内でのリゲルの呼び方です。

「木乃音^{このね}さん、あなたまで・・・orz」

数分後

背中に哀愁を漂わせ「自分の妻が友人のファンクラブ会員・・・しかも『様』を付けて愛称を・・・妻を取られたみたいで複雑な気分です。」と呟いている呪術協会の長が巫女達によって目撃された。

この情報はしっかり木乃音さんにも伝わり、しっかり慰めてもらったそうだ。

第？？話 とある人形のあつたかもしれない話

時系列は完全無視です。お気を付けください。

大戦から8年後のとある辺境の村

??? SIDE

「・・・・・・・・あの村は・・・」

ゴオオオオオオ

炎の燃え盛る村の一角に着地した少年は以前助けられた女性のことを思う。

彼には主に対する忠誠や目的意識が設定されていない。そして彼は人形であるがその思考は人とは同じものである。

だが彼は自分の中に生まれていたその女性に対する特別な感情に気づけなかった。

それに気づかぬまま、彼はその女性を見つめる

「・・・・・・・・息はある・・・」

表情は無表情だが心なしか安堵しているように見える。そうでなけ

れば態々彼女がまだ生きているかなど確認するわけがない。

「・・・あ・・・れ、あな・・・たは・・・」

意識が戻ったのかその女性は彼に気が付き話しかける。

「スミマ・・・セン・・・今日は・・・珈琲は・・・ちよっ・・・と・・・」

「いや・・・」

自分の身体の心配をするよりも先に彼に珈琲を作って上げられないことを謝る女性。

彼女はこの先の自分の運命がわかっているようだった・・・

コード・オブ・ザ・ライフメーカー
「創物主の掟」

ボツ・・・ザアアアア・・・

彼女の身体は無情にも新たに現れた者によって消滅させられた。

「遅かったなテルティウム。おっと、誤解するなよ？その女の傷は私じゃない。そんな優雅さにかける殺しを私はしないさ。」

醜く顔を歪ませながら笑う男はそう言った。

それを無表情に聞くテルティウムはそこで初めてその男の方へ顔を向けた。

「襲撃者は人間だよ。もつとも、既にその人間どももサククリまてめて美味しくいただきかせてもらったがね？・・・くつくく・・・なぜって顔だな？聞きたいか？聞かせてやろう。」

その男はテルティウムの極微妙な変化に気づかぬまま喋り続ける

「この村の住人達は肌接触による強力な読心術の持ち主だったのだ。古来、読心術者は疎まれ、あるいは利用されてきたが・・・深部記憶まで読み取る彼女たちの力となると話しのレベルが違う！その力を必要とする後ろ盾がある内は良いがひとたび邪魔ともなれば・・・まあ、彼女達に生き残りの選択肢はなかっただろうけどね！」

ガサッ

「んん？」

彼の背後から物音がし、それに気づいた彼は振り返る

「あ．．．あ．．．」

「ふん、まだ一匹生きていたか。ハハハハハ！小娘、逃げるな逃げるな！！姉のもとへ苦しまずに送ってやろうというのだ！！ハハハハハハッ．．．ハ？」

狂った笑みを浮かべながらその少女の方へ歩いていく男は．．．

真後ろにいた者よって首を落とされた。

「きつ．．．貴様テルティウム！？何故、こんな．．．壊れたか！？彼女達に生きる道はなかった！！他の全ての魂達の為に！！我らの計画しか道はないのだぞ！？」

「わかつている。」

「ならばな『ボキユツ！！』ぜびっ！」

「役目は果すさ、君の分まで・・・けど・・・あの珈琲はもう飲めないね・・・」

自分が壊した人形のことを全く気にせず、テルティウムは彼女の妹を保護して去っていった。

彼の後ろで燃え盛っている炎の中で一人の男がその様子を見ていたことも知らずに・・・

「とりあえず彼女を保護したのは良いんですけど・・・実体化させて怪我を治してから老化を抑える魔法をかけて隠居してもらいましょうか？・・・次に彼に会えそうなのは十数年後になりますから、コールドスリープでもいいですね？・・・とりあえず彼女が起きてから相談しましょう。」

テルティウムは何気に彼のことを気に入っていたとある神様によって、好きだった人を救ってもらえたのだった。

それを彼が知るのはずと先のこと・・・

これはもしかしたらあったかもしれないお話

第28話 よろしい、ならば京都に行こう+第??.話

とある人形のあったか

木乃香の母親の名前を考えるのが大変でした……

でもコレならまだ誰も使っていないだろう!!
……と信じたいです。

必死で考えて出てきた名前が木乃音さんです。
木乃音さんは死にませんよ?

次回リゲル一行が京都を訪れます。

第29話 よろしい、ならば総本山だ（1）（前書き）

若いときの詠春の口調は案外荒いんですね

年をとって変わったのは額の広さだけじゃなかったんですね？

今回は少々キンクリします。軽く数年ほど・・・

原作に無い期間は書きにくくて、完成度も低いですし、何気にこの小説はもう35部目なのに原作突入してないとかドンだけなんですよ？

あと、今回は短いです。申し訳ない。

第29話 よろしい、ならば総本山だ(1)

side

ザザザッ。ーザザザザ。・・・

「・・・こち・・・聞こえ・・・会長、応答願います。」

「聞こえている。早速だがそちらの進行状況を報告しろ。」

「こちらの準備は整っています。完璧です。」

「そうか、よくやってくれた。報酬は特A級の物を準備してある。」

「ハイッ!!ありがとうございます会長!!」

「何も聞かずに協力してくれたことに感謝する。」

「このくらいお安い御用です。では合図をお待ちしています。・・・ブツンッ」

「準備は整ったな。今夜こそ……」

リゲルSIDE

詠春に連絡してから一週間……
やっと京都に到着しました。

転移すればすぐに来れたのですが、魔法世界から出るのに必要な手続きもありますし、テオの実体化も必要でしたからそれらの準備するのに時間が掛かってしまいました。

さて、後はこの長い階段を登れば関西呪術協会の総本山こと詠春の家に着きます。

はやく露天風呂に入りたいです。

フラグが立ちました。

「ふむ？なにやら彼方此方から視線を感じるのじゃが？」

「……全部で十二人いる。でも敵意は無いみたい。」

「監視がいるようですね。素性を確認したら勝手にいなくなってくれるでしょうから大丈夫ですよ。」

「詠春も先に連絡しておいてくれればいいのに。」

「そういう訳にもいかんだろう。ここは一応関西呪術協会の本部だからな？……それにしても粗末な守護結界だな？この程度なら一瞬で破れるぞ？」

「準最強級の実力者が襲撃してきたら危ないですね。詠春に強化しておくように進言しておきましょう。」

この後、結界の弱点を話しながら数分かけて階段を登り終えました。先には桜の木々に包まれた屋敷と、綺麗に並んだ巫女さん達と、共に戦場を駆け抜けた盟友がいました。

「……………皆様、ようこそ御出で下さりました。関西呪術協会一同、心より歓迎いたします。」……………

「久しぶりだな。元気にしていたか？」

「ええ、そちらも健康そうで何よりです。長の仕事にはなれましたか？」

「まだまだ分からない事だらけさ。木乃音さんに支えてもらいながらどうにかと言う感じだよ。」

「新婚なのにゆっくりできないのは考え物ですね。多少のことならお手伝いしてもいいですよ？」

「いや、今は仕事に慣れないといけないから遠慮しておこう。もしものは助けてもらうからな？」

「ええ、任せて下さい。」

「詠春はぐん。お食事の準備ができてますえぐぐ？」

「おっと、話し込んでしまいましたね。立ち話もここまでにしましよう。」

「そうですね。みんな行きますよ……四人ともいつの間に先に行ったのでしょうか？まったく気づきませんでしたよ……」

「リゲル・・・テオドラ様は準最強級ぐらいの強さになってないか？
仮にもお姫様だったはずだと記憶しているんだが？」

「・・・ウチには悪ノリしまくって見境無く魔改造する猫達がい
ますからね・・・一年も一緒に生活すれば準最強級にもなり
ますよ・・・」

「・・・すまない。・・・デリカシーに欠けていたな・・・
・・・その、なんだ？・・・いつでも相談に乗るぞ？」

「・・・っ！！・・・止めて下さい。優しい言葉が一番つら
いんです。」

「・・・そうか・・・」

男は辛いです。

総本山に到着した昼過ぎ頃から始まった宴は夜中まで続きました。

アスナちゃんとテオはウトウトし始めた頃に部屋に連れて行きました。

残りの二人はと言うと

「ハッハッハッハ！！もっと酒を持って来い！！！」

「ケケケケケ！！何デ俺ノ出番ハコンナニ少ナインダヨ！！飲マナキヤッテラレネーヨ！！」

片方は一升瓶片手に酒をどんどん飲んでおり周りには数十本の酒瓶が散乱しており、もう片方は

「（ムシヤムシヤムシヤムシヤシヤシヤシヤシヤ！！！！）
・・・・・・・・お代わり。」

ひたすらお変わりし続けています。食べ始めてから『お代わり』以外の言葉を発していません。

この光景を見ていると巫女さん達が可哀想になってきます。

一方は「酒持つて来い！！」と言い続ける少女。

もう一方は猛スピード食べ続けて「・・・・・・・・お代わり。」としか言わない少女。

私達は長の客人であるから手を抜くわけにいかないようで、私がそ

の様子を眺めていたら倒れてしまう人もいたほどです。

『ご想像通りの鈍感主人公です。倒れた巫女さんはファンクラブ会員ナンバー43526番の未婚の20代前半の女性です。座右の銘は『クロ様万歳！！』』

心配になって駆け寄ろうとも思ったのですが他の巫女さん達に止められました。

木乃音さんに

「止めを刺すつもりですかえ？」

と言われましたがどういう意味だったのでしょうか？

続く

第29話 よろしい、ならば総本山だ（1）（後書き）

中途半端で申し訳ないです。

駄文になっていることは理解してます。終盤になってやっと以前の
ようにサクサク書けるようになりました。できるだけ早く調子を取
り戻したいです。

テオの実体化手順説明

- 1 テオの頭の上に手を軽く乗せる
- 2 自分の体の中に流れている気や魔力やらを手収束させる
- 3 後は「実体化しろ〜〜〜〜〜」と念を込めながらテオに色々混ざったナニカを流し込んでいく
- 4 軽く体が光ったら成功

第30話 よろしい、ならば総本山だ(2)(前書き)

多分今年最後の投稿です。

皆さん良いお年を〜

第30話 よろしい、ならば総本山だ(2)

リゲルSIDE

私はイヴとエヴァにそろそろ止めるように言って、詠春に巫女さん達を休ませてあげるようにと伝えてから露天風呂に向かいました。

ちょうど温泉に向かおうとしていたとき

「クロさmゴホンツ……リゲル様お一人では露天風呂の場所がわからないと思いますので僭越ながら私がご案内させていただきます。」

と言って巫女さん達の内の一人が案内してくれることになりました。
……なぜか彼女の笑顔の裏に『ニヤリッ』という文字が浮かんだ気がしたのですが気のせいでしょうか？

「こちらの暖簾の先が露天風呂でございます。どうぞ御緩りとお楽しみ下さいませ。」

「はい、態々案内してもらってありがとうございました。」

軽く頭を下げながら去って行く巫女さんを見送った後、私は温泉へ

と向かいました。

おおっ！！今は誰も入っていないようですね！これだけ広い浴槽を貸切状態なんてすごく贅沢です！！！！

・・・・あまり褒められたことではないですが、温泉で貸切状態ならばやることはたった一つ！！！！

それは・・・・泳ぐことです！！！！

「温泉で背泳ぎをするとふちがどの辺りにあるか分からなくて頭をぶつけてしまうのは誰しもが経験することです！！あれはとっても痛かったです！！」

温泉で泳ぐのは周りの方々の迷惑になりますので止めましょう。

その後満足した私はゆっくりと温泉に浸かりました。

「会長、リミットは1、2時間ほどです。それまでは誰も中に入れませんからどうぞ自由に。」

「例の物は3日後に郵送される予定になっているから楽しみにしている。では、後は任せた。」

「はい。」

コトンッ

【ただ今掃除中です。1〜2時間お待ち下さい。】

は看板です

「~~~~~」

温泉の中を思う存分泳ぎきった私は岩に身体をもたれさせ、入る際に持ってきておいた日本酒を堪能しています。そして私はお猪口を片手に頭上に広がる星空に目を向けます。

魔法世界でも同じように星を眺めていたこともあるのに、ここで見る夜空は懐かしい感じがします……

やはり故郷は良いですね。日本に移住してしまいませんか？

そうして数分経ったところで、ふと違和感に気が付きます。

「魔力ですか……これは転移魔法……っ!!」

的確に後頭部を狙って飛んできた氷の礫つぶてを『なかなか良いらしい（ひのき）』を使って叩き落します。

「チツ!!」

「誰ですか？私が良い気分温泉に、ってエヴァ？……色々言いたいことはありますが先ずは……さっき舌打ちしませんでしたか？そして何かを投げた後みたいな姿勢でいる事も気になりますね。ですが、今私が一番言いたいことは……何故男湯に貴女が堂々として入ってきているのです!？」

「今はリゲルと私だけだから別にかまわんだろう?」

「……まあいいでしょう。では、なぜ私に氷を投げたんですか？」

「お前が辛気臭い顔をしていたからな……って私の裸を見ていながらそんな反応とはどういうことだ?!もっとこう慌てるとか顔を紅くするとかないのか?!」

顔に出ていましたか、気を使わせてしまいましたね。

「コレでも結構慌てているんですよ？微妙に顔が熱い気がしますし……」

「本人でさえよくわからない変化に気づくはずがないだろうが！！
・・・でも、無反応という訳ではないんだな？さつきから視線が顔
以外のところに向いていないしな？」

「それはそうでしょう？流石に自分の恋人でもない女性の裸をジロ
ジロ見るつもりなんてありませんよ？」

何十年も一緒にいるエヴァにそんなことはできません。本当に大切
な私の家族ですから・・・

「（カチンッ）・・・私の前でそんなことを言うか？・・・
・・・そろそろ小娘共にも格の違いと言う物を見せ付け
なければならんしな・・・ここは強硬手段で既成事実を・・・」

「何か言いましたか？」

「いや、なんでもないぞ？・・・来たれ（アデアット）」
ボソッ

「ならいいですけど・・・いい加減温泉に入らないと風邪を引いて
しまいますよ？」

「そうだな・・・（ニヤリ）」

~~~~~  
U'U  
~~~~~

第30話 よろしい、ならば総本山だ(2)(後書き)

次回エヴァのアーティファクトが明らかになります!!

では皆さん、さようなら

第31話 よろしい、ならば総本山だ(3)(前書き)

明けましておめでとう御座います。

今回は前回のエヴァSIDEからです。

第31話 よろしい、ならば総本山だ(3)

エヴァンジェリンSIDE

私は今回の計画の協力者である巫女Aと別れた後、影を使った転移魔法で岩の影に転移した。

「~~~~~」

声が岩の向こう側から聞こえる。完全に油断しているようだ？。コレなら気づかれる前に今回の『リゲルと一緒に風呂計画』も成功しそうだな？問題はリゲルが風呂から出て行ってしまつかもしれないというところだが、そこは力技で押さえつけなければいだろう。このアーティファクトを使えばそのくらいできるだろう。

私はリゲルに気づかれないように慎重に向こう側を覗き込む。

「ッ！！／／／」

少し寂しげな表情で夜空を眺めるリゲルの様子は、『千の雷』数十発分の威力だった。

「魔力ですか……これは転移魔法」

動揺したせいで隠蔽していた魔力残滓が漏れてしまい、リゲルに氣取られてしまった。

リゲルがこちらに気づくのも時間の問題だろう。

そう考えた私は魔法で作り出した氷の礫を……自分が出せる全力の速さでリゲルの後頭部へ向けて放った！！

コレでリゲルを氣絶させることができれば、介抱と称して……
／／なんてことは断じて考えてないんだからな！！

「……っ！！」

だが氷の礫はリゲルの持っていた『なかなか良いたらい（ひのき）』
によって叩き落された！！

「チツ！！」

触れた物を凍結させる術式を組みこんだのに何故あのたらいには効かないのだ！？コレで確実に隙ができると思っていたのに！！！

「誰ですか？私が良い気分で温泉に、ってエヴァ？……」

色々言いたいことはありますが先ずは・・・さつき舌打ちしませんでしたか？そして何かを投げた後みたいな姿勢でいる事も気になりますね。ですが、今私が一番言いたいことは・・・・・・・・何故男湯に貴女が堂々として入ってきているのです！？」

「今はリゲルと私だけだから別にかまわんだろう？」

今まで一度も一緒に入ったことなんてないけどな！！入ろうとしても毎回罨が仕掛けられていて失敗したけどな！！

「・・・まあいいでしょう。では、なぜ私に氷を投げたんですか？」

「お前が辛気臭い顔をしていたからな（ノノノ）・・・・・・・・って私の裸を見ていながらそんな反応とはどういうことだ？！もっとこう慌てるのか顔を紅くするとかないのか？！」

まだ一度たりともリゲルに見せたことない私の裸を真正面から見ている癖に眉一つ動かすこともしないとは・・・・・・・・寛大（？）な私も流石に腹が立つぞ！！

「コレでも結構慌てているんですよ？微妙に顔が熱い気がしますし・・・・・・・・」

「本人でさえよくわからない変化に気づくはずがないだろうが！！
．．．でも、無反応という訳ではないんだな？さつきから視線が顔
以外のところに向いていないしな？」

これは一応異性として認識されていると言うことでいいのだな？全
くチャンスがないわけではないと言うことだな！！

「それはそうでしょう？流石に自分の恋人でもない女性の裸をジロ
ジロ見るつもりなんてありませんよ？」

「（カチンッ）．．．私の前でそんなことを言うか？．．．
．．．そろそろ小娘共にも格の違いと言う物を見せ付け
なければならんしな．．．ここは強硬手段で既成事実を．．．」

コレまで何度もアピールしているのにこの男は全く気づいていない
のだな？！いや、もしかしたらあえて気づかないようにしているの
ではないか？
それならこちらにも考えがあるぞ？

「何か言いましたか？」

「いや、なんでもないぞ？．．．来たれ（アダアット）」

「ならいいですけど・・・いい加減温泉に入らないと風邪を引いてしまいますよ?」

「そうだな・・・（ニヤリ）」

リゲルがこちらに背を向けているうちに背後に忍び寄りそっと抱きつく。

「っな!!何するんです!?!?!」

「少しからだが冷えてしまったみたいでな?暖かい物に抱きついていただけだ?/!/」

とても恥ずかしいがここまで反応してくれるのならやった甲斐があるな?こんなに顔を真っ赤にさせたリゲルを見ると・・・ムラムラげふんっ!!

「いいから離れて下さい!!色々当たってますから!!」

「フンツ!当たっているのではない、当たっているのだ!!そんなに嫌なら力尽くで離れればいいだろう?（ニヤニヤ）」

「……………なら周りのコレを解いてくれませんか？」

「そう言われて解くはずがないだろう？私のアーティファクト『歪^ワ世界^{ワールド}』からはお前でも逃れることはできない。諦めて私の思うがままになれ！」

私のアーティファクト『歪^ワ世界^{ワールド}』の能力は私が支配する世界を造りだし、この世界では私のイメージが現実として実体化する能力を持っている。

似たようなアーティファクトもあるが私の物とは比べるまでもない。無限に広がる結界空間を展開して相手を閉じ込めるアーティファクトではなく、新しく自分が全て支配している世界を造りだすアーティファクトだからな！！

今まさにこの露天風呂の内部は私の『歪^ワ世界^{ワールド}』の管理下に置かれたのだ！！

そしてリゲルは私が造りだした魔法、気、神力おも無効化する鎖で身体を四方から繋ぎとめられている。

これは…………詰んだ！！私の勝ちだ！！

「ふう、仕方ないですね？（ボフンツ！！）ニャ〜〜！（スルリ）」

「っな！！それはズルいぞ！！・・・なんて言うとも思っ
たか？猫に変化する事なんか想定済みだ！！（ガシィー）」

「フギヤツ！！」

温泉に潜られる前に空中でリゲルを捕獲した私はそのままの勢いで

「この毛ざわりは久しぶりだな・・・もふもふもふもふも
ふ・・・」

「フニヤ・・・フギヤ・・・ガクツ・・・」

「もふもふもふ・・・もふ？・・・わ、私の勝ちのようだ
な？フハハハハハハハハハ！！」

その後、エヴァンジェリンが喜々とした様子で腕の中で手と足をぐったりと垂れさせている黒猫^{リゲル}を抱きかかえて自分へ部屋に去っていった様子が巫女達によって目撃された。

第31話 よろしい、ならば総本山だ(3)(後書き)

~~~~~翌朝~~~~~

「……………」

「むにゃむにゃ……………//」

「(モニユモニユ)」

「ムフフフ……………パクッ」

「(ビクッ!ジタバタジタバタ)」

ピロリーン

「猫に悪戯されている裸少女の写真が撮れました……………至急ファンクラブのホームページにアップしないと……………」

とある巫女が撮影した写真は後に一枚数万円で取引される一枚とな  
ったらしい・・・

### 第32話 よろしい、ならば妖怪を見に行こう（前書き）

感想で『更新期待してます』と言ってくれる人がいて、ついつい浮かれて更新してしまうのがミケなのです。

### 第32話 よろしい、ならば妖怪を見に行こう

「詠春、ちょっとお願いがあるんですけど・・・」

「ん？何だリゲル。私ができることならかまわないぞ。」

「ちょっと紹介して欲しい人がいるのです。」

「それは俺の知り合いなのか？その紹介して欲しい人ってのはだれなんだ？」

「それは

」

エヴァンジェリンSIDE

コンコンッ

「リゲル？今暇か？暇なら一緒に『竜の探求？』やらな……  
……いないな……ん？これはなんだ？」

ちよつとぬらりひょんに会ってきます。

そろそろアスナちゃんも学校に行かないといけませんからね？

四人一緒に学校に通えるように頑張ってきます。

おやつはエヴァの大好きな桃のタルトを冷蔵庫に入れておきましたから仲良く分けて食べてくださいね？

リゲルより

「そういえばアスナは学校とやらに通っていたかったな？だが・・・四人一緒と言うのはどういうことだ！？もしかして私も頭数に入っていないか？それに学校とぬらりひよんはどんな関係があるんだ！？全く訳がわからないぞ！！どういことなんだ？！」

「む？どうしたのじゃエヴァ？リゲルは朝早くにどこかに行ってしまっただぞ？」

「そんなことはどうでもいい！問題は何百年の時を生きている真祖の吸血鬼たる私がお前ら小娘と一緒に学校なぞに通わなければならなくなるかもしれないと言うことだ！リゲルはああ見えて一度やると言ったことは絶対にやり遂げるからな．．．このままでは私とリゲルの時間が．．．」

「（ガラッ）朝からうるさいわよ？で、どうかしたの？」

「おお、アスナ。エヴァが妾たちと一緒に学校には行きたくないとごねておるのじゃ。四人の中で一番年上のくせにのう」

「お前達は年齢そのままだが私はお前らと違って大人なのだぞっ！  
？どうして大人の私がガキと席を並べて勉強せねばなんのだ！！  
お前ら三人だけ行けばいいだろう！？その間私はリゲルとイチヤイ  
チヤするのだ！！」

「（ガシイ！）そんなことはさせぬぞ？」

「（ガシイ！）全力で阻止するわ！！」

「（ガシイ！）・・・抜け駆けは許さない・・・」

「離せ！！はぐなぐせぐせ！！今からでも遅くない！！今からでもリゲルを探し出して説得すればって、イヴお前いつの間に？！や、止める！！お前らどこを触つてヒヤンツ！！こ、コラそこヒヤンツ！！・・・お前ら・・・もう怒ったぞ！！今日という今日は手加減なぞせずに全力で叩き潰してくれるわ！！リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！」来たれ氷精、闇の精。闇を従え吹雪け常夜の氷雪 闇の吹雪 』」

「妾も負けてはおれぬ！！ヘス・ラス・マジック・プリンセス！」「契約に従い、我に従え、炎の霸王。来たれ、浄化の炎、燃え盛る大剣。ほとばしれよ、ソドムを焼きし火と硫黄。罪ありし者を、死の塵に 燃える天空 』」

「あんななんか返り討ちにしてあげる！！咸卦法 ！！（ゴウツ！！）」

「・・・絶対・・・負けない・・・変身」  
トランス

\*\*\*\*\*

「リゲル……早く帰ってきてくれ……俺じゃ止められない・  
・」

たった数時間で京都が軽く更地になりかけたらしい……

「（ズズズズ）フォッフォッフォ。茶が旨いのう？（コン  
コン）ムッ！（探知魔法に掛からずにここまで来る者がいるとは  
う。しかも完璧に魔力を隠蔽しておるとは……）……入って  
よいぞ？」

「（ギイ）失礼します。ぬら……学園長殿。」



「いま、ぬらりひょんと言わなんだk」「近衛詠春殿からの紹介状を持ってきていますからお確かめ下さい」……まあええがのう？不審者かと思うたが婿殿の関係者であつたか、フムフムフム……ム！？ほう、お主があの大戦の英雄、リゲル殿であつたか、これは失礼したのう。」

「それで今回の用件は麻帆良に住む予定だと言うことを伝えに来たのです。今は詠春宅に厄介になってますけど、子供も生まれるようですしこの機会にどこかへ定住したいと思ひまして、同じ魔法関係者ですからお伝えしておこうということです。あと数年したら……いえ、具体的に7年ほどしたら私の家族を麻帆良学園に通わせるつもりですから」

「フォッフォッフォ、英雄の家族が我が学園に入学してくれるとは喜ばしい限りじゃのう。勿論大歓迎じゃよ」

「そこで学園長殿お願いがあるのです。」

「フォ？かの有名な英雄からお願いとは……なんじゃのう？」

「いえ、簡単なことですよ？……『私達を怒らせないでください』ただそれだけのことです。」

「それがお願いなのかのう？てつきり住む家を見繕ってくれないか

？というお願いかと思ったのじゃが？」

「それはもう手配が済んでますから大丈夫です。それにそんな貸しを作るようなお願いをするわけがないじゃないですか？どうせお願いの代価に麻帆良の警備でもやらせようとしたのでしょう？私達を利用しようと思わないでください、これはお願いけいぐです。守って貰わなくても構いませんが、その時には私が全力で報復しますから覚悟して下さい。」

「……これは手厳しいのう。じゃが流石にその態度はどうかと思うが？」

「これくらいいしないと一家の主として自分の家族を守れないのですよ。英雄の肩書きは今となっては重い足枷です。自分の為に私達を利用しようとする人たちは幾らでもいますからね。」

「なにやら言外に批難されている気がするのじゃが……気のせいかのう？」

「学園長殿に心苦しいことなればそんなことはないと思いますよ？ああ、警備のことは等価交換ということでお受けしてもいいです。それでは失礼しますね。（ヒュンッ）」

「……この部屋では転移魔法は使えぬようになっておるはず

なのじゃがのう？わしも若くないのじゃからもつと労<sup>いた</sup>わつて欲しいもんじゃわい。」

このときから今後ぬらりひょんを悩ませることになる胃痛が着々と進行していくのだが、それはどうでもいいことだろう・・・

第32話 よろしい、ならば妖怪を見に行こう（後書き）

数日前から新作を書いてみました・・・

ハヤテなんですけど予想以上にアクセス数が伸びませんね・・・

やはりリリカルやISやFATEやとあるのほう良かったのだからか・・・

でも原作はISしか持ってないし・・・はぁ・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0406y/>

---

にゃんこ(?)に転生ですか？ よろしい、ならばネギま！に転生だ

2012年1月5日20時53分発行